

---

# 鬼のユメ

狐狸川ころり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼のユメ

### 【Nコード】

N1239C

### 【作者名】

狐狸川ころり

### 【あらすじ】

異形の者…鬼である京きょうと人間である凧なぎ。十八年に一度、人である為に凧を喰らう京と、京の願いを叶える為、その身を与え続ける凧。二人は遙か昔からの長い間、出会いと別れを繰り返してきた。だが、そんな彼らに突如変化が訪れる。

## 第一幕：別れ

いつから私はこのような事を繰り返しているのだろうか？

はるか昔、ずっと昔、私が…私が……。

「ごめんね、ごめん…。風、風、風、ごめん」

涙が止まらない。胸が張り裂けそうだ。こみ上げる嗚咽が喉を塞ぐ。苦しくて苦しくて堪らない。

「泣くなよ、京。また会える、また直ぐ会えるから」

温かく大きな手が、私の氷の様に冷たくなつた頬に触れる。

堪えていた感情が、風の触れた所から体中に電流のように走り抜けた。

もう、駄目だ。

私は息苦しいほどに締め付ける胸の痛みに突き動かされ、風の胸に縋り付いた。

「風、風、なぎ…」

「また必ず俺を見つけてくれ、京。…ほんの少しの別れだ。だから笑ってくれ、な？」

「風…」

微笑もうとしてくしゃりとつぶれた瞳から涙が溢れた。

リンリン、リン…。

午前二時の訪れを壁に掛けたカラクリ時計が告げる。軽快に流れるメロディ。風が子供のころに欲しがつた時計。『この時計、凄いなだけ！月と太陽が入れ替わったり、馬と鳥が入れ替わったり。な？綺麗だろ？ちゃんと時報も鳴るんだぜ！』風は知っていたのだろうか？この時計は悲しいお伽話がモデルであることを。

鳥は妖精の王女、馬は人間の青年。

許されぬ恋に落ちた二人。

それ故に、お互いを求めたが故に…王女は昼間は鳥に、青年は夜には馬へと姿を変えられる呪いを受けた。二人は互いを伝え合う言

葉を失い、互いに抱き合う腕を失い、夜と昼の狭間、夜明けと夕方の狭間のほんの短い間にしか人の姿で出会うことが出来ない。

共に手を取り合い、愛を言葉を伝え合い、生きることを禁じられた悲しい二人。

そう…それはどこか、私たちのようではないだろうか？

「時間だ、京」

「い、や…嫌だ…！な…ぎ…」

私は己の体の変化を感じ取る。人の形から異形の者へ。だが、瞳から流れ出る涙は決して涸れることはない。

「京、俺は必ずお前の元に帰ってくる。どんなことをしても、必ず…だから、待っていてくれ」

メキリ、と骨が軋む。激しい体の痛み。だが、それを遥かに上回る心の痛み。私の脆弱な心は今にもその痛みに押しつぶされ、粉々に砕け散ってしまいそうだ。

嫌だ、嫌だ！もう、こんな事はしたくない！！嫌だ！嫌だ！い・

や・だ！

「ぐうう…な…ぎイイ…！」

私の狂気の叫びは虚空に響く。どんなに抗い、しがみ付こうとも人間としての理性も自我も全て失われていく。薄れ行く意識の端に、凧の優しい微笑と、その唇が最後の言葉を紡ぎ出しているのが見えた。

その言葉はかつて幾度となく、凧が最後の時に私へと向けてくれたもの。だが、決して私の耳には届かないただひとつの言葉。どんなに時が経っても、どんなに耳元で囁かれても、私の耳にその言葉が届く事は永遠に訪れる事はないだろう。

「グガアアア…！」

異形の者となり我を忘れた私の口から鋭く伸びた牙が、凧の無防備な喉元に躊躇なく食い込んだ。ゴキン、骨の折れる鈍い音が部屋に響く。その瞬間、妖異となって氷付いていた私の脳裏に眩しい瞬きとなって凧との思い出が甦った。凧の幼い頃の笑顔、初めて歩い

た瞬間、凧が記憶を取り戻した日、18回の誕生日、17回のクリスマス、18回の正月。笑って、泣いて、互いの温もりを抱きしめ合って過ごした18年。

ああ、また…また全てを失ってしまった。

様々な記憶が怒涛のように押し寄せ、一瞬にして過ぎ去って行く。私が今の私で居る限り何度も何度も繰り返される凧との出会いと別れ。もし私が人であったならば、人でさえあったならば…と、どんなにそう願ったか。

しかし、どんなにどんなにお願い請うても、私は自らの手で、牙で、爪で、凧を引き裂き肉の一片、血の一滴、髪の一筋すら残さず私は己の体に収める。人ではない私がせめてそうすれば、ずっと凧と一緒に居られるのではないかと、共に生きる事が出来るのではないかと…とそう思っているかのようだ。

ぴしゃり、ぴしゃり…異様に伸びた舌が全てを舐めとる。

「…な…ぎ…」

凧を喰らい尽くした私は人の心を取り戻し、異形から人の姿に戻りつつあった。長く伸びた爪が、己の所業に怯えて体を抱きしめるようにしている私の両肩に深く食い込む。

「う…うわあああ…！」

私の許されない罪。

未来永劫、その罪は消える事はない。

ごめんね、凧。それでも私は凧と共に生きたい。

「うっ…ひっく…。い、行かなくちゃ」

重い体を引きずりながら、私は凧と共に過ごした部屋を後にした。もとより家財道具は全て処分してある。残っているのは私の記憶のみ。

凧、次にあつた時にも私に笑いかけてくれるだろうか？私を思い出してくれるだろうか？

凧、私は必ずキミを見付け出す。それまで待っていてくれるだろうか？

風、私はもうキミに会いたくて会いたくて堪らない…。

## 幕間・凧ノ巻

俺は、酷いエゴイストだ。

どんなに苦しめても、どんなに涙を流させても、俺は自分だけを見ていて欲しい、他の誰にも目を向けて欲しくない。誰よりも、何よりも、俺は 京の全てを独占したい。

その為なら、俺は、何でもする。

例えどんなに悲しませても、俺は京に決して忘れさせない傷を付ける。

俺は、京の涙が好きだ。

俺は、京の美しい泣き顔が好きだ。

俺が初めて京に出会った時も、京は涙を流していた。息をするのも忘れるほど、俺はその美しさに心を奪われた。

陶器のように滑らかで透き通るほどに白い肌、黒く艶やかな髪、吸い込まれれそうなほどに深く美しい漆黒の瞳。

薄氷のように儂げなその姿は、不釣り合いな荒れ果てた岩場にゆらりと佇み、吹き付ける強い風が髪を乱し、その瞳からはハラハラと涙を散らせた。

「ごめんなさい…」

心を抉るほどに悲しみに満ちた言葉。

「ごめん…なさい…」

嗚咽が言葉を遮る。

「なぜ、泣くの？」

俺はその時まだ数えで五つになったばかりで、とても不思議だった。何故、喰人鬼が人を喰らった後に泣くの？ どうして謝るの？

何故？

「どうして、悲しいの？」

もし、この場で泣く者が居るのだとしたら、それは俺ではないのか？ 親代わりに俺を育ててくれた師匠を手もなく殺された俺ではな

いのか？

その美しい鬼は俺の姿を認めると、一瞬驚いたように目を見開き更に大粒の涙を流して消え入りそうな声で呟いた。

「ごめんなさい…」

あたりに吹き付ける風が一層強くなり、濃い闇と瘴気を連れてきた。涙に濡れた美しい鬼はその中に溶けこむように消えていく。

「待って！」

追い縋ろうとした俺の小さな手は宙を切った。もう、二度と会えないのかと思うと酷く悲しく、キリキリと心臓が締め付けられて痛かった。一緒に消えてしまいたかった。

だが俺はその時、ふと師匠が今度の退魔の仕事を請けた時の言葉を思い出した。『十八年ごとに現れては人を喰らう鬼』を滅するのだと。

ならば十八年後、俺は再びこの場に立つ。

強くなる。強くなって見せる。

俺はあの涙する美しい鬼を他の誰にも渡したくはない。

ダカラ

俺八

誰ヨリモ

強クナル。

それからの俺は、ただひたすらに美しい鬼の面影を追い続け、修行と退魔の修練を積んだ。少しでも面影が重なれば禁を冒して女を抱いた事もある。

だが、日を追う毎に心は掻き毟られ苦しさだけが募った。焦りが脳裏を過ぎる。

会いたい、会いたい、会いたい、会いたい。

今頃、あの美しい鬼は何をしているのだろうか？また涙を流しているのだろうか？傍に行きたい、触れてみたい。

それが例え自然の慣わしに背いたとしても、神に背いたとしても、構わない。

俺は、あの美しい鬼が欲しい。

長い十八年が過ぎた。どんなに待ち望んだ事か、どんなにこの時間  
間に焦がれた事か。

俺は再びあの岩場に立っていた。

「出てこい、居るんだろう？人を喰らう、鬼」

あの時と同じ、濃い闇と瘴気を含んだ風が吹き抜ける。

「何故、私を呼ぶ…？」

闇の中から追い求めた者の姿が、ゆらりと現れた。心臓が高鳴つて、今にも口から飛び出しそうなほどに早鐘を打つ。

「お前を退治しに来た」

知らずと笑みがこぼれる。

「最初に聞きたい。鬼、お前の名前は？」

酷くうるたえ、困ったように今にも泣き出しそうな顔をする。

「…名など、ない」

「そうか。ならば、お前の望みは何だ？何故人を喰らう？」

「それは…」

唇をかみ締め、俯く。

「…人に、なりたいから。人を喰らえば、人になれると聞いたから」

「そうか。人になりたいのか。でも、何故？」

「分からない。でも、私は人になりたい…」

着物の袖を握り締め、必死に訴えるその表情はあまりにも真摯で  
純粹だった。俺はこの時、永遠にこの美しい鬼を手に入れる方法を  
思い付く。

ただ単純にこの世界から消し去ってしまうのはあまりにも容易  
い。だが、この鬼に俺を恋焦がれさせ永遠に求め続けさせる事が、  
本当に手に入れる事なのではないか？

「ならば、俺を喰え。これから先、ずっと、何回でも俺はお前の為  
にだけ生まれてこよう。その代わり、決して俺以外には手を出すな。  
十八年に一度、必ず俺の体をお前にくれてやる。これから先ずっと、  
永遠にだ」

俺以外の他の誰かに触れるなんて許さない。俺以外を求めるなんて許さない。

「そんな…」

「もし、その約束を守れるのならば、十八年の間、限りなく人間に近い生活が出来るようにしてやるう」

「…出来るの？そんな事が、本当に？」

そう、俺以外の為に涙を流すなんて許さない。

「出来るさ。…守れるんだな？」

俺は戸惑いながらも、嬉しそうに頷く鬼に『京』と名を付けた。

俺は京と血の契約を交わし、この日のために学んだ退魔流派中秘中の秘である禁呪を使った。永遠に京を俺だけに縛り付ける呪法。

そう…永遠に、俺だけに。

俺は京と共に居るためならば、手段を厭わない。

どんな事でもしてやる。

例えそれによってどんな苦しみが訪れようとも構わない。俺は、京と生きる道を選んだのだから。

だから、待っていてくれ。京が望む限り俺は必ずお前の元に戻ってくる。

必ず、京の元に…。

## 第二幕：時無しの沼

今、私の目の前には肌寒くなるほどの荒涼とした静かな闇が広がっている。辺りには成りたての新米妖異や、既に古株となった妖異たちが思い思いに漂っていた。

ここは行き場の無い者たちが何時の間にか漂い、流れ着く『時無しの沼』。

何時から誰が呼び出したのかは知らないが、私を含めた皆の間ではそれを通して。ただし、正確にはここに沼や水などは存在しない。

代わりにあるのは無限の闇と酷くゆっくりと流れる時間。

不思議な事に、ここでは時間の流れが停滞し、流れ出る事が殆んど無い。水が溜まっていくように時間が<sup>よど</sup>澱んで溜まっていく。

例えるならば、浦島太郎が竜宮城で過ごした数日間が、この空間と外の空間との間に起こっているのだ。

私はこの場所に約十八年に一度、戻ってくる。それは一日でも多く風と過ごせる様に、風が生まれるまでの時間の節約する事が主な目的だ。

今までの経験上から言えば、時無しの沼での一日は外の世界の半年に相当するらしい。二日もすれば、外の世界では約一年が過ぎている。

たった一年…でも、それでも、風の居ない一年は私にとって気が遠くなるほどに長い。

会えないと云う事実が私の心を掻き乱す。

今だって、風と離れて居る事が、風が私の知らない誰かと居る事が、私を不安にさせている。時が経てばそれだけ私はその苦しさに押し潰されそうになる。

だから私は、人間になりたいと願いながらもこの時無しの沼に帰って来てしまうのかもしれない。

「ようい、京がかえってきたぞおう」

「よおおうい京がかえったぞおおう」

「翁よおうい、京が帰ったぞおおう」

ふと、私の姿を認めた数匹の妖異によって辺りが騒がしくなった。確かに、この限られた空間で、数十年、数百年と漂っているならば、自然と顔見知りになるのも無理は無い。

「ふんしゅー…なんじゃあ、もうそんなに外では時間が経ったのかいなあ？」

時無しの沼の最長老、蛙の翁かわずのおきなが、長い舌でぺろりと自分の鼻先を舐めて、左右の目を別々にキョロキョロと大きく動かした。

「お久しぶりです。お元氣そうで何よりですね、翁」

「ふんしゅー…なあにが良いものかのお。わしゃあ元氣でなんぞ居たくないわいい。ふんしゅー…元氣過ぎるから、ほれ、この通りに元の形を失のうてもうたあ」

翁は不機嫌そうに大きな岩に腰掛けたまま、両手を大きく広げて見せた。言うまでもないが翁はその名の通り蛙の妖異だ。

その姿は人間と両生類の間、不自然に前に折れ曲がった低い背丈、必要以上にギョロリと左右に大きく張り出した目、ぬめった皮膚に覆われた平たい顔を横断するように大きく引き伸ばした口、その上に鼻であるう空気孔がぼつかりと二つ開いている。

恐らく人間が初めて翁を見たのならば、生理的に嫌悪を感じるのではないだろうか？

「ふんしゅー…それにしても京よあ、お主はまだあきらめんのかのお？わしゃあ、もう、とつくに諦めてしまったんじゃがなあ。豪えらい事じゃあなあ…」

「…はは」

大概なりたての妖異は、知識も経験も知恵も無い。しかも、以前の姿であった頃の本能に縛られ、その生活から抜け出すのは非常に難しい。もし動物であったならば、殆んどが例外なく食欲に支配される。

その昔、私が翁と知り合った頃、彼も食欲に支配されていた。

ただし、翁は蛙に戻りたくて…蛙の姿に戻りたくて、蛙を喰らっていたのだから、少し話が違うのかも知れない。『戻りたい、戻りたい…蛙を喰らえば、きつと元に戻る。喰らい続ければ、何時か元に戻る…』と翁は信じていた。

そして、妖異に成りたてだった私は翁のその言葉に影響を受けた人間になりたい。

その時、私はそう思った。けれどもどうしてそう思ったのか、未だに良く解らない。何故なら、不思議な事に私には妖異になる以前の記憶が全くないのだ。

それこそ他の妖異たちは大なり小なり以前自分が何者であったのか、どんな生活をしていたのかを覚えている。

なのに私は元の姿はおろか、どうして妖異になったのか、なんで人間になりたいのか…そんな基本的な事すら知らなかったのだ。

しかし、あれから気が遠くなる程の時間を過ごしてきたにも係わらず、不思議と未だに何一つ思い出せずにいる。

『ふんしゅー…のおう、京よ。お主は一体、何を求めているのかのお？わしゃあ、随分長く生きた…長く生き過ぎたんじゃ。死ぬる事が出来るのなら、わしゃあそつしたいのお…』

『翁…』  
翁は大粒の涙を左右の飛び出した大きな目からポロリポロリと零す。

私たち妖異は自分で自分の死を選べない。

この果てない闇をずっと独りで漂い続けるか、より力のある妖異に喰われるか、誰かに消されるまで、永遠に生き続けなければならぬ。

例えば我ら妖異だとしても独りの闇は、そうそう耐えられる物ではない。だから皆、時無しの沼を抜けて外へと出て行く。

『翁は…』

私はその先の言葉を飲み込んだ。翁にとって、独りの闇以上に恐

るしいのは過ぎ去る時間なのだ。

この千変万化していく世界で、一体何が変わらずにいられるのだろうか？己だけが変わる事が出来ない辛さ。どこに居ても何をしていようと自分だけが置いていかれる。

「わしゃにああ、ここが似合いじゃ。この空間はわしと同じに時間  
に忘れられとるからのお。 似合いの場所じゃて、」

ズズツと翁は鼻をすすり、流れた涙を手の甲で拭う。

「翁……」

翁に言葉を掛けようと口を開きかけた瞬間、不意に私の目の前に闇が訪れた。時無しの沼から外の世界に引き戻される。蛙の翁の姿が闇の中に消えていく。

凧が私を呼んでいるのだ。

「おぎゃあ！おぎゃあ！」

待っていて、直ぐに行くよ。

例えどんなに遠く離れていても、私は必ず凧の元へとたどり着く。凧が居る、それだけが私を私として留めている。それだけが、独りの闇から私を救ってくれる。

凧、早く会いたい…。

## 幕間・蛙の翁

わしは気の遠くなる程の長い間を此処で過ごしてきた。

その中で気付いた事が二、三ある。

まず一つは、ここに来る妖異どもは基本的に三種類だと云う事じゃ。己が思いが強すぎたために妖異と変化する者、他の他者の思いが強すぎたために妖異とならざるおえなかつた者、滅多に居ないが…わしの様に時に忘れられ何時しか妖異と化してしまつた者じゃ。いずれも、妖異である事に変わりはない。が、己で妖異と成つたものは基本的に性質が悪い。怨みつらみの塊が元の形を留めて居る事が多く、殆んどが他者に害を為に妖異となつたようなものじゃ。人間や動物がこの分類には多いように思えるのう。

次に他者の思いによつて成つた者。これは、自分が何の為に意識を持ったのか判らず、混乱している事が多いようじゃ。だが、止む終えない場合のみ以外は他者への介入は殆んど行わないみたいじゃな。人の手によつて創られ、魂を込められた物などが基本的にこの分類に入ると云えるじゃろう。

最後は時間がゆっくりと掛けられる為、混乱もなく、ただ淡々と己が運命を静かに受け止める者たちじゃ。この分類には人以外が殆んど入るようじゃ。

じゃが…いずれにしろ、彼らは後に選択をすることになるのう。この時無しの沼を出て行くか、ここに留まるのかの二択じゃ。

大体は皆、一度は出て行く。何処かに自分を受け入れてくれる所があるのではないかと、もしくは、己の思いを遂げる為にじゃ。

わしは長い間、ずっとそんな光景を見てきた。

それこそ嫌になるほど沢山じゃ。その結果も殆んど知つておる。じゃが…一度だけわしの知つておるどの事例とも違つておる者があつた。

それが京じゃ。何故か京だけは最初からどこか違つておつた。

初めてわしが京に会った当時は、わしも妖異に成りたてで、己の意識が確立し始めた頃の事じゃったが、あの時の事だけは鮮明に覚えておる。

どこを見たとしても、明らかに人の形をした…元は人であったじやろう妖異。

じゃが…言葉を知らない、記憶が無い。

妖異に成る以前が生き物であるならば、その最後の姿がそのまま後の己の姿となると云う。じゃがそれが本当ならば…この者は一体、何処で、誰に、何をされたのじやろうか？

元が蛙であつたわしには、その有様から思いつく事など出来ようがなかつた。それ程、京の姿は痛々しく、見るに耐えられるものはなかつたのじゃ。

泥と血で塗れたその姿は、ザンバラに乱れた髪が顔を隠すように垂れ下がり、着物も体も繋がつておるのが不思議な程にボロボロに破れておる。片足などはあらぬ方向を向き、引きずられておつた。

じゃが、それ程の有様でありながら、髪の間から覗く目は別の強い意志を湛える様に異常にキラキラと輝き、背筋が凍りつくほどに恐ろしい妖気を醸し出しておつた。

わしは京以外のこんな妖異に出会つた事は無い。

京は己の思いと、他者の思いによつて生まれた殊に特殊な妖異だつたのじゃ。

体の皮膚を突き破つてしまひそうな、狂おしいまでの激しい苦しみや憎しみ…そして、悲しみ。それが二人分、複雑に絡み合い、重なり合つて妖異になつておつた。

わしは京を見た時、情けなくも体が震え、同じ妖異だと云うのに頭おしがいがガチガチと小刻みに鳴つておつた。

恐ろしい。

じゃがどうしても放つて置けなかつた。

わしは、京に妖異ならではの体の治し方や整え方を教え、意志の伝え方を教えた。

数日後には時無しの沼の外に、通常の時間の次元へと連れ出し  
おった。

それから数年後。

京は独りで行動するようになりおった。

わしは、京を残し時無しの沼に戻ってきた。

以来：京がそこで何をしていたのか、どんな者に出会い、影響を  
受けたのかは知らぬ。わしが知っているのは、京がその名を与えて  
くれた者と別れた後、この場所に戻ってきた事じゃ。

雰囲気は穏やかになっておった。表情が出ておった。笑顔を見せ  
る様になっておった。

わしは京を外に出して良かったと思つたのじゃ。

わしら妖異は本来ならば忌み嫌われる存在でしか他ならない。じ  
やがそれでも、穏やかに他の存在たちと暮らしたいと思つている妖  
異たちも存在しておる。

わしはこの時無しの沼でずうつと考えておった。

わしらは何故、存在するのかと。

何故、他の者たちと違う存在になったのかと。

しかし、未だその答えは見つからない。

わしは、京を見て考える。

相容れぬ者とは本当に永遠にそのままであるのかと。

変わる事は出来ぬのかと。

わしは永きに渡つて考えておる。

その答えはいずれ出るのじゃろうか？

きっと、その答えが出た時にわしは元の蛙に戻つて死ぬ事が出来  
るじゃろう。

わしが再び時無しの沼を出るときは、きっとその時に違いない。

わしはそう…思つておる。

### 第三幕：香風

時無しの沼から戻った私は、竹林の中で意識を取り戻した。

葉のざわめき、竹の軋む音…。

傍そばを吹き抜ける風は私を呼ぶ風の声と、甘く優しい香りを運んで来る。

風。

風が止む様を表す名前を持つ、その君の存在を吹き抜ける風が私に伝える。

「行かなくちゃ…」

風が、傍に居る。

そう思うだけで…感じるだけで…肌が、心がざわめく。

「風…なぎ」

急いそぐとすればするほど、足はもつれ、巧く前に進む事が出来ない。逸る心が私から判断力と観察力を奪っていく。

早く、早く、早く会いたい。会って風を抱きしめたい。その温もりに触れたい。

「なぎ、風、風」

風は私と別れた後、新たに女の腹に宿る。大体、その女は風を欲しいと思っていない、子を欲しいと思っていない。彼女等は子を産み落とし、間もなくその子を人目に付かぬところに捨てる。そして、私はその子を拾い、風と名付けて育てる。

その赤子は傍はたから見ればどんなに不幸な事だろう。産みの親に捨てられ、育ての親に殺される。

私は風にとんでもない不幸を背負わせて居る。それでも風は私を一度も責めたりしない。それどころか、私の手をとって共に歩んでくれる。

風、私の大切な存在。

私は風に会えなければどうなってしまふのだろうか？風が居なくな

ってしまったら…？

あまりにも恐ろしい考えに私はゾツとした。  
そんなはずは無い。

血の気がどんどんと引いていく。そんなはずは無い。今まで何度も、何度も、気の遠くなるような時間を繰り返し過ごしてきた。同じように過ごしてきた。

それでも…。

今回は何故か何処かが少し違う。

理由は解らない。解らないけど…何処かが違うと感じる。

息が苦しい。

風の方に近づけば近づくほど、久しく感じた事の無い違和感を感じる。冷や汗が頬を伝う。

「ハア…ハア……」

何だろうコレは？

言いよつの無い威圧感。遙か過去に何度も出会ったことのある嫌悪感。

風の気配が消えていく。風の声が、香りが消えていく。

「なんで…？」

私は不自然な動きをするカラクリ人形のようにギリギリと関節を無理やり動かし、半ば這うように前に進む。

この感じは、この嫌な感じは…。

そうだ、この肌が粟立つ嫌な感じは…近くに退魔師が居る証だ。あかし

私は自分が出来る極限のギリギリまで気配を消した。いま見つかれば、きっと私は消されてしまう。風に一度も会えないまま、消されてしまう。

それだけは嫌だ、絶対に嫌だ。

息を止めるようにじっとその場に身を潜め、退魔師がこの場を去るのを待った。

どの位の時が過ぎたのか、張り詰めた緊張は思いの他に私から精神力と体力を奪っていった。

その間の願いは唯一つ。

「風に会いたい、ただそれだけだった。」

しかし、退魔師の気配が去った後、私が最も恐れていた事態が起きていた。まさか、そんな馬鹿な…。

慌てて風の気配が感じられる場所に転がるように滑り込む。

「…そんな…」

震える手でそっと地面を撫でてみる。微かに残る風の香り、温もり。

ナギガイナイ。

ガクガクと膝から下が崩れ落ちる。まるで自分の体から全ての骨がなくなってしまったみたいだ。

「いやだ、そんな…嫌だ、風、なきいいい!!」

私は正常な判断力を失った。

頭が真っ白で何も考えられない。

風の気配が残るこの場所から、草を分け、地面を這い、風の名を呼びながら、指先が血で塗れるまで辺りを探し回った。

何処にも居ない。

居なくなってしまった、風が消えてしまった。

「うええっ…ひつく…ひつ…」

私は膝を抱えて座り込む。魂を引き裂かれるとこんな感じがするのではないだろうか。強く、強く、自分の体を抱え込む。

辺りはすっかりと闇に包まれていた。吹き抜ける風も、葉の音も、虫の音も何も無い静寂。更に深い闇が私を包む。

風が、消えてしまった。

ナンデ？ドウシテ？

気配だけを残し、風は私の指の間からすりりと抜けるように消えてしまった。

会いたい、会いたい、会いたい…。

風、キミは一体何処に消えてしまったの？

現実を受け止められない私は、夜の闇より更に深い闇の中に逃げ

込んでいく。誰か助けて、誰か…風…。

## 幕間・退魔師

赤子の泣き声がする。

その声はとでも力強く、しっかりしたものだ。

私はたつた今、己の力の足りなさ故に…倒すべき妖異を取り逃したばかりだった。

だが完全に消し去る事は出来ずとも、かなりの深手を負わせた筈だ。きつと当分は大人しくしているだろう。だがその当分が一年先か十年先かは不明だ。

また、私自身もかなり酷く疲労していた。外見的な傷こそ無いものの、あと少しでも相手と対峙していたのならば、生死の境を彷徨う事になっていたに違いない。

「はあ…」

溜め息が口から漏れた。

こんな仕事はやるもんじゃ無い。出来る事ならば、今ある神社を守ってひっそりと暮らして生きたい。

今年、五歳になる息子は悲しい事に…いや、幸いにか？私のような力は無い。妻と同じ様に普通の人だ。もしかしたら、私の血を引いているから少しは違うかも知れないが…。

だが、この仕事は私の代で終わりにしよう。

息子にこんな危険な真似はさせられない。力の無い者がこの仕事をすれば、みすみす死に行かせる様なものだ。

そうだな…時代が時代であつたなら、養子を取らなければならなかっただろう。だが、幸いそれについて四の五の言う年寄りも誰も居ない。

ならばいっそ、終わりにするのがサツパリとして清々すると云うものだ。

「さて、帰るとするか」

私は鉛のように重たい体に鞭を打って立ち上がる。

手入れのされていない山は荒れ放題に荒れ、ゴツゴツした岩場ですら緑に飲み込もうとする。草深くなつた足元は不安定で、散策には酷く不似合いだ。

「おぎゃあ！おぎゃあ！」

まだ、赤子の泣き声が聞こえる。

おかしい。

ここはかなりの山奥で、散策で来る様な所ではない。ましてや赤子連れを来た女が来れる様な場所ではないのだ。

視線を廻らせる。

微かな妖異の気配。

さっきのヤツか？いや、違う。

緩めた神経を張り直し、周囲の様子を伺う。

赤子の泣き声は私の所から丁度、十メートル位先の竹林から聞こえる様に思える。行かないわけには行くまい。

もしも万が一、本当に赤子であるなら…この状況は異常だ。

私は出来る限り音を立てないように前進する。

少しばかり進んだ所で、前方の様子を伺う。竹林が丁度少し開けた位置に真新しいタオルに包まれた赤子が、確かに居た。

「そんな、馬鹿な…」

その小さな手は握り締められ、力の限りに声を上げている。母を求めているのか、それとも他の何かを求めているのか。

私は足早に赤子の傍に駆け寄ると、その小さな体を抱き上げた。

「よしよし、泣くな。お前の母親は一体どうしたんだ？」

ふい、とその赤子は声を上げるのを止め、私の瞳を真っ直ぐに見つめて来た。

その涙に縁取られた瞳には、とても昨日今日に生まれたばかりの赤子と思えないほどの強い意志が存在した。

正直、今まで感じた事の無い威圧感を覚え、一瞬、顔が凍りつく。不意打ちでゾクリと何かに首の後ろを撫でられたようだ。

一体この感覚は何なんだ？

「だあ…」

そうと知ってか知らずか、私の腕の中で赤子はにこりと柔らかく微笑む。とても良く整った可愛い顔立ちだなと、なんの脈絡もなく思った。

「ぶうーあ」

ちゆくちゆくと指をしゃぶり始める。

「そんなにしゃぶると、指が溶けてしまうぞ？」

私は顔を緩め、赤子の頬に触れた。

すると、途端にビリリと指先に走る嫌な感触が駆け抜ける。緩めた頬は緊張で一気に引きつった。

この感じは…。

まさか、呪がかかっている？

それも…コレは…まさか…死の呪ではないのか？

誰がこんな赤子に呪をしかも死を招く呪を掛けたというのか！

私は髪の毛が逆立つような怒りを覚えた。生まれたばかりの命に、人の手によって死が決められている。そんな事は、あってはならない！

私はその場でその呪を解こうと試みた。だが思ったより強力で複雑な為、片手間にはとても出来そうにない。しっかり準備をした上で、確実に解除しなければ。

…いや、もしかしたら私の技量では敵わないかもしれない。

悔しさでギリツと唇をかみ締める。

「だあーだ」

だがこの時、一条の光を見た気がした。腕に抱く赤子の視線の先、この子が見つめたその先には、握れば潰せる程の小さな妖異が、数枚の羽をばたつかせて飛んでいた。

その不安定な動きを確実にこの赤子はしっかりと目で追っている。もし私が失敗したとしても、この子自身をしっかりと育ててやれば、もしか…あるいは…。

助けられるかもしれない。

「必ず、お前を助けてやる」

そう…必ず助けてやる。

私は一縷の望みを抱いて、足早にその場を立ち去った。

## 第四幕：影追い 前編

胸が、痛い。

チクチク、キリキリ、どうしてこんなに痛いんだろう？

目を、開けなくちゃ。でも、あれ？もう目は開いてるのかな？

変だよ、何も見えない。

ここは何処なんだろう？どうしてこんなに暗いんだろう？

私は何をしているんだろう？

ふと、直ぐ傍で人の気配が動いた様な気がした。

「な、ぎ…？」

恐る恐る、その名を口にしてみる。

『どうしたんだ？京』

元気な風の声、一瞬でさっきまでの胸の痛みも、不安も吹き飛ばす。安堵感で思わず笑みがこぼれ出した。

「もう、やだな、脅かさないでよ。ねえ何処に居るの？変なんだよ、ここ、暗くて何も見えない…」

手探りで風の姿を探す。

『ここだよ、ここ』

直ぐ傍で聞こえる声。

「どこ？本当に、見えないんだよ…？ねえ、風、一体、何処なの？」

『俺は、ここだよ』

少し、声が遠くなる。

「風？」

不思議に思っていると、更に声は遠くなる。

『ここだよ…』

「ねえ、どうしたの？なんだか、遠い」

少しの沈黙。

『…さよなら』

ズシンと、心と体に響く言葉。ショックで顔から音を立てて血の

気が引いていく。

「嫌だ、どうして！？待って！風、なぎい！」

空を切るように私の手のひらは地面を叩いた。

「なぎ…」

そうだ、私は風を見つけられなかった。記憶が一気にフラッシュバックする。

「ふっ…え…」

傍に…直ぐ傍に居ながら、見失った。

こみ上げてくる嗚咽で喉の奥が痛い。収まっただはずの胸の痛みが、再びキリキリと心臓を締め付ける。

こんな事は一度もなかった。

私が風の気配を完全に見失うなど、今まで一度たりとも、決してなかった事だ。例えどんなに離れていようと、私たちはお互いの存在を肌で感じる事が出来ていてた。まるで表裏一体のように、それこそ確かに私たちは目に見えない何処かで繋がっていた。

なのに、今度ばかりはそうではなかった。

まるで、糸がプツリと切れてしまった様に、風の存在が感じられなくなってしまうた。どんなに思い起こしても、どんなに考えても、まるで原因が分からない。

ひよつとしたら風を失った実感すら、今の私には何処か希薄なのかも知れない。自分なのに、違う誰かの身に起こっている様に、遠く遠く感じている。

可笑しな話だ。

風を見失ったショックの余り、無意識に時無しの沼…しかも妖異ですら滅多に踏み込まない、光もなく時の流れもない最深部に逃げ込んでおきながら、ホントの所はその感覚が麻痺しているだなんて私は一体何をしているんだらう？

ゆつくりと頭を巡らせる。止めどなく頭に浮かんだ言葉を一個一個吟味しては、ふるいにかける。

風。

ハタとそこで思考が止まる。

私はこの時無しの沼で、どれ位の時間を過ごしてしまったのだろうか？

急がなければ、凧が待っている。こんな所でのんびりと油を売っている訳には行かない。

私は振り切るように涙を手の甲で拭くと、立ち上がった。

もう一度、行ってみよう。

凧を見失ったあの場所へ…。

## 第四幕：影追い 後編

冷たい草の香り、湿った土の匂い。

私が風を見失った日から、随分と季節は移り変わっていた。

竹林自体は季節に変わりなく、依然とその美しい碧あおさを茂らせている。しかし、足元は移り行く季節を表さずには居られない。

確か：あの時はまだ夏の初め、初夏よりはや盛夏に近かったかもしれない。しかし、今は隆盛を誇った草は大人しくなり、秋の訪れを感じさせていた。

サク、と草を踏み分ける。

今、私が丁度立っている辺りに、あの時は風の気配が残されていた。僅かな温もり、優しく甘い風の香り…。

「風…」

そつと指を触れてみる。

ヒヤリとした土の感触が伝わって来た。

分かっていたつもりだけれど、胸がチクリと痛む。

「ごめん」

私は一体、何を期待していたのだろうか？もうココには何も残っていないと、解っていた筈なのに。

膝から崩れ落ちるように、その場に横たわった。

ココに、風が居た。

私は涙を堪えるため、胎児のように強く膝を抱えて丸くなる。

一段と強く感じる草の香りと土の匂いが鼻腔を刺激する。涙を堪えようとすればするほど、ソレは鼻の奥を締め付ける痛みに変わる。

「ねえ…風…。一体、何処に居るの？」

頬に触れる草がひんやりと、腫れたように傷む心を冷やす。

傍に居るのが当たり前だった。

出会えない事など、一度もなかった。

独りが…独りになる事が、こんなに辛いと云う事を私は忘れてい

た。

「…つつ…ふつ…」

まるで自分の一部を無理やり剥がされた様に、心も体も痛くてたまらない。息をすることすら、痛みになる。

「…つつ…く…」

その痛みに耐える為、強く強く、自分の体を抱きしめる。消えないうちに、どこかに行ってしまったように、凧にもう一度会うまで、自分を見失わないように…強く抱きしめる。

ザワ、ザワリ…。

風が嫌な感じを運んで来た。

覚えのある、とても…嫌な感じ。

耳の後ろの毛がチクチクと逆立つ。覚えのあるソレそれは酷く禍々しく、血の匂いと様々な怒りと憎しみを纏っている。

「キ、キ、キ。よおう、懐かしい気配があるから誰かと思えば、チビじゃねえか、え?」

ゾクつと全身が総毛立つ。

「キヒツ、なんだよ、ツレナイじゃねえか、え?俺のコトを忘れちゃったのか、え?昔はあんなに一緒にいるんだじゃねえか、え?チビよあ?キヒヒヒ!」

ネットリと絡みつく視線、耳障りの悪いシャガレ声。

「ムジナ…」

ゆっくりと体を起こし、声の方へと向き直る。

もう、二度と会うことはないと思っていた。

「キ、キ、キ、なんだ、ちゃああん覚えていてくれてるじゃねえか、え?チビ。ちょっと見ない間に、見違えちゃったぜ、え?随分と、本当に、人間臭くなりやがって、え?キヒヒ」

私の視線の先に、ユラリと佇む人影があつた。

丸い形のつばがある黒い帽子を被り、黒のロングコートの襟を立て、ポケットに両手を突っ込んでいる。帽子と襟の僅かな隙間から、明らかに人間とは異なる、鮫のように鋭い牙が並んでいる口元が見

えた。

「ムジナ。貴方こそ、随分と様変わりしましたね」

「キ、キ、キ、この方が獲物が掛かり易いんでねえキヒビ。それでも、ココに辿り着くまで、随分と時間は掛かつちまったがねえ…キヒビ」

私はコイツが嫌いだ。

醜く、貪欲で、汚い。

「キ、キ、キ、おやおや、どうしたんだ、そんなに怖い顔をして、え？チビ。感動の再会じゃないか、え？」

ムジナにとつて、自分以外は全て利用するだけの道具だ。その利用価値がなくなれば直ぐに消し去る。

そう…甘い言葉で相手を散々利用し尽くし、邪魔になれば心の赴くままに相手を黜<sup>なぐ</sup>り、弄び、その悲痛な叫びを楽しんでから腹に収める。

そうやって、コイツは力を付けて来た。

私も以前、独りの寂しさに付け込まれ、その甘い言葉に踊らされてきた。

「キ、キ、キ、チビ、お前は自分の価値を分かっていない、え？チビ、お前にはその価値があるんだ、え？」

悔しさと情けなさで体が震える。忘れていた筈の怒りが甦る。

「キ、キ、キ、ほうら、見てみな、え？綺麗な顔じゃないか、え？チビ、人間はお前のその顔に、価値を見出すのさ、キヒビ。綺麗な顔、綺麗な声、キ、キ、キ、獲物の数はお前の価値の証しさ、キヒビ」

その時の私は、自分の存在価値が欲しかった。自分の居る理由が欲しかった。…だから、私はそのムジナの言葉に心を引かれた。

ムジナの言う通りにすれば、きっと誰かに認められるのだと、信じてしまった

「キ、キ、キ、折角の懐かしい再会じゃないか、え？どうだ、もう一度組まないか、え？チビ。俺たちは、実にいい組み合わせだったよなあ、え？チビ」

ポケットの右手を引き抜き、私へと差し伸べながらムジナは一步、また一步と近づいてくる。

胸がム力つく程の嫌悪感が、怒りが、私の姿を妖異へと近づける。「止める！それ以上、近づくな！」

「キヒ？」

身内を駆け巡る禍々しい力が、消し去るべき獲物を探して荒れ狂う。

「それ以上、一步でも近づいて見る…私は、躊躇わずお前を消す！」

「キ、キヒヒ、チビ、そう短絡的に物を捕らえるなよ、え？」

ムジナは顔色をサツと変え、素早く後ずさる。

「私は本気ですよ」

「キ、キ、キ、そうか、残念だ、え？また上手くやれると、思ったんだがなあキヒヒ…」

ムジナは軽く飛び上がると、クルリと身を翻す。

「キ、キ、キ、実に残念だよ、え？チビ、お前は獲物と仲良しゴツコして、人間になったつもりか、え？」

私は一瞬、凧の顔が脳裏に浮かんで凍りついた。まさか…。

「…なら、チビ、お前が自分がどんな者が思い出させてやるとしようか、え？キヒヒ」

「ムジナ！まさか…」

かつてない怒りと恐怖がこみ上げる。体の震えが止まらない。

「キ、キ、キ、人間ってのは美味しいよな、え？しかも、チビ、お前が心の底から欲しがっているなら、なお更だ、え？キヒヒヒ！」

「キサマー！」

「キ、キ、キ、せいぜい、俺より早く見つけるんだな、え？チビよ！キヒヒヒ」

掴みかかろうとした私をムジナによって起こされた強風が阻む。

強く渦を巻くように吹き付けるその風は、ムジナに利用されている妖異たちの気配が混ざり、ムジナ自身の気配を消す役割を持っているた。

「キヒヒ、楽しみだよ、え？チビ。キヒヒヒ…ヒャーハハハハ！」  
「待て！ムジナあ！！」

風に視覚と聴覚を塞がれ、ムジナの気配も掻き消えていく。  
なんて事だ！

影のように張り付く私の過去が、凧を苦しめる事になる。

余りにも愕然とするその事実には、全身から痺れた様に力が抜け、  
ぐったりと地面に崩れ落ちた。

ムジナは私を苦しめるために凧を利用してしているのは明らかだ。

駄目だ、それだけは絶対に駄目だ！

そんな事は絶対にさせない。

私は凧を守る。

その為ならどんな事だってする。

して、みせる。

私は強く拳を握り締め、決意を胸に立ち上がった。

## 幕間・ムジナ

自分以外のものなんて、どうでもいい。

ミンナそうだろう？

誰が誰を利用しようと、誰が何を壊そうと、自分に係わりがなければ、それは、何もなかったと同じコトだ。

見えなければいい、聞こえなければいい、何処で、何が、起ころうとも関係ない。

誰の身にどんな不幸が起ころうとも、自分が他人を苦しめようとも、自分が苦しみを味わわなければ、一向に構わない。

特に人間と云う者は、そこに突出した生き物だ。

本当に、面白い。

恐ろしい程までに、他人に無関心になれる。

そこに誰が居ようとも、目の前で苦しんでいようとも、死に掛けていたって、見なかったコトに、聞こえなかったコトに、居なかったコトにしてしまえるのだから。

だから、誰が俺のしているコトを責められる？

何故、酷いと言える？

お前ら人間の方がよっぽど酷いではないか。

「キ、キ、キ、私が怖いか、え？キヒヒ」

「あ…う…ひ、ひいっ！」

今、俺の目の前には、ガタガタと震え、正体もなく腰を抜かした男が居た。

服の趣味は、そうだな、悪くはない。しっかりとスーツを着込み、皺一つない真っ白なワイシャツに、穏やかな色合いのネクタイを締めていた。

だが、その男の足元にはこの男に散々利用され、絞りつくされ、苦しめられた女たちが、憎悪の塊となって、この男を逃がすまいとしがみ付いている。

まったく、こういう獲物は大歓迎だ。

「キ、キ、キ、お前はよっぽど酷い男なんだなあ、え？俺も、良くそういわれるが、キヒヒ、後処理はしっかりやっておくモンだ、え？じゃなきゃ、こういう目に遭うコトになるのさ、キヒヒヒ！」

「や、やめ、助け…ひ、ひやああ…！」

俺は大きく口を開け、男を丸ごと、勿論、足にしがみ付いた女たちの影もろとも飲み込んだ。

クチャリ、クチャリ…。しばらく口の中で獲物を転がす。

俺が喰らうのは人間の魂だ。肉なんかには興味はない。

ゆっくり時間を掛けて魂だけを喰らう。

その間に、俺の足元には肉の処理をする妖異共が集まり始めていた。

クチャリ…クチャリ…ふむ、こんなものか。

ベロリと男の体を吐き出す。

その男は目を剥き出し、喉を掻き毟るような格好で固まっていた。そこへ、小判ザメのように俺について回る妖異共が我先にと群がって行く。

「キ、キ、キ、魂が抜けても、え？痛みは感じるだろう、え？苦しいか、キヒヒ」

男の耳元に口を付けて囁いてみる。当然、男は答えることなど出来はしない。

恐らく肉の一欠けらになっても、喰われる痛みは感じているだろう。

「キ、キ、キ、キャハハハ！ヒーヒツヒツヒ！」

俺は人間共が獲物として来た、動物や、人間に傷つけられた植物や様々なモノの恨みが<sup>おっ</sup>澱のように溜まって成った者だ。元から哀れみなどの感情は持ち合わせていない。

人間によって苦しめられた、全てのモノ達の恨みや憎しみや悲しみが、俺を生み出した。

実に、愉快的話じゃないか。人間に獲物とされたモノが、今度は

人間を獲物として存在を続けている。

だが…もし純粹に獲物と云うなら、この俺の元に居る妖異共だつてその内の一つだ。俺が人間の魂を好むのは、単に他者からの恨みや憎しみが張り付いているからに他ならない。

人間共の恨みや憎しみは俺の力を増す増強剤になる。多く取れば取る程、俺の力はどんどん増していく。

俺はそれによって相手を手もなく捻り潰せる圧倒的な力を得る。

ソレは俺にとって非常に気持ちの良いコトだ。気に入らなければ力でねじ伏せ、それでも駄目なら消してしまえば良い。

しかし、一度だけ、過去に俺の元から逃げ出したヤツが居た。

チビ。

あいつは特別だ。泣き叫んで、苦しんで、散々のた打ち回らせてから、ゆっくりと味わってやる。

折角、あれだけ目を掛けてやったのに。

あいつは、まだまだ利用できた。それこそ、チビを餌にすれば、殆んどの…いや、全部の人間が再びあいつを見かけた場所に戻って来た。

まずチビを一目見れば、どんな唐変木だろうとその姿が目には焼きついて離れなくなる。そして、四六時中考えてしまふ程あいつは人間に欲望を抱かせる容姿をしていた。

人間は見もしない、居もしないチビの恋人に嫉妬の炎を燃やし、憎しみを抱く。それこそ、チビを殺してでも己の手に入れてやる、とさえ思いつめる。

俺にとってそれは好都合だった。

獲物は自ら俺に力を与えにやって来る。

チビさえ居れば腐るほどそんな人間が阿呆面下げてノコノコとやって来る。だから、俺はチビを可愛がつてやった。それこそ、役に立たない他の妖異共を全て消去して、あいつだけを俺の元に置いてやるつもりだった。

だが、ある時、突然、チビは俺に齒向かった。

『私は、もう…こんな事は…嫌だ…！』

チビは俺が他の妖異を黽りながら喰らうコトが許せない、と言う。泣きながら、命を乞う妖異と人間の姿に耐えられない、と言う。

俺はチビのその生意気な言葉に激昂し、二度と逆らわないようにチビを痛めつけた。まずは右手をもいで喰らい、次に両足を膝下から切り落とし、喰らってやった。

『キ、キ、キ、お前ら、チビの顔以外は好きに喰らっていいぞ、え？』

他の妖異共もけしかける。最悪、首から上さえ残っていれば、幾らでも再生が可能だ。まあ、じわじわと喰われる痛みは、想像を絶する程だろうが…構いはしない。

『キ、キ、キ、どうだ、え？苦しいか？キヒヒ。俺は寛大だ、キヒヒ。謝れば許してやるぞ、ヒヤハハハハ！』

だが、チビは謝らなかつた。悲鳴すら、上げようとしなかつた。

『ムジナ…貴方は…！』

チビはそう言うと、唇をかみ締め、俺を睨み付けやがった。

俺はその言葉を嘲ってやろうと口を開けた。だがその次の瞬間、グワンと音を立てて空間が歪み、魚眼レンズの様な景色がグルグルと回りながら迫って来た。

余りにも唐突に起きたそれは、俺から平衡感覚を奪い、気が付けば、そのまま為す術もなく、地面に叩きつけられていた。気が付けば他の妖異共も同じ有様だ。

俺はその時、思い違いをしていた事に気付く。

チビの能力は、人間を魅惑し、惑わす、その容姿だと思っていた。だが、本来は違う能力を持っていたのだ。

今の今まで俺はその力に気付いていなかった。

それを悟ったとき、俺はかつてない屈辱感と怒りに我を忘れた。

『許さんぞ、チビイイ！！』

炎のように駆け巡る怒りは周囲の景色を変えてしまう程、凄まじい風を起こさせた。

「切り刻む、切り刻んでやるぞおお！！チビイイ！」

風を起こしている俺自身ですら、視界も聴覚も全て失う程の暴風が山肌を削り、草木を粉々に砕き、見渡す限りの荒涼とした景色を作り上げる。何もかもが砕け散り、せいぜい残っているのは、俺と辛うじて削られずに済んだ岩ぐらいだっただろう。

変わり果てた辺りを見回し、俺は満足した。

この様子なら、チビも粉々に砕き、完全に消し去っただろう。

しかし、住み心地が良かっただけに残念だが、もうこうなってはこの地に居る事は出来なかった。これだけ派手に暴れれば、人間の五月蠅い退魔師共がやってくるのは目に見えて分かっていた。

危ない橋は、渡らないに限る。

住み慣れた古巣を後ろ髪引かれる思いだったが、それでも俺は心地よい満足感を感じながらその地を後にした。

それからどれ位の年月が流れたのか、ふと、何故だか懐かしいこの地を思い出し、再びこの地を拠点に獲物を狩りを始めるコトにした。

ところが、だ。

今度は思いもよらない退魔師の出現に、思いもよらない痛手を蒙ってしまった。回復するまで、息を殺してココで過ごし、再び別の場所に移動しなければならぬ。

だが突然、そこに殺した筈のチビが現れた。

千載一遇のチャンスとはこの事だろう。

しかもチビは、辺りを憚らず己の弱点を曝け出していた。俺はその姿に素晴らしいアイデアを思い付く。その余りの面白さに、思わず喉を鳴らして笑ってしまった程だ。

今はまだ不味い。気付かれないように息を潜めて、チビをそつとやり過ごす。

俺は近い未来に手に入れるであろう、その甘美な時を思い描いて、じっとチャンスを窺って、その場に潜み続けた。

もう少しだけ、待ってみよう。

楽しみは、最後まで取っておくものぞ。  
なあ、そうだろう？

## 第五幕：出会い

凧の気配が不安定だ。

現れては消え、消えては現れる。

毎日、現れる場所が変わり、消える場所も違う。その度：私は凧の手がかりが消える度に、泣きそうになる。

どんなに早く走ろうとも、追いつけない。手が届きそうになる度、凧は消えてしまう。

凧の笑顔が、声が、温もりが恋しい。

恋しくて、恋しくて、恋しくて………苦しい。

このまま会えないならば、きつと私は花のように枯れてしまう。歩く事も、息をすることも、きつと出来なくなる。

肌寒さを増す暗い夜の道に、行き先の見えない自分の姿が重なる。道とは何処までも果てしなく続き、それ自体には終わりなど存在しない。もしも、無限に続くそれに終わりがあるとするならば、その道歩く者のみだけが知っているという。

ならば、今、私の前の道は一体何処まで続いていくのか？ポツリポツリと等間隔で並ぶ街頭の明かりが、一層、闇を濃く見せていた。私は、一瞬足がすくんだ。

闇が怖いわけではない。ただ：その闇の先が無限でない事を知ってしまったから、私の道の終わりが、そこにある事を知ってしまったから。次の一步が踏み出せない。

蛙の翁の言った通りだ。

所詮、私は妖異だ。

人に鬼と呼ばれている、妖異だ。人間とは相容れない存在：改めてそれを認める事は、私にとって身を引き裂かれる思いだった。

凧と会わないという事は、私にとって、私の人間の部分を全て失う事になる。完全なる人間性の消滅。それは人間になりたいと願った私の全てが、再び失われるという事だ。

でも、それすらも今は構わない。

凧を守るためならば、私はどんなに醜い姿を晒そうとも構わない。もしもムジナが凧を見つけてしまったら、何をするか、私は知っている。ムジナの考えている事など、とっくに見当が付いている。

だから、だから、私は凧に会わない。

しかし、でも、それなら、今の自分の行動は相当な矛盾だ。

会いたい、会ってはならない、会いたい、会うなど許されない…。頭と心が別の生き物のように、私の体を揺り動かす。

せめて、一目でも…すれ違うだけでも…。けれども、そんな私の我が儘がどんなに危険な事態を招くとも知れない。

それなのに、頭では分かっている、どうしたら良いのか分からなくなる。

気が付けば、まるで甘い蜜に吸い寄せられる蝶のように、凧に吸い寄せられてしまう。

「凧…」

ごめんね。

私はいつも凧に迷惑を掛けてしまっている。

今だって、凧に二度と会わないと決心しているのに、離れるのが一番の安全であると知っていながら、私はそれが出来ずに、一目でも会いたくて探している。

大切なのに、守りたいのに、何時も私は凧を傷つけ、苦しめてしまっ。

凧、ごめんね。

私は涙が堪えきれなくなり、直ぐ傍の塀にもたれ掛かった。

ココには何度も通り掛かって、どんな場所なのか知っているうちの一つ…小学校。昼に来ると子供の賑やかな声が響いていて、生命力に溢れている。

凧の気配を追ってココに出るといふ事は、きっと今、凧は小学生なのではないだろうか。何年生なのだろうか？背は高いだろうか？また日に焼けているのだろうか？

そう想像を巡らせては、また涙が零れ出す。  
弱い自分に、腹が立つ。こんな事では駄目だ。ムジナから風を守ることなんて出来ない。

零れた涙を乱暴に袖で拭い、大きく息を付く。

「……！！」

その時、前方から何か私にとって不快な者が近づいてくるのが感じられた。

何だろう？ムジナではない、当然、他の妖異でもない。

でも、首の後ろがチクチクとざわつく。恐らく人間なのだろうが、どうしようもなく体が竦んだ。

「あの、どうしたんですか？大丈夫ですか？」

少し遠くから、男にしては少しキーの高い声が聞こえた。

「大丈夫です」

私はその声に答えながら、相手との距離を測った。逃げようと思えばいつでも逃げれる。すると、私のその思惑を知ってか知らずか、声の主は小走りに街頭の明かりの下に現れた。

「誰か人を呼びます…か…」

その顔はまだあどけなさの残る少年で、驚いたように目を見張っている。

一瞬の沈黙。

私たちはお互いに何も話せなかった。言葉が出なかった。

上手く表現できないけれど、体中を蛇が這い回るようなゾワゾワした嫌な感覚に包まれる。それは非常に不快で、しかし何処かで覚えがあるようでもあった。

少年は困ったように強張った顔を少し引きつらせ、戸惑いながら言葉を発した。

「あの…以前、何処かで…？」

「いえ…」

私はそう答えながら一歩後ずさった。すると少年は私を追うように一歩前へ出る。

「あの、大丈夫ですか？顔色が…」

「大丈夫、で…」

そう答えながら更に後ろへ下がろうとした時、突然ズキンと足に激痛が走った。

「…いつつ！」

私はそのあまりの痛みに顔が歪ませ、倒れるように座り込んだ。

私の姿に驚いた少年は、咄嗟の行動だったのだろうが、私に駆け寄り体を支えようと手を伸ばした。

ほんの一瞬、その指先が私に触れる。

「う、あ、あああ！！！」

首に、肩に、腹に、背中に…ありとあらゆる体のパーツから、吐き気を催すほどの激痛が沸き起こる。

「ぐ…かはっ…う、うう…」

又ルリと生暖かい感触が額に感じられた。

鉄臭い、匂い。

少年は驚きのあまり、顔が青ざめ棒立ちに立ち尽くしている。

私はゆっくりと額に伸ばした手を見る。痛む体を、確認するように、触れてみる。私の目線には明らかに赤い、真っ赤な血が付いていた。

なぜ？

分からない。一体、私に何が起きているのだろうか？

激しい眩暈、吐き気、痛み、頭の中に声が響く。

『……て……しまえ……』

「…な、に？」

『…お……の……せい……だ……』

「やめ…て」

『お……まえ……な……ど……』

「や…」

『お前など、死んでしまえ！』

「……！！！」

ビクリと体が震え、体の痛みが消えている事に気が付いた。再び、ゆっくりと自分の体を見 回すが、先ほど見た血は何処にもなかった。

夢、だったのだろうか？

「あの…本当に大丈夫ですか？あの、これ、本当に余計なお世話かも知れないんですけど…さっき、コンビニで買ったばかりのお茶飲んで、良かったら、どうぞ」

少年はまだ心持ち青ざめた顔で、私にペットボトルのお茶を差し出した。私を気遣うより、自分の心配をした方がいいのではないだろうか。私の目から見ても、今にも倒れてしまいそうに見える。

「…ありがとう。優しいんだね」

私は出来るだけ優しく微笑み、少年の手からペットボトルを受け取った。

「いえ、そんなんじや…」

少年は今しがたまで青かった顔を真っ赤にして、胸の辺りで手を一生懸命振っている。

「本当に、親切にありがとう。もう大丈夫だから」

その姿が余りにも一生懸命なので、私は思わずクスリと笑ってしまった。

「そうですね、良かった」

少年はホッとしたように微笑むと、少し考えたような表情になつて言葉を続けた。

「僕、この先…って言っても、ちょっとまだ離れてるんですが、神社って言うか、お寺って言うか、変な門構えなんですけど…その息子なんです。だからって別に何が出来るって訳じゃないんですけど、何か僕に出来ることがあったら何でも言つて下さい。って、なんか変ですよ？なんだろう、僕、何言ってるのかな…」

少年は頭をかきながら、私から目を逸らし、最後は恥ずかしそうにゴニョゴニョと言葉が尻すばみに消えていく。

「えっと、とにかく、僕、かみつき ゆきこ守月幸人って言います。何時でも来て下

さい、あの、お邪魔しました！」

守月幸人と名乗った少年はおもむろに頭を下げると、走り去ってしまった。私はその場にポツンと一人残される形になる。

「私はまだ名乗ってなかったんだけど……」

またクスリと笑ってしまった。何だかああ云う感じ、ちょっとだけ風似ている。優しく、自分のことより人の心配をして自分が二の次、でも、自分の言いたい事が先で、言い切るまで言葉が挟めない。

何だかとても不思議な感じがした。

今までで初めて、風ではないのに、風を少し感じた気がした。そして何よりも不思議だったのが、守月くんが一瞬、私に触れた時に起きた事。あれは一体なんだったんだろうか？

私はふと手元にあるペットボトルに視線を落とす。あの、夢とも現実とも付かない感覚。あれは一体なんだったんだろう……。

胸につかえるような重苦しい疑問を抱えながら、私は再び道を歩き始めた。

目の前の闇は今まで以上にその深さを増している……。

## 幕間・凧ノ式

最近、良く夢を見る。

誰かが泣いている。その姿を見た俺は、もの凄く胸が痛くなる。泣いて欲しくない、なのに俺の手も声も相手には届かない。焦りと、悲しさと、自分に対する怒りで一杯になる。

泣かないで、ごめん…ごめん…ごめん…。

「ごめん…」

大体、いつも謝る自分の声で目が覚める。俺は一体、誰に謝っているのか、夢で泣いているのは誰なのか。

布団に体を起こし、掛け布団ごと膝を抱え込む。泣きたい気分なのに、俺は涙を流せない。頭の中に居るもう一人の俺が涙を止める。涙を流せば、大事な何かを失う…と言う。

だから俺は今まで涙を流した事がない。義母に言わせれば、赤ん坊だった頃から俺は涙を流した事がないらしい。

ゆっくりと布団から這い出し、三歩だけ足を踏み出す。

そう云えば、人に言わせれば俺の歩き方は変わっているらしい。足を地面から離さず、擦るように歩くからだそうだ。自分では一度も意思した事はないけれど、不思議なものだ。

手を伸ばすと、吐き出し窓のガラス戸を開けて、雨戸を開ける。外から流れ込む、冷たい濃い草木の匂いが、朝の訪れをハッキリと印象付ける。

けれども、まだ夜は空けきっていない。薄暗く、朝の光と夜の闇がせめぎ合っている、朝とも夜とも付かない時間…俺の一番好きな時間だ。

「相変わらずだな、もう起きたのか？」

部屋のドアが静かに引かれ、義父が顔を覗かせる。

「一度でいいから、お前を起こしてみたいもんだな。おはよう」  
呆れたような、感心したような、その表情は複雑だ。

「おはよう」

俺は機械的に返事をする。別に、義父も義母も嫌いなわけではない。が、俺の居場所はココではないと知っているから、馴れ合う気はない。とは言え、今まで育ててくれた恩はある。

だから義父に言われるまま、義兄と共に朝の修行、夜の修行、山行、滝行：諸々をこなしてきた。そして義父は、義兄ではなくやたらと俺に術を教え込みたがった。まあ、その度に義兄に嫌われていくのは確かだった。

気にしないとえば嘘になる。他人の家庭に理由は何であれ紛れ込んでしまったのは間違いないのだから。

そんな事を考えながら、ノロノロと着替え始める。それにしても今日は酷く体がダルイ。修行用の着物に着替えるのが億劫にさえ感じる。

「はあ……」

知らずと溜め息が漏れた。

回りには子供だと言われる。しかし、頭で考えている事は、自分でも可笑しな程、子供ではないのだ。ふと気が付けば、だいぶ前から同じ年頃の子供とは遊べなくなっていた。

テレビにも、漫画にも、ゲームにも：まあ、ゲームは種類にも由るけれども、まず興味がない。

好きな事と言えば、昔の文献を読む事だったり、術の完成度を高める事だったりする事位だ。昔の文献にいたっては、何故だか現代の本を読むように難なく、スラスラと読む事が出来る。むしろ、今の本より文章的には読みやすさすら感じる位だ。

俺は机にある、古ぼけた本に目を遣った。あの本は最近見付けた物で、義父ですら読む事が出来なかつた代物らしい。なのに、俺には簡単に読む事が出来ていた。

内容はこの神社に既に無くなった秘術らしい。

今、俺が世話になっているココは、神仏混合の神社とも寺とも付かない所だ。でも名前だけは神社付くので、便宜上は神社で通って

いる。そしてもう一つ、表立ってはいないので何とも言えないが、義父は裏業とでも言うのか、退魔師としても仕事をしているらしい。丁度、十二年前、俺は義父のその仕事帰りに拾われたと聞いていた。何故、義父が俺を拾ったのかは未だ良く分からないが、正直、余計な事をしてくれたと思っっている。

それが偽りのない俺の本当の気持ちだ。

ようやく着替えを済ませ、本堂へと向かう。廊下はまだ暗く、本来なら電気を点けるところ だろうが、俺はどうやら普通より夜目が利くらしい。余計な明かりはそれこそ俺の邪魔になる。

いつものように隣にある義兄の部屋の前を通り過ぎる。が、今日は何故かその前で一瞬足が止まった。

無言で部屋の入り口を見やる。何だろう、この気配は？

何だかとても懐かしい。まるで、今さっきまで見ていた夢に引き戻されたような感じがする。

京。

その単語が突然ふと頭に浮かんだ。その瞬間、ハッと、目が覚めたような感じがした。

そうだ、京だ。

これはとても大切な言葉だ。きっと俺は、何かとても大事な者を忘れている。

「あれ、どうしたの？ 那岐<sup>なぎ</sup>、僕に何か用でもあるの？」

ぼうつとした視線の先、いつの間にか義兄の部屋の扉は開いていた。そこには不思議そうに俺の顔を覗き込む義兄の顔がある。

「別に。…オハヨウ」

クルリと廊下の先に視線を戻す。けれども、この感じ、この悲しい気配…。

「ねえ、兄さん。もしかして昨日、何かあった？」

どうしても気になり、背中を向けたまま聞いてみる。

「え…？ 何かって？」

顔を見なくても相手の動揺が伝わってくる。

「なにか、変わった事だよ。…あつた？」

「べ、別に何も無いよ？どうしたんだよ、急に？」

その場を取り繕うような言葉。義兄は嘘が下手だ。

「そう。なら、いいんだ」

「変なヤツだな。ほら、那岐、急がないと父さんに叱られるよ」

変に明るく言い切る言葉。本当に、嘘が下手だ。義兄は俺の顔を見ないように、通り抜けざまに軽く俺の頭を叩き、急いで本堂へと向かった。

俺の目には、その背中が心なしか、嬉しそうにみえた。そして俺は、言いようもない不快感がこみ上げるのを感じた。それは、何処か、大切にしていた宝を勝手に触られた様な不快感に、とてもよく似ていた。

イライラしながら、本堂へと入る。すると、そこに今まで見たこともない女の人が義父と向かい合って座っているのが見えた。ココに、義兄の姿はない。

義父は俺の姿に気付くと、少し考えた風な表情をする。

「那岐、こつちへ来なさい」

義父が俺を呼びつけた。しびしびその声に従う。

「…なぎ？」

その女の人は、俺の名前に眉根をしかめた。

「こちらは仙道芳華せんどう ほうかさんだ。この度、仙道流本家の当主になられた方だ。挨拶しなさい」

俺は義父の左隣に座ると、床に手を突いて頭を下げた。

「守月那岐かみつき なぎです。はじめまして」

「仙道流当主、仙道芳華よ。ヨロシクね。面倒だから、芳華さんって呼んでね」

仙道流当主はにこやかに俺に微笑み掛ける。その張りのある声、華やかに微笑む顔を見る限り、恐らく、かなり若いはずだ。

俺と仙道流当主はしばらく互いを見つめ合った。

あの若さで当主となるからには相当な使い手と見るべきだろう。

相手は、俺を穴が開くほど凝視してから、深い溜め息を一つ吐いた。「…なき、ね。ごめんなさい。昔の知り合いと、名前が一緒だったものだから」

少し、困ったような表情をしてから、彼女は席を立った。

「守月さん、今日は朝早くから失礼しました。当主就任の挨拶はまた後日、改めて行う予定ですので、どうぞ、お手数ですがようがお越し下さい。…そのときは、是非、那岐さんと幸人くんも一緒に。失礼します」

チラリともう一度、彼女は俺を見る。

「そういえば、私の知り合いに、凧の他に京という人も居たんですよ…。それでは」

意味ありげに言葉を残し、本堂を後にしていく。義父は彼女を見送るために一緒に席を立った。

京、だつて？

頭の中でカチカチと、まるでパズルがはまるような音がする。

京、芳華、何処かで…？

パツと一瞬視界が白く染まった。そこには、まるでスクリーンに映し出される映画の様に様々な記憶が次から次へと展開していく。

黒い髪、白い指、悲しみを湛えた黒い瞳。涙、笑顔、そして、そして…。

『凧！』

踊るように、軽やかに走り寄ってくる、美しい胡蝶のような姿。

「京…！」

今まで当てはまらなかったピースが、ぴったりと嵌った。全てが思い出される。それと同時に、俺は走り出していた。

裸足で境内に飛び出し、芳華の後を追う。

「芳華！！待て！！」

驚きを露に振り返る芳華と義父。

「芳華！てめえ！まさか京に何かしたのか！？」

女とは言え芳華の方が背が高いので、胸座を掴む事は出来なかつ

だが、飛び掛るように術を使う利き手を押さえ込んだ。

「那岐！なんて口の利き方を…！」

驚いた義父が俺を羽交い絞めにして芳華から引き離す。

「芳華！何か言え！！芳華あ！！」

取り乱した俺に手を焼く義父を横目に、芳華は俺の前に仁王立ちになると、右手を一線、俺の左頬を振りぬいた。

パン。

一瞬、その場に居た全員の動きが止まった。境内の木々の間から鳥が鳴きながら飛び立っていく。

「何ですって？！ふざけるんじゃないわよ！アンタこそ、こんなトコで何してんのよ！？京に何かしたかですって！？それはこっちの台詞よ！バカ！！」

その言葉と同時に、今度は左手で右頬が打ち抜かれる。

芳華の肩を怒らせ怒鳴りつけるその姿は、先ほどの落ち着いた当主の姿ではなく、頬を紅潮させて涙すら流している少女の姿だった。「京は私の、私の…たった一人の友達なのよ？京は、私の親友なんだから！凧！アンタが、アンタがバカだから、京が居なくなっちゃったんじゃないの！！」

「芳華…」

次に言う言葉が見つからなかった。

「京に…京に何かあったら、私は絶対に許さないんだから！！凧の、バカ！」

芳華はその場に膝を着いて、声を上げて泣き崩れた。

啞然とその姿を見ていた義父の手は緩み、俺はそこからすんなりと抜け出すことが出来た。芳華の傍に片膝をついて座ると、彼女の振るえる肩に手を置く。

「悪かったよ」

芳華は俺の小さな体に、縋り付くように顔を埋める。

「探したの…探したのよ。いっぱい、いっぱい探したの…でも、見つからなくて…凧と…同じ…名前の子が居るって、聞いて…もしか

したらって…」

言葉が途切れ途切れになりながら、芳華は言葉を続けた。

「京が、居なくなつて、凧も消えて、皆、みんな…貴方たちの事、忘れてて…」

「だから、悪かつたつて。まったく…これだから、女は面倒なんだ。京は、誰に頼まれなくなつて俺が必ず見つけ出してやるから、もう泣くなよ」

「…うん」

柄にもなく、芳華に優しい言葉を掛けてしまった。自分で言っておきながら、尻の辺りがむず痒くなる。

「那岐、これは一体…？」

一人、置いてけぼりを食つたような義父が、丸くなった目を見張りながら、俺たちを見下ろしていた。

「別に」

短く一言だけ答える。それは、これ以上の質問を許さない強い拒否の言葉だった。

俺たちの関係を人に話すのは酷く面倒だ。もとより、話す気など全くないが。

促すように俺は芳華を立たせると、迎えの車まで義父と共に送っていった。無言のまま、芳華は車に乗り込む。俺も無言のまま見送る。もう、互いに言葉を掛ける事はなかった。

ただ、義父だけは何か言いたげな雰囲気を出していたが、状況として何も言い出すことが出来ないでいる。

ゆつくりと芳華を乗せた黒塗りの車が走り出す。

俺はそれと同時に、車に背を向けて境内に戻っていく。義父は慌てて俺の横に並んだ。

「那岐、仙道さんとは何処で知り合つたんだ？」

俺はその質問に答えず、頭の中で今日までの出来事を繰り返していた。俺の術には何の落ち度もないはずだ。だとすれば、原因は一つしか思いつかなかつた。

立ち止まり、義父に向き直る。

「…俺に、解呪の法を掛けたな？」

「何だつて？」

義父は俺の言葉に険しい表情になる。

「俺の呪法は間違つていない。なら、原因は一つしかない。俺に、解呪の法をやったんだな？」

義父は無言になり、険しい表情は更に険しさを増した。

「…言つてる意味が分からないが？」

「嘘を吐くなよ。ま、どうせ全て失敗したんだらう？俺が、まだこうして生きてるって事は、そういう事だからな」

「何だつて？」

「術は返されれば、術者自身に跳ね返る。そういう事だ」

俺はこれほど冷淡に物を言えるのだと、頭の片隅で思っていた。

確かに育てて貰った恩はある。だが、俺の邪魔をする者は誰であれ許さない。

「まさか…おまえ…?!」

驚きと絶望にも似た表情を義父は浮かべて、目を見張っている。

「…さてね」

そう一言返すと、俺はサツサと踵を返し、部屋へ戻って行った。

呆然と立ち尽くす義父の姿が目の端に映る。

「那岐…お前は…」

その問いかけには答ええない。

俺は、自分の大切な者の為だけに生きる。今までも、そしてこれからも。

京、俺はお前の為だけに生きている。

部屋へ戻った俺は手早く着替えを済ませると、そのまま家を飛び出した。

俺は俺の居るべき場所へと戻るんだ。

夜が完全に空け切った、明るい空。その空同様、今の俺には何の迷いも無かった。

## 第六幕：再会 前編

喉が干上がった様に渴き、吐く息が熱を持って熱い。

そう云えば昔、凧が風邪を引いた時に似ているんじゃないかな、などと私はぼつととした頭でぼんやりそんな事を考えていた。

妖異でも、具合が悪くなる事があるなんて知らなかった。人間と同じで、これは風邪なのだろうか？それとも、別な何かなのだろうか？

冷や汗が頬を伝い、顎の先から雫となって滴り落ちる。

私は明け方に自分の異変に気づいてから、出来るだけ人目の付かない場所へと移動して来た。いつもの様に凧を追い駆けて、街中には目立ってしまおう。

「…っはあ」

体が鉛のように重たく、だるい。瞼を動かすことさえ、酷く億劫に感じる。

正直、今、自分が何処に居るのかも良く分かっていない。ただひたすら、人の居ない方へ居ない方へと進む内に、現在の場所に辿り着いていた。

冷く湿った土の匂いが心地いい。もたれ掛かった石垣が、ヒンヤリと私の体を冷やしてくれる。

私は草の感触を頼りに辺りをゆっくりと見渡した。人の手が加わった様子があるから、恐らくここは古い山道だろう。

しかし、人の通っている感じがないところを見ると、荒れ放題に伸びる雑草も頷ける。今は、山の獣たちがしばしば利用しているようだ。

ふと目を遣ると、ちょうど私の座っている位置から、凧の居る町が草のを通して小さく覗いて見える。

「今…何を、してるのかなあ…」

静かに瞼を閉じて、熱くなった息を吐き出す。苦しい筈なのに、

何故か不思議と笑みが零れた。自分でも変だなと思う。この苦しさを、痛みを、凧が感じたことがあると思うと…今、自分がその苦しさを、痛みを、感じられていることに、喜びすら感じているのだから。

草木を揺らす風が、虫や鳥などの小動物の声を運んで来た。半ばまどろむ様に耳を傾け、身を委ねる。すると、時無しの沼ではないけれど、自然と時間の感覚が薄れていくのを感じた。

どれ位の時が経ったのか…私は天頂にあつた太陽が傾き、山が静かになった事に気付いた。まだ閉じていたいと云う瞼を無理矢理押上げ、首を廻らして辺りを窺う。

山は昼間と少し様子を変え、夕日が木々の長い陰を落としていた。シンと静まり返った山の中で耳を澄ますと、驚くほど自分の心臓の音が酷く大きく聞こえて来た。頭上の木の葉を揺らす風、飛び立つ鳥の羽音。全ての音を取り出して手で触れるのではないかと錯覚してしまう。

更に良く耳を済ませると、風の揺らす葉音に混じって別の音に気が付く。

「…い。おー…い…」

人の声？

草を踏み分ける足音、誰かに呼びか掛けているらしい声。私はじつと身構え、声がする方を凝視した。果たしてこのまま私に気付かず、通り過ぎてくれるだろうか。

「おーい、何処だよー？親父がカンカンだぞー？」

私の祈りとは裏腹に、声の主はどんどんと近づいてくる。

「なあ？居るんだろー？おーい…あっ」

声の主は、自分の進んできた山道の端に私の姿を見付けると、驚いた顔のまま凍り付いた様に固まってしまった。私も同様に、驚きのあまり動く事が出来なかった。

「あ、貴方は、昨日の…」

「キミは…」

二人はほぼ同時に声を上げた。

「どうしたんですか？こんな所で。ちょっと、顔色が凄く悪いですよー！」

相手は殆んど悲鳴に近い声を上げた。

私は普段の倍以上に重くなった体を、どうにか気力で押上げた。

「大丈夫、だから…」

これ以上、近づかれないように距離をとる。もし…今の状態で昨日と同じ痛みに襲われたら、きつと耐えられない。

「大丈夫って…顔が真っ青を通りこして、真っ白じゃないですか！救急車呼びますか？あ、でも…こんな山の中じゃ…。親父呼んで、車出してもらいます！とにかく、病院行きましょう！！！」

幸人と名乗っていた少年は、私へ手を差し出すと躊躇わずに近づいて来た。

「本当に、だいじょう…」

私は本能的にその手を避けるように、後ろへと下がる。

「遠慮してる場合ですか！そんなんじゃ、死んじゃいますよ！！さあ！」

強引に距離を縮められ、行き場を失いかけた私は、石垣に背中を押し付けた。何とかこの窮地を脱擦る為、言葉を捻り出そうと口を開きかける。

「本当に…」

と、その時、私の傍を懐かしい匂いを乗せた柔らかな風が通り過ぎていった。

「え…？」

この感じは…この感じは…。

私は体の痛みもだるさも忘れ、慌ただしく辺りを見回す。

「そんな、まさか…どうして…」

「どうしたんですか？」

少年の問いかけに答えられない。

震える手で口元を覆う。

この、体の隅々まで伝わってくる暖かな感情。風が運んでくる、甘く優しい香り。

それは…。

「な…ぎ…」

風が近くに居る。どんどん私に近づいてくる。

「な…ぎ…なぎ…」

どうしよう、どうしよう、風が近くに居る！

「風！風！何処に居るの？私は、私は…！！」  
此処に居る。

その言葉が喉の奥に詰まって出てこない。声が出ない。

どうしよう、嬉しさで自分自身をコントロール出来ない。

「…なぎって、まさか、どうして…弟を、知ってるんですか？どう云うことなんですか？」

困惑気味に、少年は私を見た。恐らく聞きたいことが沢山、その頭の中に溢れているだろう。上手く言葉に出来ない気持ちは、彼の行動となって現れた。

「ねえ！どう云うことなんですか！？」

少年は私との距離を一気に縮め、私の両肩を握る様に掴んだ。

「やつ…！」

私は直後に来るであろう、昨日の痛みにも身構えて体を強張らせる。

「ねえ！答えてください！どう云うことなんですか！？」

少年は力任せに私の肩を揺する。

「や…放し…」

私とその手を振り払おうとしたその瞬間、背後の石垣から幼い少年の声が響いた。

「その手を離せ！なに勝手に、俺のモンに触ってんだ！！」

私たちはほぼ同時に声の方へ釣られる様に視線を上げた。

すると、其処には夕日を背にし、キリッと引き締まった表情の少年がすつくと立っていた。

少し長く伸びた黒髪、日に焼けた肌、健康そのものにスラリと伸

びた手足。そして、見るものを射抜いてしまうような、力強い、輝きに満ちた瞳。

「凧…」

「那岐！」

凧は私たちの声に答える様に、ふわりと軽やかに石垣を飛び降りる。

「京！」

少年はそう私の名を呼び、溢れんばかりの笑顔を浮かべると、子犬の様に私の胸へと飛び込んで来た。体にしっかりと、その軽い衝撃を感じる。

私は驚きの余り、膝と腰から力が抜け、地面にストンと座り込んでしまった。

夢じゃ…ない。

私を腕の中から見上げる強い眼差し、微笑みかける口元。震える手でそつとその頬に触れてみる。少年は目を閉じ、小首を傾げるように応えてくれた。滑らかな小麦色の肌、指先に触れる艶やかな黒髪。

夢じゃ、ない。

私の唇はわななきながら、掠れた声でその名を呼び、壊れ物を扱う慎重さで腕の中へと抱き締めた。

「な…ぎ…凧…！」

凧の、匂いだあ…。

甘く、柔らかかな、その太陽の様な香りは、枯れ掛けた私の心をひたひたと満たしていく。

私は今、この現実が数え切れないほど見た夢でない事を、確かめる様に何度も何度も凧の体を抱き締めた。小さな手が、力強く私の体を抱き締め返してくれる。お互いに力の限り、二度と離れないように、しっかりと抱き締め合う。

腕から伝わる凧の温もり、柔らかかな体の感触。

張り詰めていた心の糸がプツリと切れた。涙が堰を切ったように

溢れ出す。

「なぎ…！ずっと、ずっと、会いたかった…会いたかったんだよお…！！」

凧に会えたことが嬉しくて、嬉しすぎて、頭の中が真っ白になっている。もう何も考えられない、考えたくない。

ああ、神様。私がこんな事を言える存在ではない事は分かっています。それでも、それでも、この僥倖を誰かに感謝せずにはいられない…ありがとうございます、本当にありがとうございます。

「凧、凧、もう、何処にも行かないで。何処にも…！独りは嫌だ、もう、独りは嫌だ…」

凧の暖かな手が、そっと優しく私の頬に触れる。

「京。俺は居るよ、ずっと傍に居るから」

私の目を見詰め、凧はハッキリとそう言ってくれた。

「ずっと、傍に居る」

「凧…」

私は再び涙が溢れるのを感じた。嬉しくて、幸せで、それなのに涙が止まらなくて…。

凧が傍に居てくれるだけで、こんなに心が満たされる。こんなにも、安心できる。

「京、大丈夫か？顔色が悪い」

額に当てられた凧の小さな手、心配そうに眉根を寄せた顔。それが全部、気持ち良くて目を閉じた。

「うん、大丈夫。凧が居てくれれば、大丈夫」

一度、大きく息を吸い込んで吐き出した。何だか、さっきより頭がふらつく気がする。

「…馬鹿。こんなになって、大丈夫なモンか」

半分怒って、半分悲しそうな顔をして凧は私をそっと横に寝せた。「今、楽にしてやるから」

凧はそう言うや否や、手早く己の左の親指を傷付け、私の額に何か描くと印を切り、呪しゅを唱え始めた。

## 第六幕：再会 後編

凧の声は抑揚を抑えたまま、静かに流れていた。

そのゆつたりとしたその音の旋律は私の耳に届く傍から消えてなくなる。

私たち妖異の耳には、人の唱える呪<sup>まじ</sup>は、言葉としてではなく、流れる音として感じられるだけなのだ。

そう…何故なのか、言葉として捕らえる事が出来ない。

では、何故、呪に怯えるのか。

音は我々を見えない鎖となつて縛りつけるものだから。

信じられないかも知れないが、音は時として人間ですら殺す事が出来る、最も恐ろしい…見えない凶器なのだ。

だからこそ我々はその旋律を嫌う。

しかし、今、凧が唱えているのはそれとは違うものだ。

世界には様々な音が溢れ、それぞれの固体が好む音と、そうでない音が無数に存在し、それぞれを取り出し、組み合わせることで、多種多様な旋律が生まれてくる。

中でも聞く者にとって心地良い音だけを組み合わせれば、その者の力になり、不快な音だけを組み合わせれば、その者を傷付ける。

今、凧が唱えているのは、正に私にとっての前者だ。

体が地面にゆっくりと溶け込んでいく様な、フワフワした心地よい感覚。

目を開けてみると、夕闇に包まれていく森の最後の一瞬が霞む視界の中で揺れていた。

「…凧、ありがとう」

思ったより私の声は力がなく、自分ですら聞き取り辛い程に掠れていた。吐く息が、まだ燃えるように熱い。

凧が私の額に手を翳す。心配そうに覗き込む顔が、今にも泣き出しそうに可愛い。

「馬鹿、礼は終わってから言うもんだ」

暫く凧は思案するように視線を彷徨わせると、何を思い付いたのか、突然立ち上がった。

「おい、兄貴。独鈷杵とくこしよ持ってるんだろ？貸してくれ」

横柄な物言いで幸人くんに手を突き出す。

「那岐、お前、一体何をしてるんだよ？大体、独鈷杵なんて…何に使うつもりなんだ？」

怒りとも言える幸人くんの質問は、凧の鼻先で一笑に伏された。

「…ふん、知ってどうする？持っているのか、持っていないのか？あるなら、貸せ」

有無を言わせない凧の言葉。

「わ、分かったよ」

幸人くんは渋々と腰にぶら下げていた小さな袋から、凧の要求した物を取り出して直接手渡す。その後、不安そうな視線をチラリと私に落とした。

凧は私の傍に胡坐をかいて座り、また、呪を短く唱える。

「京、俺の膝に頭を乗せられるか？」

「うん…」

私は頭を持ち上げ、少しだけ横に体をずらす。頭の下に、凧の細い足が差し込まれる。

「苦しくないか？」

心配そうに覗き込む凧に、私は黙って頷いて見せた。

「…そうか。さて、じゃあ、目を瞑って」

頬に優しく小さな手が触れ、やんわりと瞼の上をなぞる。私は言われるままに凧に身を任せた。

再び凧の声が短い旋律を唱え、細くしなやかな指が私の唇に触れた。

苦しい息を吐き出す為に薄く開かれた口元は、凧の指の動きに敏感に反応する。

「…あっ」

「口を、もう少し、開いて…」

私の口の中に、凧の指がするりと入り込む。

舌の先に、甘く、甘く、甘く、甘く…広がる懐かしい味。

これは…。

「ん、んーんっ！」

私は驚きの余り思わず眼を見張って、凧の元から逃げようとした。

「馬鹿、逃げるなよ。なあに…心配する程のモンじゃない。大丈夫だ」

優しく微笑む凧の顔が、涙で歪んで見える。

なんて事だ。

私は、また、凧を傷付けてしまった。

凧は私に自分の命を与えてくれている。まだ幼い体で、私に、その命の源を注ぎ込んでくれている。

「馬鹿だな…泣くなよ」

そう言いながら、凧は嬉しそうに笑う。

だって、どうして泣かないでいられるだろう？凧にこんな事をさせてしまったのに…どうして、泣かないでいられるだろう？こんなに、嬉しいのに…。

凧の手指を伝わって注ぎ込まれる赤い流れは、私の体を隅々まで満たしてゆく。

「な、な、なにしてるんだよ！那岐！！お前、変だよ！病人に、何してんだよ！？」

幸人くんの半分裏返った素っ頓狂な声が響く。

「血とか、何だよ、ソレ。意味、解んないよ！何やってんだよ！？」

彼は凧の元に走り寄ると、その手から独鈷杵をもぎ取った。

「僕はそんな事の為に、コレを渡したんじゃないよ！止めるよ！お前、おかしいよ！！この人、早く病院に連れて行った方がいいって！」

「…外野は引っ込んでろよ」

そう凧は氷の様に冷たく言い放つ。

「京の事は、俺が一番良く知っている。何を、どうするかは、俺が決める」

「那岐!!!」

「うるさい! 触るな!!!」

凧は乱暴に幸人くんの手を振り払う。

「お前に…とやかく言われる筋合いはない」

刃物のように鋭く相手へ向けられる視線。それだけで、人を刺し殺してしまえそうだ。

「那岐…」

幸人くんは凧の容赦ない物言いに、ショックを受けたのだろう、糸の切れた操り人形のように、力なくその場にな垂れてしまった。私は凧の手をそつと握って、ゆっくりと体を起こす。凧のお陰でとても体は軽くなり、さっきまでのダルさも熱も嘘の様に引いていた。

少年の細い腕は私の手にも容易く収まり、引き寄せれば簡単にその体を抱き締める事が出来てしまう。

「…京?」

私は凧の手首に付けられた傷口を舐めて出血を止めた。

「駄目だよ、凧。そんな風に言っちゃ駄目」

「……………」

凧は不満そうに口を尖らせ、私の胸に額を押し当てる。

「…俺は、悪くない」

ボソツと呟いて、そつぽを向いてしまった。

「変わってないね、凧」

私は笑い出したいのを堪え、再び凧を抱き締める。

「ね、凧。ありがとう。すっかり良くなったみたい」

耳元でそつと囁く。

「当たり前だ。俺は、お前の為だけに居るんだから。京の為なら何でもする。京の願いなら、何でも叶えてやる」

さっきまでの不機嫌は何処吹く風で、凧は満面の笑みを浮かべ、

自信たっぷりそう断言した。

「うん」

私も満面の笑みで答える。しかし、その場に独り取り残された形になった幸人くんは泣きそうな顔で呆然と立っていた。

「…ナンダよ。変だつて、アンタたち。僕だつて此処に居るんだ。ちゃんと、分かるように 明してよ！那岐、その人とお前、一体何なんだよ！！」

幸人くんの悲痛な声が闇に包まれた森の中に響いた。

「会ったばかりなのに、恋人みたいに抱き合つて、ベタベタくっついてさ！変だよ、可笑しいよ、絶対！！那岐なんか、まだ子供じゃん！」

拳を体の両脇で握り締め、小刻みに体を震わせて顔を紅潮させている。

「キモチワルイよ…。那岐は！どうして、いつも、僕の前に…！」

闇の中に押し殺すように嗚咽が響いた。

私はチクリと心が痛んで、思わず目を背ける。

しかし、凧は違った。

「…だから？」

冷たく、とても冷たく言い放つ。

「兄貴には関係な…」

「凧、駄目…！」

思わず私は凧の口を手で塞いでいた。

「駄目だよ、そんな事言っちゃ駄目」

なんで？と凧は私の顔を見上げる。

そう…昔から凧は、他人にとっても冷たい所があった。冷酷な物言いや態度を隠そうともしない。まるで世界には自分たち以外の者が居ないかのように振舞う事さえあった。

妖異である私ですらそう感じるのだから、人間だつたら尚更だろう。

どうにもやり切れない空気が満ちる中、森の中を一陣の風が吹き

ぬけた。葉の擦れ合う音や鳥の羽音が、やたらと大きく響く。

と、次の瞬間、幸人くんは私たちに走り寄ると凧を私の腕から引き剥がし、地面へと叩きつけて馬乗りになった。

「つつ…」

「お前さえ、お前さえ…!!」

幸人くんは涙の跡も乾かない目を大きく見開き、無表情に凧の首元へ独鈷杵を当てた。

「もっと、早くにこうすれば良かったんだよ」

そう呟くとともに、幸人くんは振り上げた手を凧の胸へと勢いを付けて振り下ろした。

「止めてえ!!」

私は自分でも気付かぬ内に凧の体へと飛びついていた。背中に鋭い痛みと、衝撃が走る。

「くあつ…!!」

「京!!」

青ざめた顔で凧が私の名を呼んだ。

「う、う、うわああ!!」

幸人くんはヨロヨロと後ろに尻餅を付くように座り込む。

「馬鹿!何してるんだよ!京!」

「凧…も、幸人くん、も…落ち着いて。私は、大丈夫、だから。だいじょ…う…ぶ…」

「京!!」

意識がどんどん遠くなる。

あれ…?

ああ…何だかこんな感じ、昔にもあったなあ。

痛くて、誰かが私の名前を呼んで、凄く眠い。

とても眠くて眠くて…。

私は凧の声を遠くに聞きながら、深い眠りに落ちていった。

## 幕間・幸人

誰かを憎む事は悪い事だ。

僕はそう思っている。だからこそ、今まで一生懸命、憎まない様に努力してきた。

それなのに…心の中にある僕の闇は日増しにその領域を広げていく。もう、僕一人では抱えきれない程に、大きくなっていった。

「母さん、僕、ちょっとコンビニに行つて来るよ。何か買ってくる？」

台所に立ち、夕飯の後片付けをしている母の背中に声を掛けた。

忙しく動かしていた手を止めて、にこやかに振り返る。

「大丈夫よ。もう夜も遅いから、気を付けて行くのよ」

「うん。ねえ…」

父さんと那岐は？

その言葉は飲み込んだ。聞かなくても分かっている。

「なあに？」

不思議そうに首を傾げて聞き返される。

「ううん、なんでもない。行つて来ます」

「そう…？いつてらっしゃい」

母は体が丈夫な方ではない。昔も今も顔色は青白く、押したら折れてしまいそうな程に細く…影が薄い。最近はだいぶ良くなったが、ちよつと前までは起きている時間より、布団に横になっている姿の方が遙かに多かった。

子供の目から見ても、常に消え入りそうに儂く、脆い存在に思える。

だから、僕は母に心配を掛けたくない。

僕の中にある醜い心を知られたくない。

僕は玄関に向かう道中、締め切られた本堂の扉へと一瞬目を遣り、チクリと胸が痛んで直ぐに逸らした。

父さんは、僕より那岐の方が好きなんだ…。

ギョツと唇を噛み締める。

半ば逃げ出すように玄関に着くと、靴を引っ掛けるように外へと飛び出す。

止まりたくなかった、振り返りたくなかった。

一気に石段を駆け下り、そのまま走り続けてコンビニに向かう。

僕は、父さんも那岐も嫌いだ。

うつん、違う。

…僕は、那岐に嫉妬しているだけだ。

「はあっ…はあっ…」

小学校の前まで来た時、息が上がって立ち止まった。暗い校庭の先に、更に深い闇を湛えた校舎がポツカリと大きく口を開けて佇んでいた。

ゾクリと背筋に悪寒が走る。何だって夜の校舎は何故あんなに不気味なんだろう？小さく身震いをしてその場を足早に通り過ぎる。

僕は昔から暗闇が言いようもなく怖かった。

十七になった今でも本当に怖いと思うし、夜のトイレも出来るだけ行かないで済むように、寝る前には水分を取らないようにしている程だ。

高い塀に囲まれた小学校を抜けると、一つ信号を越えた先に目的地がある。

あともう少しだ。

僕は出来るだけ周りに目を遣らないように、足元に視線を落としながら歩いた。

そう言えば昔、父さんが那岐を拾って来た時…五歳だった僕は喜んでんだっけ。あの時は純粹に兄弟が出来た事が嬉しかった。

夜のトイレも、僕がお兄ちゃんなのだから怖がっちゃいけない、と思った事を覚えてる。

父さんは拾ってきた赤ん坊に名前を付ける時、大昔の退魔師で最も力を持ちながら、突然消えてしまった人の名前を付けた。その子

を拾った山が、丁度その人が消えた所だからだそうだと。  
ナギ。

漢字は違つかもしれないけれど、そういう名前だったらしい。今  
思えば、その時から父さんは那岐を可愛がっていた。僕に教えない  
事でも、那岐にはどんどん教えていた。

正直、その事に気が付いた僕は悔しくて泣いた。

那岐がどんどん成長すればする程、父さんの那岐への肩入れは尋  
常ではなく思えた。その度に僕は独り、取り残されていく。

家族なのに、血が繋がっている家族なのに：家の中で僕は独りだ  
った。

「いらつしゃいませ」

コンビニの店員は目を手元から上げずに、声だけ発する。きつと  
僕の存在も、他の客の存在も彼には関係ないのだろう。ただ、ひた  
すら手元だけに集中し、その他の全ての事を排除しているみたい  
に見えた。

僕は真っ直ぐドリンクコーナーに向かい、別に特別欲しかった訳  
ではないけど、新発売と書いてあったお茶を手取る。ついでに、  
レジの傍にあったチョコを一つ。

無言のまま僕は店員にお金を渡し、店員も虚ろな表情のままお釣  
りを寄こす。

「ありがとうございました」

静かに自動ドアが開閉し僕は再び夜の闇の中に戻っていた。もと  
来た道をひたすら足早に、足元を見ながら歩く。

また学校が見える正門のところまで来る。見なければ良いのだろ  
うけれど、怖いものほど見ずには居られない。

恐る恐る視線を上げる。その視線の先には暗闇に包まれた校舎が  
見える筈だった。ところが実際に見えたのは、僕が想像した物とは  
全然違っていた。

この時、僕は生まれて初めて息を呑むと云う事を体験した。

校門の扉にもたれ掛かる人影。その人は苦しげに眉根を寄せ、大

粒の涙を零していた。華奢な体付きで、陽炎の様に今にも消えてしまいうた。

でも、僕が本当に息を呑んだのは、その人の美しさにだった。

黒く艶やかな髪は、夜だというのに光を滑らかに反射し、抜けるように白い肌が一層美しさを増す。スラリと素直に通った鼻筋、形の良いふつくらとした唇は少し色を失っていたが、それでも桜の花を思わせる。涙に濡れた瞳は、長い睫毛に縁取られ、更にその大きさを強調していた。

全てに於いて均整が取られた、美、と云う文字がそのまま当て嵌まる。

それこそ、余りにも現実感を欠く程の美しさだ。

「あの、どうしたんですか？大丈夫ですか？」

思わす声を掛ける。その人は僕が突然声を掛けたために、ビクリと体を振るわせた。

しまった、驚かせてしまった…と少々後悔する。

「…大丈夫です」

硬い声だけれど、とりあえず返事をしてくれたので、僕はホッと胸を撫で下ろす。

「誰か人を呼び…ます…か…」

僕は今度こそ驚かせないようにゆっくりと近づいた。しかし、その人に近づけば近づく程、頭の片隅に妙な違和感が起こった。

なんだ、コレは…モヤモヤと気持ちが悪い。

その人も僕を見上げたまま固まっている。お互いに見詰めあったまま何も話せなかった。

僕は、この人を知っている…？いや、そんな筈はない。こんなに綺麗な人ならば、一度会ったら忘れる筈がない。

「あの…以前、何処かで…？」

きつと僕の顔は不自然な表情だったに違いない。その人は更に困ったような顔をする。

「いえ…」

その人はそう答えて後ろに一步下がる。何故だか僕は釣られるように追って一步前へ出てしまう。

どうしよう、何か言わなきゃ、変に思われる。

「あの、大丈夫ですか？顔色が…」

「大丈夫、で…」

その人がそう答えて後ろへ下がろうとした時、突然倒れるように座り込んだ。

「…いつつ!」

僕は驚き、思わず駆け寄って体を支えようと手を伸ばした。

ほんの一瞬、その指先だけが触れる。

「う、あ、あああ!」

すると、その人は悲鳴に近い声を上げて、震える手で自分の体を抱き締めてうずくまってしまった。

「ぐ…かはっ…う、うう…」

どうしよう。

一体僕はどうしたら良いんだろう？僕は自分の顔から血の気が引いていくのを感じた。体はまるで虫ピンに刺されたみたいに動くことが出来ない。

とにかく、何か言わなくちゃ…！僕は何かに急き立てられるように言葉を搜した。

「あの…本当に大丈夫ですか？あの、これ、本当に余計なお世話かも知れないんですけど…さっき、コンビにで買ったばかりのお茶なので、良かったら、どうぞ」

その人は僕に青ざめた顔ではあるが、優しく微笑んでお茶を受け取ってくれた。

「…ありがとうございます。優しいんだね」

嬉しさと恥ずかしさで、顔が火照るように熱い。

「いえ、そんなんじゃない…」

「本当に、親切にありがとうございます。もう大丈夫だから」

その人はそう言うと、面白そうにクスリと笑ってくれた。僕はと

ても嬉しくて、本当に嬉しくて、思わず顔がほころんだ。

「そうですか、良かった」

でも、もう大丈夫とはとても思えない。僕は心配になり、本当は直ぐに自分の家に案内して休んで貰いたかったけど、それではあんまりにも慣れなれしすぎる。それで、考えに考えた言葉がコレだった。

「僕、この先……って言っても、ちょっとまだ離れてるんですが、神社って言うか、お寺って言うか、変な門構えなんですけど……その息子なんです。だからって別に何が出来るって訳じゃないですけど、何か僕に出来ることがあつたら何でも言つて下さい。って、なんか変ですよ？なんだろう、僕、何言ってるのかな……」

言っているうちに、何だか急に恥ずかしくなってきた。頭をかいで、つい目を逸らしてしまう。

「えっと、とにかく、僕、守月幸人って言います。何時でも来て下さい、あの、お邪魔しました！」

とにかく恥ずかしくて、頭を大きく一回下げると、足早にその場を立ち去ってしまった。家に着く前に、あの人の名前を聞く事を忘れた事に気付いたけれど、今更引き返す事は出来なかった。

「はあ……ばかだなあ……」

そう呟きながらも、僕は嬉しかった。初めて、那岐の事も何もかも忘れる事が出来たのだ。今まで、重たく長い鎖のように僕を縛り付けていた物から開放された爽やかな気持ちがとても嬉しかった。

それなのに。

翌日、那岐はお父さんと何やら言い争った後、家を飛び出して行ってしまった。そして、それが全ての不幸の始まりだなんて思いもしなかった。

僕は父さんと手分けして那岐を探す羽目になり、正直、僕は那岐が見つかるうが見つかからないかろうが関係ないと思っていた。

僕の頭の中はタベ出会った人の事で一杯だった。

だから、わざと那岐が居なさそうな山を探す事にした。いっそ、

本当にこのまま居なくなってくれないかな、とさえ思った。

しかし、現実はそのなに甘くない。むしろ残酷で冷徹だ。それも、人を憎んだ報いを僕は受けたのだろうか。

夕べの人と僕は再会し、それこそ天にも昇る気持ちだった。

なのに、そこに那岐は現れた。

僕の目の前でその人の事を、京、と呼び、まるで恋人のように接している。

許せなかった。

頭の中で、何かがどんどんと壊れて行く。

ナンデ、イツモ、ナギ、バカリ…。

僕が何かを叫んでいる。

でも何を言っているのか分からない。

僕は一体何をしようとしているの？

ナンデ、イツモ、ナギ、バカリ。

腹の中から湧き上がってくるドス黒い感情が止められない。

ナンデ、イツモ…！！

那岐が憎い、那岐が憎い！那岐が憎い！！

パリン…耳の奥で、何かが砕け散る音が聞こえた。

目で見える映像も、音も、体の感覚も、何処か遠くのスクリーンに映し出せれるように現実感がない。

叫ぶ、掴む、手を振り下ろす。

コマ送りで映し出される現実の世界。

全てが嵐のように過ぎ去り、僕の中に静寂が訪れた。

「京…！！」

叫ぶ那岐の声。

消えていた音が、感覚が夢から覚めたように、突然洪水のように僕へと流れ込んでくる。

僕は手元を見下ろす。

そこには那岐が京と呼んだあの人が、僕の手によって振り下ろされた独鈷杵を背中に受けて苦しんでいた。

「う、う、うわああ!!」

僕は一体何をしてしまったんだ…?

僕は一体…。

自分の行った行為が恐ろしくて恐ろしくて震えが止まらない。

なんて事だ…!

僕の頭は真っ白になっていた。自分の考えが止まってしまった。

何も考えられない程、真っ白に。けれどもそこへ、誰かの眩く声  
が響く。

今度こそ、こんなことはしないと誓ったのに。今度こそ、誰も傷  
付けないと決めたのに…!! ！！よりによって、また僕は紅へにを傷付けた  
…と。

紅とは一体誰なのか、誰かを傷付けたとは何のことなのか。  
僕はただ、その場に力なく座り続ける事しか出来なかった。

## 第七幕：記憶

グルグルと、自分が回っているのか、それとも周りが回っているのか。

ゆっくりと、それでもフワフワと体が落ちていく。

淡く、霞のかかった世界。

目を開けても光が明るすぎて…視界が霞んで良く見えない。

「この子は、なんと美しい子だろう」

「生まれながらにこの美しさ…なんと親孝行な」

「とても先ほど生まれた赤子とは思えん」

誰だろう？この声の人たちは。

「北の方もよう頑張った。これで一族も安泰じゃ…」

この人たちは、一体何の話をしているの？

ああ、また、世界が回る。落ちていく。

今度は、何だろう？ゆったりと揺れる小さな部屋。そう、これは

牛車だ。簾の向こうに小さく垣間見える外の世界が眩しい。

「ねえ、かか様、あれは何？」

「牛よ。この車を引っ張って行ってくれるのよ」

コロコロと優しい声を立てて笑う女の人。頭を撫でてくれる細く

て温かい、優しい指。

「かか様、あれは？あれは何？」

昼から夜へ、移り行く時刻。赤くユラユラとゆれる光の群れ。

「かか様？」

不安になり、白く細い腕に縋りつく。鮮やかな着物が私の体を覆

い、視界を遮った。

暗闇、複数の人の声、鉄臭い匂いにむせ返りそうになる。

「かか様！」

不安で心が潰されそうだ。

黙っているのも恐ろしく、声を出すのも恐ろしい。体の震えが止

まらない。

「かかさまあ！」

叫び続ける口を無骨な指が塞ぐ。体がフワリと持ち上がり、有無を言わせずに連れ去られる。

怖い、怖い、かか様！怖い！！

恐ろしくて体が動かない。

連れてこられたのは、知らない場所。暗くて、ジメジメした薄気味悪い小屋。

「おい、女の方はどうした？」

「ああ、ありや駄目だ。この餓鬼を庇って向かってきやがったからよ、つい、殺つちまった。気の強い女はこれだからいけねえ」

「馬鹿やろう！あれだけの器量だぞ！？折角、この餓鬼と一緒に高く売れたモンを！！半値になったらどうしてくれるんだ！」

なに？この人たちは、何を言っているの？かか様は？

「ちつ、まあ仕方ねえ……。この餓鬼だけでも金に換えるぞ」

「おい、餓鬼。お前、名前は？」

答えようと口を開くが、ひゅうと空気が音を立てるばかり。

そう：この時、私は声を失った。

でも彼らにとって必要だったのは、私の体：器だけ。私の名でも、声でもない。

私は、男たちの手によって貴族に売られた。

貴族と云う生き物は、時間と暇を持って余している者たちが多いのだらうか？

彼らは私を生きている人形として扱った。

しゃべれない私を、彼らは好きなように扱った。

ある者は私を飾り立てて出世の道具として使い、ある者は私を美術品のように金へと換えた。

私は：人形。

心を持つてはいけない、感情を持つてはいけない。

私は人形。

人の言うままに動く、人に扱われるままに弄もてあそばれる。

私は何も知らない、知りたくない。心の中に蓋をした。人間である自分が目覚めてしまわないように。

動かなくなるその日まで、私は全てを拒絶して行こう。全てが終わりになるその日まで…。

しかし、何故そんな事が出来ようか？

本来の姿を、何処まで偽って行く事が出来ようか？

「紅べに、今日は天気がいいから、少し表の空気を吸ってきたらどうだい？」

若い貴族。

私はこの男の親に美術品として買われ、この男に下げ渡された。

「さあ、窓を開けて行くよ。私は今日、宴があるので、少し帰りが遅い。笛の弾き手が足りないんだそうだ。嫌だが、顔を出さない訳にも行かない」

幸人ゆきひとと名乗る若い貴族は申し訳なさそうに、私の頬に触れた。私は反射的に口元をほころばせる。

「紅、後の事は世話を頼んである。いい子で待っていてくれるね？」

私は相手の顔を真似る。

人間は何故、同じ表情をされると喜ぶのだろうか？

「じゃあ、行つてくる」

男は私の唇にそつと触れて、部屋を後にする。

窓の外は寒々しいほどに殺風景だ。

花の一つもなく、まだ冬の余韻を濃く残した裸木と枯れ草が一面を覆っている。

冷たい風が私の髪を揺らした。ブルリと一瞬身震いをする。真冬のような刺す程の冷たさはないが、お世辞にも春らしく温かくなつたとは言いがたい。

私はひたすらぼんやりと窓の外を見続け、風の音に耳を澄ませる。この日も、何も変わらない一日である筈だった。

しかし…突然ふつて湧いた様に晴天の霹靂は訪れる。

「おい、幸人？こつちに居るって聞いたが、居るか？」  
知らない男の声。

とても低い、耳朶の奥を振るわせる心地よい響き。

「おい、幸人？」

窓から部屋を覗き込む人影。

「おい？」

その男は私に気が付かないようだった。

「居ないのか？…まったく、人に迎えに来る様に言っておきながら、仕方のないヤツだ」

肩で大きく息を一つ付くと、サツと踵を返して母屋へと足を向ける。

「…ん？」

ふと、男はおもむろに再び部屋の中を覗き込んだ。私は目を伏せ、息を殺してじつと身を潜める。

「気のせいか…？」

大きな溜め息が一つ。

私は男がてつきりもう立ち去ったものだと思い、目を開けて窓の方へと再び視線を戻した。だがしかし、男はそこに立っていた。目が合った。

鋭く、力に満ち溢れた瞳。

心臓が、ドキンと音を鳴らす。

「人か？」

私は動かない、いや…金縛りにあつた様に動けなかった。

「誰か、居るのか？」

男は大きく開け放たれた掃き出し窓に、片足をかけた。

「おい？」

ひょいと身軽に部屋に上がり込む。常識のある貴族がこんな事をするのだろうか？

私は体を更に強張らせる。見つかったら何をされるのだろうか？

自然と体が震え、涙が込みあがってくるのを感じる。

「おい、お前…」

声を掛けられ、恐る恐る視線を上げる。

ドキン、と心臓が音を立てた。

眩暈が起きたのかと思うほど、男の瞳に吸い込まれそうになる。

「人形：？いや、お前、人間か？」

驚いて目を見張る男は、おもむろにその大きな手を私の頬に滑らせた。

とても温かく、心地がよい。

「…こんなに冷たくなつて」

両手で私の頬を挟みこむと、男は再びまじまじと顔を覗き込む。

「それとも、天女は体温が低いのか？」

今度は私が驚いて目を見張った。

「名前は？」

私はゆっくりと頭を振る。

「ないのか？」

もう一度、ゆっくりと振る。云い様のない、とても悲しい気持ちになった。

口を動かしてみる。でも、そこから出る音は空気の音だけ。

「…しゃべれないのか？」

男は真っ直ぐに伸びた眉根を寄せる。私は堪らなくなって目を逸らした。

「悪かった。気が付かなくて、すまない」

男は私の頭を優しく撫でた。その手が余りにも優しく、とてもとても優しく、…忘れていた思い出を甦らせた。

かか様…。

私は心の中で、今まで閉じ込めた…固く封をして閉じ込めていた、感情があふれ出すことを止められなかった。

見ず知らずの男に、自分から縋りついたのは初めてだった。ましてやその腕の中で涙を流すなど、考えられない事だった。

それでも、その男は私を咎めるでもなく、今まで知っている男と

は違う抱擁を私にくれた。

「困ったな…泣かれると、どうして良いか分からなくなる」

やんわりと、受け止めるように私の体を包み込む両腕。

生まれて初めて、人の体温が心地よいと思った。今までは、どんなに振り払おうとも絡み付いてくる、蛇のように気持ち悪いものだったのに。

何で、この人は違うんだろう？

泣きながら、心の中がジンワリと温かくなるのを感じた。

「風凧！居るのか？風凧？」

この離れへと続く廊下を走る幸人の足音が聞こえた。

全身が凍りつく。

私はハッと身を起こし、男から離れようと体を擦った。

「もう少し…このままじゃ駄目か？」

男は再び私の体を引き戻し、その腕に強く抱き締めた。

「すまない…何て言って良いのか言葉が見つからない。ただ、もう少しこうして居てくれ」

耳元で囁かれたその言葉は、私の心と体をとろかす魔法。心臓は

早鐘を打ち、耳まで熱を持ったように熱い。

「風凧…？」

ああ、私はきつと壊される。

ゆっくりと離れの入り口が開かれた。

「幸人、人を迎えに来させておいて行方不明は問題だろうか？」

男はいつの間にか立ち上がり、私は今まで通りに窓へと視線を戻していた。窓と入り口は正反対の位置にある。

「紅…。風凧？」

幸人は不自然に思ったのだろう、私たちを何度も交互に見比べていた。それを遮る様に、風凧と呼ばれた男は幸人と私の間に動いた。

「さてと、行こうか。…この子、紅っていうんだ？」

「そうだよ。紅、綺麗な名前だろうか？」

幸人は得意げに風凧を見やる。

「そつだな。綺麗な名前だ」

風凧は私に視線を向けた

私は何故だかまともに彼の視線を受ける事が出来なかった。

「それにしても、この部屋は殺風景だな。これじゃ余りにも可哀想だ。明日にでも、俺が庭に咲いている椿でも持ってきてやるう」

え？

「幸人も、花ぐらい飾ってやったらどうなんだ？」

にやりと風凧は笑うと、窓へと向かい履物を引っ掛ける。

「ほら、モタモタしていると置いてくぞ？」

風凧はひらりと手を一回振って部屋を出て行った。

明日、もう一度会える…？

私は嬉しくて顔が赤くなるのを隠せなかった。そして幸人はそんな私の姿をみのがさなかった。

「紅…」

幸人は痛みを堪えるように、とても苦しそうな、悲しそうな顔をしていた。おもむろに幸人の手が私の頬に触れる。体がビクリと強張った。

「……つく」

幸人はキュツと唇をかみ締め、私に背を向けた。

「…今日は、早く帰る」

私は心の底からジリジリと氷が戻ってくるのを感じた。幸人は今までの誰よりも私に優しくしてくれる。

でも…結局は皆と同じ、私をそう扱う。

暗くなつていく部屋で私はまた、自分の心をしっかりと閉じ込める。もう、二度と出てこないように。もう二度と…。

その夜、幸人は宣言どおり早く帰って来た。

私の傍に座り、髪を指先で弄ぶ。

「ねえ紅。今日、風凧と何かあった？」

私は頭を横に大きく振る。

「本当に？」

今度は肯定の意味で大きく頷く。

「本当に…？」

私は再び大きく頷く。

「うそ…」

小さな声でよく聞き取れない。

「嘘…吐くな…」

低く、唸るように幸人の口から言葉が紡ぎ出される。

「嘘を吐くな！私を馬鹿にしているのか！？え？紅！！」

幸人は乱暴に私を押し倒し、馬乗りになってきた。

「風凧に、笑いかけていただろう？私に、あんな顔をしたことなど、一度もない！気付かなかったたでも思ったのか！？嬉しそうに…そんなに明日、風凧に会えるのが嬉しいか！？そんなに嬉しいのか！言え！！」

私は否定の意味で頭を大きく振る。

「嘘を吐くな！！嬉しいんだろう！？紅！……お前は…どんなに私が優しくしても、どんなに愛していても、私を一度も見えてくれない…！！それなのに、それなのに、今日、たった一度、会っただけの男に…！」

両肩を強く握られ、持ち上げられては、下に叩きつけられる。

「どうなんだ！どうなんだよ！？え？何とか言ったらどうなんだ！

紅！！」

幸人の温和な顔立ちが、どんどん形相を醜く変えていく。

「渡すもんか…風凧に、紅を渡すもんか！！他の誰にも渡さない！

！紅は私の物だ！！」

幸人は私の首をその両手で絞めた。たった今さっきまで私の髪を絡めていた指は、私の皮膚に容赦なく食い込んでくる。

「……………っ…あ」

苦しくて、苦しくて、意識が朦朧としてくる。

「お前のせいだ…！！お前が私を見てくれないから…！！お前なんか…死んでしまえ…！！」

体の力が全て抜け落ちた。

コトリ。

何の音かな？ああ、そうか床に投げ出されたんだ。

幸人は狂ったように私の体をメチャクチャにしていた。

なんだ、私の最後はこんな感じだったんだ。こんな風に、死んじやったんだ。

幸人は私の体を夜のうちに死体が沢山捨てられている所に持っていった。

ここは死体の山だ。余りにも多すぎて、既にそこに捨てられているのは人ですらない、ただの肉の塊だ。

幸人は私の体を無言のまま放り投げると、足早に立ち去った。

何で、私はこんな事になったのだろう。あの時、かか様が殺されなければ違ったの？あの男たちに売られなかったら、違ったの？それとも、生まれてきたのが間違いだったの？

悲しくて、悔しくて、恐ろしくて、痛くて…。

死んでもなお、私の痛みは続き、体に心が縛り付けられている。

日が上がり、沈む。何度その光景を見たのだろうか？その間でも死体はどんどん増えていく。私の上にも、何人かが積み上げられている。

痛みは変わらない、苦しさも。

人間が憎い。

私も同じ人間だったのに、何で人間にこんな目に遭わされなければいけないの？悔しい、苦しい…。

そう、私は人間が憎い。

「う…あ…」

私はその場にある負の感情に支配され、人とは異なるモノに生まれ変わろうとしていた。

憎しみに支配され、悲しみに耳を塞がれ、醜く姿を変えていく。

「ぐうう…」

その時、私の手に、椿の枝が一つ握らされていた事に気が付いた。

『明日にでも、俺が庭に咲いている椿でも持ってきてやる』  
風凧の声が頭に響いた。  
涙が頬を伝う。

嫌だ、嫌だ、嫌だ！私は鬼になどなりたくない！！  
鬼に変わろうとする体、それを拒否する心。強く反発する二つの  
力。

私の記憶は、それで失われたのだ。  
とうとう、思い出した。  
ずっと、忘れていた。  
これが私の始まりだったんだ…。

## 幕間・凧ノ参 上段

京が目の前で倒れた。

何が起こったのか一瞬分からなかった。

「京！！」

全てがコマ送りのようにゆっくり見える。宙に舞う京の髪の毛の一筋が、手を伸ばせば掴める程にはつきりと目で追う事が出来た。

俺は… たった今まで、どんな事が起ころうが冷静で居られると思っていた。

それがどうだ？なんだこのザマは。

体の震えが止まらない。

俺の体に覆い被さるように京の体がある。力なくグツタリとしているその様を俺は歯が鳴る程の恐怖で見詰めている。

どうしよう。

どうしたらいい？

考えが纏まらない。纏まるどころか、拡散して広がって行ってしまっ  
まっ。

「京…京…」

情けない程に掠れて震える声、意思の伝達が遅くなった両腕は、  
酷くノロノロと動く。

「京…！！」

俺は京の頭を胸に抱きかえ、指先をその頬に這わせた。

京の頬は滑らかな陶器のように白く、氷の様に冷たくなっていた。  
世界が回る程の眩暈と共に、全身の血がザアッと音を立てて引  
ていく。

「ダメだ…嫌だ…いやだ！！」

京を失う？

冗談じゃない！！そんなの、俺は認めない！認めてたまるか！！

「京！目を開ける！！俺を見てくれ…！！」

俺は京の体を仰向けにするように抱かかえ直す。その時、掌に独鈷杵の硬く冷たい感触が触れた。

京の背中に突き立てられた異物。  
ザワリと髪の毛が逆立つのを感じた。怒りが制御出来ない爆発となつて、身内の中で荒れ狂う。

「… 幸人… キサマ」

唸るように出した言葉は、己の仕業に怯えて座り込んでいる義兄の幸人に向けられた。

吐き出す息さえも、怒りで熱く感じる。

「京に何の罪がある！？お前に、一体、京が何をしたつて言うんだ！？俺が憎いなら、俺を刺せ！！何故、京を傷つける！？」

「あ… 僕は…」

「何だよ！？お前も退魔師の端くれだ、分かるだろう！？コレが京にどんな影響を及ぼすのか、知らないとは言わせない！」

「え… きよ… う… さんは… ？」

「寝ぼけたコト言つてんじゃねえ！！コレは京の体だけじゃなく、魂まで傷つける。…ズタズタに引き裂くんだよ！」

握り締めた独鈷杵を、俺は力任せに地面に叩きつけた。

幸人に魔を消し去る能力はない。せいぜい、道具に移された義父の力が対象物を動けなくする位だろう。

しかし、それはあくまで通常の状態の魔であればの話だ。

今の京は弱っている。それも、すぐにも消えてしまふような位に。そんな状態で少しでも攻撃を受ければ、致命傷になるコトだってないとは言えない。

幸人の青くなった顔はますます血の気を失い、紙のように白くなっている。

「僕は… 僕は… そんなつもりじゃ…」

両手で顔を覆い隠し、肩を震わせて泣き始めた。  
泣こうが、喚こうが今更この状況は変わらない。

京の存在は今や風前の灯火よりも儂いのみだから。

力なく地面に横たわる京。  
不本意だが怒りは一度吐き出してしまえば、それなりに収まるもの  
のだ。

しかし、それが一体何になるといえるのか。

結局、俺は何も出来ない。

「京……」

京を助けるには、今の俺の体では力不足だ。

どうしたら良いんだ……！！

京の胸に額を押し付けるように抱きしめる。

「なっさけないわね。それでもアンタ男なの……？」

突然、空から女の声が降ってきた。

「男が二人もいて、揃ってメソメソしてんじやないわよ！情けない

！！風、アンタは少しマシだと思ってたのに、コレじゃ興奮だわ。

やっぱり京をアンタに任せてなんか置けないわ！」

怒りも露に罵る甲高い声。

「……その声は、芳華<sup>ほうか</sup>？」

俺はキョロキョロ周囲を見回す。

「全く、腑抜けになるのも大概にしなさいよ？私に式を付けられて  
るのに気付かないなんて、どうかしちやったんじやないの？」

空から舞い降りたのは、赤く鮮やかな羽を纏った極彩色の鳥。そ  
の口からヒステリックな芳華の声が流れ出していた。

「着いて来なさい。私が京を助けてあげる」

芳華は俺の返事など聞かず、式を鳥から人型へと変化させる。

「……悪趣味だな」

うんざりと俺は思わず呟いた。

その人型の姿には見覚えがあった。思わず溜め息が漏れる。それ  
は嫌というほどに見てきた俺の昔の姿だったからだ。

式は無表情に京を横抱きに抱えると、すぐさま歩き出す。

「懐かしいでしょ？さあグズグズしている暇は無いわよ。いらっし

やっ」

正直言つて、昔の自分の姿であれども京の体に俺以外の手が触れているのは穏やかな心境とは言いがたい。が、大体、今はそんな事を言っている場合ではないのだ。

式は一瞬、幸人の傍で足を止める。

「… 幸人くん、泣いている暇があるなら手伝いなさい。凧がどんなに喚いても構わないわ。一緒に来なさい」

昔の俺の顔が無表情で、芳華の声をしゃべる。それだけでも気持ちが悪く言うのに、よりによって京にこんな真似をした幸人に手伝えとぬかした。

「芳華！ふざけんな！！こんなヤツ居たって何の役にも…！」

式を通した芳華の鋭い視線が俺の方に向けられる。

「今はアンタも変わらないでしょ？ツベコベ言つてんじゃないわよ。私のやる事に一々口出さないで貰おうかしら？」

「……………つ！！」

情けない事だが、反論できない。

昔の俺だったら、芳華如きにこんなでかい口を利かせやしないのに。歯がゆい思いが俺を一層イライラさせる。

「幸人！聞こえたんだろ！？グズグズすんじゃねえ！」

「えっ…あ……………」

赤く腫れ上がった瞼。驚いたように目を見張り、視線は式と俺の間を行ったり来たりを繰り返す。

怯えた小動物のような幸人の顔は、俺を更にイライラさせた。

「モタモタすんなよ！」

「凧、アンタも相当ウザいわよ？あんまり私を怒らせないで頂戴。

二人ともサツサと動いてよね！」

芳華はスツと俺たちに背を向けると、有無を言わせぬ迫力で俺たちを促した。

「チツ…」

「は、ハイ…」

無言で暗くなった山道を歩く。一体、芳華は何処に向かおうと云

うのか？

俺たちは山道を降りるのでもなく、上がるのでもなく、どうやら平行に山腹を移動しているように思えた。道幅は更に狭まり、もはや獣道の類と一緒だ。

「オイ、何処まで行くんだ？時間がないのはお前も分かっているだろ？」

小走りに式の元へ行き、京の様子を窺う。

しかし、悔しい事に昔の俺は背が高かった。今でも同学年と比べれば俺は背の高い部類に入るが、流石に百八十センチを越えた男の腕に抱かれた京の様子を伺い知る事は出来ない。

「芳華！京は大丈夫なのか？早く、早く…手を打たないと…」

「分かっているわよ！足元でそうキャンキャン騒がないで！！準備はもう整えてあるわよ。もう少しだから、大人しく歩いて頂戴！」

苛立った声音でそう言い放つと、芳華は歩くスピードを少し上げた。それだけで、俺には今の状態がどれ程までに深刻なのかを知ることが出来た。

再び目の前が真っ暗になる程の絶望感に包まれ、ガクガクと足が震える。

もし…もしも、このまま京を失ったら…？

突如、体が中に浮いたようにフワリと軽くなった。頭の中がジンジンと痺れ、締め付けられる痛みと共に胃液が込み上がって来る。

京を失う事は、俺にとって全世界を失う事だ。俺の存在理由、俺の生きる理由、俺がこの世で全てを賭けて守りたいただ一つの存在。きっと初めて京と出会った時、俺の運命は全て決まったのだ。

俺は京の為に在る。

今までも、これからも、ずっと…京だけの為に。

京が消えるのなら、俺も共に消えよう。

京が居ない世界など、俺にとっては何の意味も成さない。

「京…」

ふらりと吸い寄せられるように、力なく垂れ下がる京の手に触れ

た。

「京、聞こえるか？俺は、何時までもお前と共にある。消して、一人になどしない…」

芳華の操る式がピクリと片方の眉を上げた。

「今生こんじゆうの別れじゃあるまいし、ナニ情けない事言ってるの？少しは私を信用して欲しいものだわ。…私だって、この十三年、のんべんだらりと暮らして来たわけじゃないのよ。仙道流当主の座は伊達じゃないって事、証明してあげるわ！」

不機嫌に歩くペースを更に上げる。

「あと直ぐそこよ。覚悟してなさい！さあ、始めるわよ！！！」

## 幕間・凧ノ参 中段

直ぐそこと言う芳華の言葉は本当だった。一体、何処をどう歩いたのか、ハッキリと覚えてはいないが…一瞬、己の目を疑った。

何処の馬鹿がこんな山奥に、しかも、マトモな道すらない山中にお伽話にでも出てきそうな西洋風の城を模した家屋をブチ建てると云うのか。

まるで今にもシンデレラとかそんなのが出てきそうだ。

「…芳華、まさかコレは…？」

「素敵でしょ？私の力作なんだから。因みに、この山は私の所有物だから問題ないわよ」

「いや、そうじゃなくてダナ…」

別な意味でヘナツと全身の力が抜ける。幸人に至っては、あんぐりと口を開いたまま固まっていた。

芳華は昔から少し…いや、だいぶかな、少女趣味な所があったのは知っていたが、まさかここまでとは考えもしなかった。

「どうせ別荘建ててるんなら、この位はしなくっちゃ。さ、ぼさつとしてないで、早く入って頂戴。私の場所はその式がそのまま案内してくれるから」

そう言い放つと、再び式は無言・無表情のただの操り人形に戻った。

きっと芳華は意識を自分の中に戻したのだろう。しかし、式の動きはスムーズで、傍目には今までと何ら変わりはなく見える。

だが芳華の意識が抜けた今、式は芳華の与えた指示以上の事は出来ず、機械的にただ淡々と動くだけになる。応用は出来ないのだ。式は玄関の前で立ち止まった。京を抱えているので扉を開けることが出来ないとも思えるが、単に扉を開けると云う指示を受けていないと考えることも出来る。

全く、出来が良いんだか悪いんだか…。

俺は式の前に回りこむと、馬鹿でかい扉の前に立った。が、頭を抱え込む。

「…コイツはどうやって開けるんだ？」

式を通して芳華に聞こうにも、もうコイツは正面を見据えたまま微動だにしない。力でゴリ押ししようにも、俺の力では高が知れている。手伝ってもらおうにも幸人はさつきから固まったまま動かない。

全く、芳華のヤツは肝心な所で詰めが甘いのも変わっていない。

仕方がない…余り好きではないが俺も式を使うしかないようだ。

式を使う退魔師は多いとも少ないともいえないが…大まかに札を使うか、他の媒体に念を閉じ込め使うかの二派に分かれる。

芳華は後者、俺は主に札を使う。基本は当然、札ならば墨で手書きをする事が絶対だし、媒体なら常に身に付けている事が望ましい。だが今回は急場であることに加え、主だった媒体がない事などから手持ちはない。…が、出来ないこともない。

俺は己の髪を二本引き抜き、呪を口内で含むように唱えるとその髪に息を吹き掛けた。簡単に言えば、西遊記の孫悟空が己の分身を作り出すのと要領は似ている。

ただし、実際にやるのは今回が初めてだ。

以前、古い文献に書いてあったのを覚えていただけなので、上手くいく保証はない。だがやってみる価値はある。

空に放った髪はゆっくりと地面に下りていく。すると、そこからユラリと滲み出すように人の姿が現れた。次第にその輪郭がハッキリすると俺の左右に人型の式が二体現れる。

どうやら、上手く行ったようだ。

式を使う便宜上、顔は俺と同じだが、年齢設定を少し上げたので俺とは親子のように見えるだろう。

「扉を壊さずに開けてくれ」

二体の式は無言で頷くと、行動を開始した。

一体は扉の隙間に侵入し、まるで扉を透過するようにスルリと内

部に侵入する。元の媒体が髪の毛の毛ただけに、少しでも隙間があるなら難なく内部に進入することなど朝飯前だ。

残りの一体は内部の式の動きに連動するように首を左右に動かしたかと思うと、おもむろに輪環になっている取っ手を引いた。

ギ、ギ、ギ…。

重く軋んだ音が鳴る。扉はその音と共に、ゆっくりと左右に開かれていく。中に進入した式の全身が見えた時点で俺は二体の動作を止めた。

「もういい。十分だ」

二体の式は互いに見合い、俺に視線を戻すと、大人しく俺の後ろへと下がる。

「行くぞ」

俺は芳華の式に中に入る様に促し、幸人にも視線で動く様に無言で促す。

扉の隙間は大人の男が通り抜けるのがやっとの幅だ。京を抱えたままで、芳華の式が通れるのか少しの不安はあったが、俺の心配をよそに以外にすんなり通り過ぎてくれた。

俺は全員が通り抜けた後、二体の式に扉を閉めてここで待機するように命じる。

内部は予想通り、白く華やかな中世ヨーロッパ調の内装で彩られていた。

眼前に広がるのは、日本家屋のこじんまりとした玄関などではなく、二階以上の高く吹き抜けになった広いホール。大きなシャンデリアが全体に煌びやかな光を振りまいていた。

歩き出そうとした瞬間、ゾワリと背筋に嫌な感覚が走った。眉間に皺が寄る。俺は動きを止め、もう一度、慎重に周囲を見渡した。

何とも言いようの無い違和感が視界の中にある。だが、それが何なのか今ひとつハッキリしない。所狭しと飾られた調度品、絵画、美術品…。

新しい物は見当たらないが、そもそもアンティークと言われれば、

そつだろつと頷けるものばかりだ。古い物には魂が宿る事が少ない。それなら、いくらなんでも芳華が気付かないとは思えない。ならばまあ、危ない者ではないのだらう。

俺の考えをよそに、芳華の式は足元にある真つ直ぐに敷かれた、金の縁取りのある細長い赤い絨毯をサツサと歩き、正面から中央辺りで左右に分かれる階段を上へと上がつて行く。

何処まで行くのか聞くのは無駄だ。後ろ髪を引かれる思いだが、黙つて俺たちは式の後をトボトボト付いて行くしかない。

階段を上がり切ると、吹き抜けを挟んだ左側には奥へと伸びる廊下があるが、俺たちの居る右側には長く伸びる壁面にドアがたつた一つ。

芳華の式がその前に立ち止まると、扉は内部から音もなく開かれた。

「待ちくたびれたわ。さあさつさと入つて」

芳華は自ら俺たちを部屋の中に招き入れる。

「あ、靴は履いたままで良いわよ」

ほら、早く来なさい、と芳華は俺たちを急かした。

薄暗い蝋燭の炎が静かに揺れる室内。不思議とここには無駄な装飾は一切なく、家具や調度品の類いが一切ない。ござつぱりと言うより、むしろ殺風景だ。

「今更、言つまでもないだらうケド…携帯なんかは電源切つておいてね」

芳華は式に京を床に横たえるように指示を出しながら、後ろに居る俺たちにもテキパキと指示を出す。

「幸人くんはそこにある数珠、首に掛けといて。凧！ぼさつとしてないで、こつちに来てこれを京に握らせて」

「あ、はい。え…！？」

幸人は宙に浮いている数珠に手を伸ばし、ギョツと目を見開いて固まった。そりゃそつだろつ。幸人は見る目を持っていないのだから。それこそ数珠だけが宙に浮いているように見えている筈だ。し

かし、俺の目に見えているのは、一つ目の鳥の形体をした妖異が嘴にそれを引つ掛けて幸人に差し出している姿だ。

「……………」

ああ…そういうことか。

俺は改めてこの建物の中の気配を探り、下に残した式たちの目を使つて周囲を覗つた。

中に入った時は違和感としか感じなかったのだが…考えてみれば、この様子は外界と少し異なっている。

式の目を通した景色には、小さな妖異がチヨロチヨロと見え隠れし、本来ならここに居るはずのない様々な形体の妖異がこちらの様子を探つていた。

要するに、別荘と言うよりはちよつとしたお化け屋敷だ。

「芳華、お前…」

「ナニ？ …… つそうよ。彼らはここに住んでいるわ。色んな事情で本来の場所に居られなくなった妖異たちよ。言っておくけど、勘違いしないでよね。ただ私は、京との約束を守りたいだけ。同情じゃないわ。居場所がなくなるコたちに場所を提供してあげるだけよ。彼らは人間に害を成すワケじゃないし、そもそも人間があのコたちの住処を奪つてしまったんだもの。コレぐらいしても問題ないでしょ？」

「…そうか」

確かに、ここに居る妖異たちは悪意や害意を持っている者はいない。成る程、それなら違和感以上は何も感じなくたって可笑しくないハズだ。

芳華は以前、京と何やら約束をしたと言っていたが…そうだったのか。

昔から京は人間たちが無害な妖異の居場所を奪う事を嘆いていた。そうする事によって、本来害意が無い者でも、自然と人に悪意を抱くようになってしまうからだ。

きつと芳華はそうなる前に、交渉して応じる者たちへ住処を提供

しているのだろう。力づくで、ただ消し去るのは簡単だ。しかし、話し合えばそれなりにお互いの妥協点が見つかる事も確かにある。

京、良かったな。

俺はこんな状況だと云うのに、自然と口元がほころんでいた。

「な、ナニよ！ニヤニヤしてないで、早く手を動かさなさい！」

芳華はバツが悪いのか、照れているのか…イライラと俺を怒鳴りつけた。

「ああ。……芳華、ありがとうな」

「やだ、ナニよ！気持ち悪い！！これから集中しなきゃいけないのに、失敗したら、凧のせいだからね！」

耳まで赤くなった顔を、芳華はツンと叛ける。

俺は横たわった京の傍に跪き、雪の様に白くなった頬に自分の頬を寄せた。

京、帰って来てくれ。

お前の願いが一つ叶ったんだぞ？

「京…」

「さあ、凧、擦り寄るのはいいけど、私はこれから全神経・全精神力、全てを使うわ。言いたい事は分かって貰えると思うけど、万が一の時は…」

「ああ、任せておけ」

俺はもう一度、京の頬を撫で、手を握った。

俺は何時も京を待たせてばかりいた。

今まで一度も待たされる者の気持ちなんて考えた事はなかった。

待たされるのがこんなに辛いなどと、一度も思ったことがなかった。

京はずっとこんな思いをしていたのだろうか？

ジリジリと焼け付くような心の痛み。不安で胸が締め付けられる。

「戻ってきてくれ…俺はここに居る…」

離れがたい思いを振り切り、俺は立ち上がった。

入れ替わりに、芳華が京の頭上にドサリと胡坐をかいて腰を落と

す。芳華は息を大きく吸い込み、ゆつくりと唄うように言葉を紡ぎ出した。

それに合わせて、ゆるゆると空間に満ちる穏やかな空気が心地よい。

芳華の使う術は主に祝詞のりと、言葉によるものだ。派手な動作は一切なく、炎を使った術や祭壇を作る事もない。その代わり、酷く精神力と体力を消耗する。

京の額に芳華は左手を下に両手を重ねて置いた。

次第に芳華の額には玉の様な汗が浮き出し、旋律を紡ぐ声は時折掠れ、震える。京には目に見えて大きな変化はないが、芳華の表情は苦悶のものとなっていく。

「…帰って、きて！京！！私の声を道標に、私の力を手繰って、引きずられないで、迷わないで、躊躇わないで、貴方を受け止める者たちがここに居る…！目を、覚まして！京！！」

ビクンと京の体が大きく跳ねた。

それと同時に芳華は力を使い果たしたのか、崩れ落ちる様にドサリとその場に倒れ込む。

正直、俺は不味いと感じた。

芳華の力が弱いのも、京が悪いわけでもない。しかし、恐らく芳華が行ったのは京の妖異の核心、鬼の力を揺り動かすもの。京を助けるために、妖異そのものの力の源である記憶を揺り動かしたのだ。

もし今、京が目覚めれば、恐らく芳華や幸人の知っている京ではない。

部屋の空気が一変した。

重く垂れ込める重圧、ただでさえ弱い蠟燭の光は更に弱々しくなる。

「幸人、動けるな？今すぐ芳華を俺の後ろに運べ！早くしろ！！」

「あ…あ…うわあぁ！」

幸人は俺の声を合図に、床を這うように走り、芳華の体を俺の背

中側に担ぎこんだ。

「良くやった。後は目でも瞑って、そこで大人しくして居ろ…！」  
俺は頬に汗が流れるのを感じた。部屋が暑いわけではない、その逆だ。寒さで鳥肌が立つ。

京がゆっくり横たえられた体を起こし、顔を俺たちの方に向けた。ハツと息を吸い込む程、その鋭い視線、氷の様に凍てついた美しさに惹きつけられる。

潤んだ瞳、薄く開けられた桃色の唇…。

表情が感じられないだけに、そこだけが異様に艶めかしく見えた。俺は思わずゴクリとつばを飲み込む。冷たい汗が更に、一筋、二筋と頬を伝った。

ユラリと立ち上がるその姿は、まるで風に揺らされる、しなやかな草花のようだ。

「…ねえ、キミはだあれ？」

クスクスと声押し殺し、体を擦るように動かす。

「一人なの？」

小首を傾げ、子供のような幼い言葉使いをする。

「…可哀相」

右手を体の脇にだらりと垂らし、左手の人差し指を唇に当てる。

「寂しい…？」

問いかけなのか、それとも俺を値踏みしているのか。京の表情は変わらず、その真意は測りかねる。

「ねえ、寂しい？」

「ああ…」

俺は、京の瞳に思い出したくない過去を見た。

京の瞳はまるで水鏡のように、蓋をして閉じ込めた俺の心を映し出す。

コレが、京の鬼の力。心の傷に入り込み、心を惑わせる…。

幕間・凧ノ参 下段

『…化け物!』

ヒステリックな女の声。

『気持ちが悪い…何なの、この子。化け物よ!なんで、私の子供が

…化け物!』

俺は、何も言わない。

『そんな目で、見るんじゃないよ!…化け物、化け物!化け物!化け物!』

俺は…黙って背を向ける。

俺に親はない。

そう…俺には親は居ない。

幼かった頃、俺は小さな手を握り締め、唇をかみ締めて生きていた。

俺を産んだ女は…俺を化け物と呼んだ。

俺の周囲には、数え切れない程の常識では考えられない不幸が起きる。

災害、戦、病、事故…目の前でどんどん人が死んでいく。

何度も、何度も何度も何度も死にそうになった。

けれど、俺は生きている。

親父、兄弟、祖父母…皆、死んだ。

俺を化け物と呼び続けた女も、死んだ。

けれど、俺だけは生きている。

…俺は、独りだ。

人と生きる事を俺は求めなかった。

どうせ、皆、死んで行く。

俺は、独りだ。

どうせ失うものならば、始めからない方がいい。

俺は…。

「…寂しいよね？」

ハツと俺は我に帰った。

気が付けば京は俺の直ぐ目の前に居る。

「可哀相」

京の獣の様に長く伸びた爪が、俺の頬を撫でる。

「独りは、嫌？」

俺の顔を覗き込む様に身を屈め、問いかける。

「嫌？」

ふ、と俺は笑みを漏らした。京の表情が、初めて戸惑いの色を見せる。

俺は京と出会うまでは、一度も人として生きた事がなかった。

それこそ、化け物と忌み嫌われ、俺を捨てた師匠にですら異能者扱いされ、ただの一度も人間として扱われた事はなかった。

日陰へ日陰へ…身を隠すように生きる生活。出会った者の全てが、誰一人として俺を認めてはくれなかった。

ところがある日、目が眩む程の美しい妖異が、初めて俺を人として声をかけてくれた。

独り残される俺を見て、ごめん、と言ってくれた。

俺の心に、初めて光が射した。

以来、俺はその妖異に恋焦がれ求め続けた。初めて生きる意味を感じる事が出来た。

「京…目を覚ませ。鬼に引きずられるな…」

俺の生きる意味…。

温もりの失せた京の首筋に、抱きついて頬を寄せる。

「大丈夫…お前は鬼じゃない…」

俺の光…。

そつと耳元に囁きかけた。

「あ…」

京が与えてくれた俺の人としての命…全てを京の為に。

京の頬を涙が伝う。

暖かな雫が俺の首筋にはらはらと零れ落ちる。

「凧…」

「大丈夫」

思いを込めて、京の心に囁きかける。微かに震える肩。

しかし、ふいに体にドン、と云う衝撃と激痛が走った。

京の大きな目は限界まで見開かれ、溢れる涙は止めなく…恐怖に  
慄いている。その顔からは一層、血の気が失せ、まるで真っ白な紙  
のようだ。

「いや…嫌だ…凧、助けて…凧…！」

口内に広がるぬるっとした鉄の味。

「凧、嫌だ…こんなの、いや…」

「…ごふっ」

軽い咳と共に一筋の血が口から流れ出る。

「いや…いや…やだああ…！」

京は俺の体を突き飛ばすように離れる。その右手は赤く染まっていた。

鬼としての京、人としての京…二つが京の体内でせめぎあっている。頭を抱え込むように震えて座り込んだ京の表情は目まぐるしく変わって行く。

俺は体のほぼ中央に京の腕分の風穴が開いていた。本来なら、この時点で死んでいるだろう。けれども、こんな傷ごときで…俺は死なない。いや、死ねないのだ。

この程度の痛みなら、幾らでも堪えられる。

何故なら、俺の体は京に喰らい尽くされるまで、命を失うことはないからだ。当然その間、苦痛は絶え間なく訪れる。

しかし、それは俺が望んだ事。

俺が行った京が人としての心を持ち続ける為の術…それが俺の支払う対価。

俺は口内に溢れる血に邪魔されながらも、口に含む様に呪を唱えた。

「だめ…いやだ…いや…!!」

歯を食いしばり、京は己の中に潜む狂気と闘っている。

俺は足が纏れる様にフラリと踏み出す。一步、二歩…京の傍で両膝をつく。

震えて身を丸める京の顔を俺は両手で挟んで上を向かせた。

「……っ」

初めて…俺は初めて京の唇に自分の唇を重ねる。

こんな時に不謹慎だが…こうする事を何度夢見た事か。

俺の想像以上に、それはとても冷たく、とても…柔らかかった。

今まで、数え切れない程何度も触れ、その形をなぞった唇。

俺の突然の行動に驚き、それでも俺を傷付ける事を恐れ、力なく抗う京の腕。その腕ごと、抱え込むように京を抱き締める。

練り込んだ呪を直接、口移しで京の中に流し込んだ。

京の中で目覚め、荒れ狂う怒り、憎しみ、悲しみ。俺はそれらを全て静める為に、全神経を傾ける。

誰が好んで抱えきれない怒りを生むだろうか？誰が好んで人を憎むだろうか？誰が好んで悲しみを背負うだろうか？

流れる涙はそのままに、堅く目を閉じた京は、ぐったりとその体を俺の胸に預けた。

俺はそつと京から唇を離し、更にもう一度強く…強く抱き締める。

「…お帰り、京」

穏やかな空気に満ちた部屋に、沈黙が落ちた。

抱き締めた京の体に、徐々に暖かさが戻ってくる。おずおすと京の腕が俺の背中に回され、縋りつくように爪を立てる。

泣き腫れた目が重たげに開かれると、再び涙を溢れさせ、京は穏やかな笑みを浮かべた。

「……ただいま…風」

## 第八幕：目覚め

時間が経てば心の傷は癒える？それは本当？

どうして、私を呼んだの？何で、私を起こしたの？

私が、こんな姿になったのは誰のせい？誰が、私にこんなに苦しみを与えたの？

そう…それは生きている人間、だ。

私が出来なかった事、彼らがしてくれなかった事。

想う事、想われる事。

守る事、守られる事。

それは…支えがあるということ。

誰かが傍に居る事、誰かの傍に居る事。

それは、きつと…独りではないこと。

きつと…全てが…愛すること。

冷え切った心が…ズタズタに引き裂かれた心が、燃える、熱くなる。

『私』が『私』を失ってから、『私』が『私』を取り戻すまで…

傍に居てくれたのは、誰？

そう、それはただ一人の男<sup>ひと</sup>。私にとって、絶対無二のたった一つ

の存在…。

「……ただいま…風」

「うん」

頷きながら風は私の体を優しく抱き締める。

沈黙の下りた、静かで穏やかな部屋。もし、涙に音と香りがあるならば、それは全ての静寂を打ち消し、むせ返る芳香となって世界を埋めるだろう。

私の心は満ちる潮のように、ひたひたとゆっくり幸せに浸っていた。と、そこへ、ぺたりぺたりと吸い付く様な足音と共に覚えの姿が現れる。

「ふんしゅー…ほい、なんじゃあ。そこに居るのは京かいなあ？」  
私はまさかと思い、慌てて顔を上げて声の主へと向き直る。するとそこには、まぎれもなく時無しの沼の長老である蛙の翁が佇んでいた。

「翁…！どうしてここへ!？」

驚きの余り、声が少し高くなる。翁は大きく裂けた口元でニンマリと微笑むと、顎を撫でながら言葉を続けた。

「ふんしゅー…なあに、ここで世話になつとる妖異どもが、わしをせつついてのお。なんでも、何かをなんとかせえとかいっつたわいい」

ギョロリと視線を足元に落とす。その視線を追うと、何匹もの小さな小さな妖異たちが、翁の足元に絡みついていていた。

「ふんしゅー…まあ…何をどうするのか、は、忘れたのう。じゃが…少しは手伝う事が出来そうじゃあなあ？」

今度はギョロリと視線を風に向けた。ハッと私は風の体のを離す。翁の言いたい事は分かっていていた。

「ね、風。…傷を、治してもらおう？」

改めて己のしでかした仕業に血の気が引いていく。幾ら風でも、こんな深手ではどうしようもない。しかし、風は私以外の他人に自分の体を触らせるのを極端に嫌がった。

ましてや、今度は妖異である翁だ。

私は風の口から否定の言葉が出る前に、たたみか掛ける。

「お願い、ね？風」

風は不機嫌に顔をしかめると抵抗をせず、無言でその身を床に投げ出した。好きにしろ、と言うことなのだろうか？

翁はぺたりぺたりと体を左右に大きく揺らして風の傍までやってきた。

「ふんしゅー…。小さいが、なんとしっぴかりした魂よなあ？お主ならちいと荒療治でも大丈夫じゃろうて」

翁は満足そうに大きく飛び出した目を細めて笑い、べろりと長い

舌で己の口元を舐めた。

人間の体内の殆んどを占めるのは水。

そして翁の性質は水。

翁が持っている力の中で、傷の治癒は最も得意とする所だ。

翁は風の腹に開いた傷口の外周に、己の撥状はちに広がった指先を置いていく。

「ぐっ……」

風が痛みにビクリと小さく震え、短く呻いた。私は大丈夫だと知っていたながらも、風の傍で彼の手を握る。

「ふんしゅー…こりゃあ、派手にあいたもんじゃあなあ？ふえふえふえ。ふんしゅー…まあ痛い、大丈夫じゃろうて。すこおしの我慢じゃあ」

翁の手が心となり、傷口全体に青く煌めく光が集まる。それは大小様々な形で蛭みたいに漂い、フワリフワリと輝いていた。そうして次第に光は急速に集まっていくと、いつしか大きな一つの球体となり、とても強い目の眩む様な輝きを放ち、部屋全体を照らし出した。

「う…ん……重い……」

その眩しさに反応したのか、風の傍で横たわっていた人影が小さく身じろぎをした。その上には、ぐったりともう一人が庇う様に覆いかぶさっている。

「まぶし……」

手を翳しながら、光源に顔を向けた人物と私は目が合った。お互いに無言で暫く見詰め合う。

「きよ……う……？」

「芳華……？」

「京……！」

がばつと芳華は起き上がると、上に乗っていた人物を跳ね飛ばして私へ抱きついてきた。

「京……良かった！！何処か痛くない？気分悪くない？大丈夫？」

矢継ぎ早に質問される。

「うん、大丈夫。大丈夫だよ」

「よかった、よかったよおお…。会いたかった、ずっと会いたかった。京、本当に会いたかったよお…！」

芳華は嗚咽を漏らしながら、再会を喜んでくれていた。私も驚いたが、嬉しくて涙が滲んだ。芳華は初めて…私に初めて出来た友達だったから。凧に呆れられるぐらい色んな事を話し合って、笑って遊んで…。

私に人と触れ合う、もう一つの喜びを教えてくれた大切な大切な友達。

「うん…ごめんね」

凧に芳華…ここにこうして、大切な人が二人も私の傍に居てくれる。これ以上、私は何を望むだろう？もう何も無い、何も無い。これ以上の喜びも、幸せも…。

「…ったく、うるせー…。これだから、女ってヤツはよ。芳華、お前なあ京にベタバタするんじゃないねえ…！」

凧が苦虫を噛み潰した顔で弱々しく言い放つ。

「うるさい！京は凧だけのモノじゃないんですからねーだ！」

「京は俺んだ…！」

「ちがうもんね！」

「そうだ！」

「い・や・よ！ね？京！」

芳華は横たわる凧へべえつと舌を突き出して、更に私へ擦り寄った。思わず笑みが零れる。この二人は前からずっとこんな風だった。「ほんと、二人とも仲いいね」

嬉しくて思わず口を付いた言葉に、二人は露骨に眉をしかめて同時に声を荒げる。

「違うつ…！」

「ぶつ…あはは！」

「京…！」

再び声が重なり、二人はお互いにそつぽを向く。その声に刺激されたのか、もう一人が目を覚ました。

「う…ん。一体どうなった、の…？那岐…？」

右手をこめかみに当てながら、のそりと体を起こす。彼はゆつくりと顔を上げ、私たちの方へと視線を上げた。

「ひっ…！！！」

一瞬引きつった声を上げると、そのまま口をパクパクと池の鯉の様に開閉し、目を大きく見張りながら、翁を指差した。

確かに、彼…幸人くんの反応は人間ならば当然のもので、翁を見ておきながら何の反応も示さない凧と芳華が異常なのだ。

幸人くんは真つ青な顔をしてガクガクと全身を震わせながら、額に汗をして凧の治療を行っている翁を見詰めている。

「あの、ね、大丈夫だから。この人、私の知り合いで、その、今ちよつと凧の治療をしてくれてるだけだから…」

私は出来るだけ幸人くんを刺激しないようにやんわりと説明する。しかし、妖異を見慣れた芳華にとっては、そんな幸人くんの姿は非常に情けなく、ガツカリするものだったらしい。あからさまに片方の眉を跳ね上げ、冷たい視線を送った。

「しつかりしなさい、幸人くん。こんなのでビビッてたら、お父さんの手伝いなんて夢のまたゆ…」

私は慌てて芳華の口を塞いだ。

「…ばか。幸人はいいんだよ。普段は見えないんだから」

更に、凧は冷たく言い放つ。

別に見えないのは幸人くんが悪いわけじゃない。見えるから良いと言う物でもない筈なのだ。気が付けば、幸人くんは下唇をギョツと強くかみ締めて俯いていた。

「ちよつと、二人とも…！」

私は二人を止めようと、口を開きかけた。すると、今まで黙っていた翁が口を開く。

「ふんしゅー…人間とは面倒な生き物じゃあなあ？実に面倒じゃあ。

わしに言わせれば、人間なんて皆おんなじに見えよる。つるつとして、みいんなたてにひよる長いだけじゃあ。わしら妖怪にすりゃ、見えようが見えまいが、人間は人間じゃあ。無視しようが、騒ごうが、怖がるうが、泣こうが、何にもかわりゃあせんわいい」

翁の手が、光と共に凧の腹の中にめり込んでいく。

「あ…クツ…！」

「ふんしゅー…生きる上で最も大事な事は、見える事でも、特殊な能力を持っていることでもないの。いかに普通に、いかに己と周りの者とを大事に出来るかだけじゃあ。人間だけじゃあなあそんなことで互いにいがみ合うのはおふえふえふえ…」

他の人の目にどう映るか分からないが、翁はとても楽しそうだった。凧、芳華、幸人くん、ひよつとしたら私も、みんな翁にしたら足の生えかけ位のおたまじゃくしに見えるのかもしれない。

翁の目は優しく、慈しむに様にさえ見えた。

「ふんしゅー…まあ大体これでよかるう。小さいの、もう起きて大丈夫じゃあ」

ずるり、と凧の腹から手を引き出しながら翁は満足げにニンマリと微笑む。凧はその腹の不快感に顔をしかめた。

「翁、ありがとう」

私は精一杯の感謝の心を込めてお礼を言う。

「ふんしゅー…なあに、構わん構わん。ふえふえふえ」

ところが、柔和に笑った翁の顔が一瞬、鋭く引き締まった。

「伏せるんじや…！」

今まで一度も聞いた事のない、鋭く響き渡る翁の怒鳴り声。翁はそのぼつてりした体からは想像も出来ない素早さで私たちを背に庇うと、大きな水球で全員を包み込んだ。

首の後ろの毛がゾワリと逆立った。とても嫌な感じだ。

途端に、水球の周りに鋭く切り込む様な無数の小波さびなみが立ち、激しく水の飛沫を飛び散らせる。

「キ、キ、キ、ジジイ…歳の割りに素早いじゃねえか、え？キヒヒ」

「ふんしゅー…。ふむ…。お主は相変わらず、えげつないのお」

私たちは水の壁越しに、招かれざる客と見詰め合う。

「ムジナ…!!」

「……!!」

「なに…あれ!？」

何故ムジナほどの禍々しい妖異に誰も気付かなかったのだろうか。私は冷たい汗が背中を伝い落ちるのを感じた。恐らくこの場に居る全員が同じ思いだろう。

「キ、キ、キ、おいチビ。なんだその面は?え?キヒヒヒ…堪んないねえ、俺が怖いか、え?チビ?どうだ?キヒヒヒ」

喉の奥がひき付いて、鼻の奥にジンとした痛みが走る。

「キサマ…!!」

私はギリツと唇をかみ締めた。

このままでは私は間違いないで負ける。守るものが多過ぎる。

私は焦りと不安で目の前が真っ暗になって行くのを感じた…。

## 第八幕：目覚め（後書き）

更新がだいぶ遅くなってしまいました……。次回からは大丈夫かと思  
いますので、どうぞ見捨てずに最後までお付き合い下さい。

幕間・芳華 前編

中二の冬、その男は突然やって来て私にこう言った。

「コレは使い物になりそうだな。…連れて行け」

私に抵抗する権利はなかった。お祖父ちゃんもお祖母ちゃんも、怯える目付きでその男を見ているだけで、その場に居る誰もが同じで…私を助けてはくれなかった。

そうして私は、母親の葬儀の最中に引きずられるように拉致される。

大きな黒塗りの車。広い車内。隣に座ったさっきの男。

「出せ」

それを合図に車は走り出し、ろくな思い出なんかなかったけど、住み慣れた家を後にした。

車の窓はスモークが張ってあり、景色なんか見えやしない。まあ、どうせ見えた所で畑か山かどちらかしか見えないのだから、あんまり意味はないのだけれど。

この場には沈黙がどっしりと腰を下ろし、誰一人として声を出す者はない。

ひたすらに続く、車のエンジン音。

私はいい加減飽きてきた。

この男は何者なのか、とか、今から何処に連れて行かれるのか、とか、頭の片隅にチラリと浮かびはしたが、知ったところで今の状況が変わるものでもない。

「あの、なんかラジオとか付けてもらえませんか？つまらないんですけど」

私は誰に言うともなく、取り敢えず言ってみる。この時、初めて隣の男がピクリと反応した。

「…いい度胸だな。これから何処に連れて行かれるのか、とか、私は何者か、などとは聞かないのか？」

射すような視線が左の頬に突き刺さる。私は大きく溜め息を吐いた。

「聞いて、どうするんですか？最初から何も説明をしない人に質問したって、まともに答えてもらえるとは思えませんし」

そう言つと、私は真っ直ぐ男の瞳を見返す。男の瞳に、チラリと楽しそうな光が一瞬過つた。

「成る程。確かにそうかも知れんな……。おい、ラジオを付けてやれ」男は運転手の男に横柄に言い放つ。

「かしこまりました」

さつき、私を車に押し込んだ男が恭しく返事を返すと、車内に音が満ちた。流れているのは軽快なラジオDJの声と流行の音楽。好きではないが、何もないよりはよっぽどマシだ。

そのまま、車は私と男と止まる事を知らない音の洪水を乗せて、ただひたすら走り続ける。

どれくらい経つたのだろうか、ようやく煩わしくなっていたエンジン音と振動が止まった。

「降りろ」

男は私にそう言つと、自分だけサツサと降りて車が横付けされた建物の内部へ入っていつてしまった。

開いたドア越しに見える空は、既に夜の闇を纏っていた。

私は他にすることが見当たらないので、重い溜め息を吐き出すと、モタモタと腰を上げる。車から降り立ち、建物の全貌が見えた時、少しかだけ驚いた。

これは、家？

例えるならば、よく時代劇に出てくる羽振りのいい商人なんかに住んでいそうな大きな和風建築物。もつと現代的に言えば、どこかの高級隠れ家風の旅館。

正面には左右に開く引き戸が大きく開放され、どこぞのダレソレが書いたとか云いそうな大きな衝立がドン、と据えられている。その上、見るからに高級そうな上がり框かまちはピカピカに磨かれ、一点の

曇りも許されない風格があった。

しかし…。

なんだろう、ここは？

私はきつと露骨に嫌な顔をしていたに違いない。そこは見るからに何もかもが高級で、ピカピカ光輝いている。…にも拘らず、中から漂ってくるのは、光を曇らせる重く陰鬱な澱んだ空気。両顎の付け根の辺りが締め付けられるように痺れ、喉の奥に酸っぱいモノが込みあがってくる。

気持ち悪くて、吐きそう…。

耐えられず、思わずよろりと後ろに下がる。

「なにをしてる？早く中に入れ。当主を待たせるんじゃない！」

いつの間に傍に居たのか、運転手の男が力任せに私の左二の腕を掴むと、ぐいと建物へ引つ張って行く。

「痛い！一人で歩けるわよ、放して！」

本当は中に入りたくなんかなかった。気持ち悪くて気持ち悪くて堪らない。

ここは、オカシイ。

私の頭の中で“何か”がザワザワ音を立てて騒ぎ立てる。行きたくない、行きたくない、中になんか行きたくない！

ゴクリと喉が上下する。冷や汗が頬を伝い、顎を伝い、敷き詰められた石畳の上へぼとりと滴り落ちる。無意識に握り締めた掌の中に汗が溜まる。

「…ふん、なにビビッてんのよ芳華。バツカじゃないの？」

口元を少しだけ動かし、誰にも聞こえないほど小さな声で自分を叱責する。グツと顎を引き、再び顔を上げる。

ここで引き返したって、どうせ行くトコなんか、ない。

死んだ母親は霊能者とか云う男に騙されて私を産んだ。その後も、色んな詐欺まがいの霊能者に縋って、幸せになれない理由を探していた。祖父も祖母も、よく分からない神様を拜むのに必死で、何も目に入らない。

皆、みんな、ミンナ、あの人たちは何かに縋らなければ生きていけない。

でも、私は違う。

私は誰にも頼らない、誰かに頼ったりなんかしない。

私は覚悟を決めて、再び足を踏み出した。

……しかし……そこは……私の足を踏み入れたその世界は……想像を絶する生き地獄。今までの自分の生活がどんなに恵まれていたのか、痛いほど骨身に沁みた。

それから二年、どうにか私は生き抜いている。それこそ今では、常識では考えられないような事がどんな身近で起きようとも驚かなくなつた。

例え、今すぐ私がここで死んだとしても。

「……本当に、しつこいわね」

私は学校の屋上で独り言を言っていた。正確には、傍目に見ればと言うことだ。

いま私の前には、柄の長い斧を持ち筋骨隆々とした小山のような牛鬼が立ちはだかつている。赤く光る目を見開き、牛そのものの口元からは絶えず粘度の高い涎を垂らし、獲物を捕らえようとする狂気に満ちた臭気を放つ。

「私、アンタみたいなタイプが一番嫌い。臭いし、筋肉馬鹿だし。

どうせ、あの糞ヤローが呼び出したんだろうけど、いい加減、懲りて欲しいモノだわ」

牛鬼が荒く息を鼻から吹き出す。斧を持つ腕に力が込められ、今にも飛び掛らんと私の隙を窺っている。

私は素早く制服のポケットに忍ばせている呪力を込めたワイヤーを取り出し、相手の動きに合わせて緩いたゆみをつけて構えた。

無意識に喉がゴクリと上下する。幾らこんな化け物の相手に慣れて来たとはいえ、今の状況ではパワーでもスピードでも、圧倒的に私の方が不利。

その極限の緊張が、私の体を微かに震わせていた。額から、一筋

の汗が伝い落ちる。

お互いに牽制し合い、なかなか次の動きに踏み出せない。長い沈黙の末、痺れを切らした牛鬼がいざじりつと私へと足を踏み出した。するとその瞬間、状況は一変した。私はまだ何もしていない。なのに、牛鬼は空を切り裂く断末魔を放つと己の体の中心へ向けて風車…いや、渦巻きに飲み込まれる潮のようにグルグルと擦じれて消えていく。

ぐうおおおおおおううう…!!!

最後はしゅるんと小さな音を立て、今では始めからそこには何も存在しないかのように、元の屋上へと景色を変えていた。私は慌てて周囲を見渡す。

だれ？

場合によつては、次は私が消される。息を殺し、肌がピリピリと痛む限界まで感覚を研ぎ澄ます。しかし…。

「お嬢ちゃん、暴れんなら他所でやってくれないか？」

その声は、私の真後ろ…それも頭上から降ってきた。  
なんで？

慌てて飛びずさり、ワイヤーを両手で構える。今まで、何の気配も感じなかった。後ろを取られるなんて、この男が私を殺す気ならばもうとつくに私は死んでいた。

「…だれ？」

「誰でもいいだろう？それと…お節介ついでだ…」

その男はそう言つと、私の左肩の上へ手を伸ばす。  
ぶちっ。

「お前、隙が多すぎ。死にたくなきゃ、それをなくす事だな」

男は私の目の前でその手に掴んだ監視用の蟲を私に見せた。

「何で…私を助けたの？」

「別に、助けたかつたわけじゃない。騒がれるのが面倒だし、牛鬼は臭すぎる。そんな臭いが付いてたんじゃ、後で面倒だから…」

男はそう溜め息混じりに呟くと私に背を向け、ひらりと手を振っ

て屋上の出入り口に消えていった。

ボタンとその扉が閉まった瞬間、緊張の解けた私はその場にぐったりと膝を付いた。あの男は一体何なんだ？私よりずっと強い。あの牛鬼を一瞬で消し去り、あの状況でも完全に気配を消している。

「…学校の制服だった、よね？」

私は必死でその男の人相や風体を思い出そうとしていた。とにかく、敵なのかどうなのかを確かめなくてはならない。

背が…そう、背が凄く高かった。百八十はあるのではないか？短めにカットされた黒髪、強い意志を湛えた切れ長の瞳。思えばまるで、非の打ち所のない少女漫画の主人公のようだった。

私は放課後、その男の素性を確かめる為に後を追けることにした。始めは見つけるのが難しいのではないかと懸念したが、どうやら取り越し苦労だったようだ。今まで全く気にした事がなかったから気が付かなかつたけれど、その男は学校内でも目立つ存在だった。

三年の神原凧。

余りにもあっけなく見つけてしまって、何だか肩透かしを食らった気分になる。

言うまでもなく容姿端麗、しかも頭脳明晰で学年トップ、拳句はスポーツ万能。ここまで揃えば、一般生徒にとっては嫌味でしかない。

私は気配を押し殺し、十分な距離を取りながら神原凧のを追けた。…なのに、学校を出て十分後、角を二つ曲がった所であっさりとはれてしまった。

「…何の用？」

曲がって直ぐに、迷惑そうな顔で仁王立ちになっている神原凧。

正直、もの凄く焦った。

「用なんかないわよ。でも、アナタが私の敵でないことを確かめないと、おちおち眠れもしないわ」

私は悪びれるでもなく、堂々とそう言い放つ。神原凧は短く舌打ちをすると迷惑そうに綺麗に真っ直ぐ伸びた眉をしかめ、溜め息を

吐いた。

「お前の家とは、俺は何も関係ない」

「どうだか？」

「むしろ、俺はお前にうろごろされると迷惑だ」

「何で？」

「それこそ、お前に関係ない。俺の前から消えてくれ」

「じゃあ、何で私を助けたの？」

「単に成り行きだ。もういいだろう？サッサと帰れ」

どんとんと相手がイライラしてくるのが分かる。しかし私は相手の目を真っ直ぐに覗き込みながら、次々と質問を重ねる。

「嫌よ。アナタは何者？」

「関係ないだろう？」

「あるわ。同業者？」

「…お前、しつこいぞ」

「いいじゃない。教えてよ」

「つたく、いい加減に…！」

神原凧がそう大きく口を開けた瞬間、ぴたりと声が途切れた。私は不思議に思い、後ろを振り向いて固まった。

「どうしたの、凧？お友達？」

私の直ぐ真後ろに人が立っていた。幾ら話しに気を取られていたからといって、今日はこれで二度目だ。

幕間・芳華 後編

一体何なんなの、この人たちは？ 幾らなんでも、この私が全く気配を感じなかつたなんて、絶対にオカシイ。

「あ……」

私はそう声を上げると、素早く神原凧（カ）とその人物を交互に見比べた。

私の見る限り二人の様子は全く対照的で、神原凧はマズイと表情にありありと書いてあり、右手を顔に当てて天を仰いでいる。反対に私の背後の人物はとてもニコニコ嬉しそうで、見ているこっちが拍子抜けをしてしまう。

「どうしたの？ 何かあった？」

その人はふんわりと優しく微笑む。それが堪らなく綺麗で、私の心臓はドキリと震えた。

長い黒髪を後ろで無造作に一つに束ね、何でも無い只の白いシャツとジーンズなのに、まるでその人の為にデザインされた様にとてもよく似合っていた。

そして何よりも、濡れたように輝く黒く大きな瞳が白い肌を一層引き立たせ、この世のものとは思えない美しさと色香を漂わせている。

私がかあつと一瞬で顔に血が上った。

「……あのなあ……学校の近くにはあれだけ来るなって……」

「だって、嫌な気配があったから……」

心配で……とその人物は口ごもると、ばつが悪そうに上目使いで神原凧を見やる。

「全く……」

神原凧は迷惑そうな口ぶりではあったが、冷たく切れ上がっていた目元がとても優しく、まるで嬉しくて堪らないと云った感じだ。仕方がない、と、肩を下げて溜め息を吐くと、神原凧は私へ冷た

い視線を投げつけた。

「とにかく、俺はお前に関わる気はない。面倒は御免だ」

じゃあな、そう言っただけで私の後ろの人物へ並ぶと、その肩を壊れ物でも扱う様な優しさで抱き寄せて背を向ける。相手は何やら私の事を気にして、神原凧へ小声で抗議をしているらしいが、どうやら主導権は神原凧にあるらしい。最後にその人は私へチラリと視線を寄こし、困った様に微笑んだ。

その時、ズキツと胸が痛み、何故だろう…何故か私は言いようのない苛立ちを覚えた。

二人の姿はまるで、いつか見た映画のワンシーンの様で…誰でもする何でもない仕草ですら様になる。

…誰が見ても絵になる、綺麗で素敵カップル。

私の目には、それがこの世全ての幸せの縮図であるかに見えてイライラした。

拳をギュツと強く握り締める。

私は一体、何を考えていたのだろう。

一体、何を期待していたのだろう。

「…バツカみたい」

俯いて唇をかみ締めた。

どうせなら、もっとマシな考えが浮かべれば良かったのに。一瞬でも、チラリと神原凧が私の味方になってくれれば良いなんて考えてしまった。

そう…ハッキリ白状して認めるならば、確かに今の私は自分でも分かる位に心がガタガタになっている。

二年間ずっと張り詰めていた心が、悲鳴を上げ始めている。

常に命の危険を感じる緊張と恐怖。

周りに居る人は誰も信じられない。

心の逃げ場が何処にも見つからない…。

私は鉛のように重くなった足を引き摺りながら来た道を引き返す。帰れば私を消したくて堪らない人たちが、首を長くして待ち構え

ている。きつと、今回の牛鬼の件は誰が教えるでもなく、ミンナが既に知っているに違いない。

これは私にとって大きなマイナス。もし私に強い味方が付いたとなれば、今まで私を後回しにして来た奴らも間違ひなく本気を出して来る。

重い溜め息が口を突いて出た。今夜もきつと長い夜になるだろう…。

そして、あっさりとその予想は大当たりする。

部屋に帰り着いて着替えをしていた時、その知らせは舞い込んできた。

「よお芳華。当主がお呼びだぜ？」

大きく放たれた部屋のドア。そこに寄りかかるように腕を組んだ男が一人立っている。

「…ノックぐらいしたらどうなの？」

「ハッ、別に良いじゃねえか減るモンじゃなし。…ふうん、随分と立派に育ったじゃねえか。お前の母親もなかなかイイ体してたが…悪くないな」

その男は顎に手をやり、ニヤニヤと嘗め回すように私の体を見る。

「伝言は済んだでしょ？サッサと消えて」

「おいおい、仮にもお父様に向かってその口の利き方はないだろう？もつ少し、可愛い言い方があるんじゃないのか？ん？」

私は短く舌打ちをすると、手早く着替えを済ませて男を睨み付けた。

「誰が、父親？冗談じゃないわ。それとも、私に取り入るつもり？」

男は方眉を露骨に跳ね上げ、たった今までであった余裕が掻き消えると苦々しい顔になる。

「何だと？」

「女を食い物にするしか能のない男のクセに…口の訊き方に気を付けることね」

「何だこのガキ！！」

男が怒りのままに私に飛び掛って首に手を掛ける。

「こんな首、へし折ってやるうか？え？」

悪鬼のような醜い形相。私を脅すつもりなのだろう、腕に力を入れたり緩めたりを小刻みに繰り返す。

「今なら許してやるぞ、芳華？命乞いしてみる。お父様、許して下さいってな！」

「ばっか…じゃ…ない、の？」

怒りが炎となって飛び出さんばかりの目で、ギリツと男の指が私の首に食い込んだ。その時、私の視線の先にある男の肩に細い指が掛けられ、静かな鋭い声が響いた。

「吉明さん、お止めなさい」

男は一瞬で青ざめて大きく目を見張ると、震える手を渋々放す。

「例えどんな理由であれ、そんな真似は良くないわ。ねえ？」

「あ…ああ…」

男はそそくさと私の部屋を後にして消えた。残されたのは声の主、吉明と呼ばれた男の腹違いの妹、吉江だった。

「芳華さん、許してやってね？吉明も悪気はなかった筈よ。ね？」

日本的な美人で大人しい顔立ち。落ち着いた声のトーン、優しく微笑む口元。

しかし、鋭く冷たい色を宿した目だけは笑っていない。

「…はい」

吉江は現時点で最も当主に近い存在と言われ、公私共に現在の当主の右腕を勤めている。そして、この一族の中で最も冷酷で非道。

一度でも吉江に睨まれた者は必ず、死ぬ。

それが例え、身内であろうと自身の子供であろうと容赦はない。

「さあ芳華さん、当主がお呼びよ。私といらっしやい」

有無を言わせぬ圧倒的な迫力。この小柄な女の体から、どうしてこんなに力を感じるのだろうか。

吉江に会うたびに私は己の無力さに、冷や汗が止まらなくなる。

…しかし、私はこの女を越えなければ生き残れない。出来るか、

出来ないかではない、やらなければ、私と云う存在はこの世から消えてなくなる。

体に現れそうになる震えを押し隠し、私は黙って吉江の後ろを歩き、当主の間へと進んだ。

そして、私は当主に在る事を言い渡される。

仙道の名において封印された第一の地、そこへ行き、資格を問う岩へ赴き帰ってくる事。

それは、後にとても重要な意味を持つ。

当然、私には拒否権はない。

私は日が沈むギリギリの時間に車でそこへ運ばれ、朝に迎えに来るからと置き去りにされる。ここが何処かは当主に近い数人しか知らないし、私は目隠しをされていたので自力で帰るうにもハッキリ言っただけだ。

まばらに細い木々が生え、腰まで草がびっしりと生い茂っている。その中で唯一つ、私の前に一本の細い道が真っ直ぐ伸びていた。

視界が悪い訳ではない。でも、言いようもない嫌な気配が、この土地全体に充満している。昼間の牛鬼なんか足元に及ばない禍々しさが、私の呼吸を浅くする。

「ふん…やっつてやろうじゃない」

知らずに掌に汗が滲む。言葉とは裏腹で緊張のせいで肘から下が冷たくなって感覚が鈍くなる。

私は大きく一度だけ深呼吸するとその道を歩き出した。ジャリ、ジャリ…足の下で湿った土と枯れた草が混ざる。

どれほど歩いたのか、月明かりのみの光源で極端に時間の感覚が鈍くなった時、前方に大岩と呼べそうなものが現れた。

細長い注連縄しめなわが巻かれて黒々と高くそびえ立ち、風になびく草へと長い影を落としている。

これが、当主の言っていた資格を問う岩なのだろうか？じっと目を凝らし、気配を窺う。

いや、違っ…。

アレには何も感じない。寧ろ、その二メートルほど後方にある、平たい直径三十センチほどの岩の方が気になる。

ゴクリと喉が上下する。間違いない、あの岩の方だ。

資格を問う岩……？違う、そうじゃない。アレは封印の岩だ。

そう思った時、私の全身から一気に血の気が引いた。

騙された！これは罠だ。

今にもこの封印は解ける寸前……このままでは私は百パーセント死ぬ。そして、私の死が当主、もしくは吉江がこの地を再び封印する鍵になる。

それを知っていて……いや、だからこそ彼らは私をここに寄越した。言いようのない怒りと絶望が腹の辺りでグルグルと重く渦巻いている。でも逆に、ここで私が生き残れば仙道の名に一気に近付ける。彼らの思い通りになって堪るものか。

けれど、そう思いながらも、情けないほど足は震え、頭の中は真っ白になっていった。

空気が風ではない何かによって波紋の様に振動する。それは、心臓が鼓動する音に近い。

ドクン、ドクン、ドクン……。

余りの禍々しい気配に眩暈がして、まともには立っていられない。見えない重圧が全身に押し掛かり、膝がガクガクと震える。

どうしよう、どうすればいい？

辺りに視線を彷徨わせる。焦れば焦るほど、自分の呼吸音だけが耳の奥で大きく響き、思考は混乱する。

とにかく、落ち着かなければ。私は無意識に胸元にあるペンダントへ手を伸ばしていた。

あの母親が、唯一私に残してくれた物。

死ぬ直前に、私の為に全財産をはたいて買ってくれた物。

赤く燃える宝石。

これの価値がどんな物だか良く知らない。けれども、あの人が私の為に必死になって探し、手に入れてくれた大切な形見。

私はそれを両手で固く握り締め、深呼吸を繰り返す。

イチ、ニイ、サン。

掌に伝わる暖かな光。それはやがて全身に広がり、私の体を満たした。不思議と恐怖心が影を潜め、冷静な思考が甦ってくる。

「私は、負けない」

まだ相手は岩の下で姿を現していない。ならば私にだって勝機はある。

足を一步踏み出す。岩の主は私が足を踏み出すにつれ、ドオン、ドオンと威嚇するかの様に大きく空気を振るわせる。

皮膚をビリビリと駆け巡る殺気。

私は一気に岩までの距離を詰めると、持って来たありったけのワイヤーで岩の周囲に線を張り巡らせた。

「出させるもんか！アンタは永遠に岩の下に居るんだよ！！」

私は印を切る事も呪を唱える事も忘れ、ひたすら岩の主を押さえ付けることに全力を傾けた。

お母さん、力を貸して。私を守って！

石よ、赤い宝石よ、私の力に！！

ワイヤーに赤い閃光が駆け巡る。掌が焼け付く様に熱い。

岩は断末魔の悲鳴を上げるかのように震え、ブルリと大きく振れると動かなくなった。さっきまでの瘴気が嘘の様に影を潜める。

やった…？

荒い息を整えながら、恐る恐る視線を手元から岩へと移す。

しかしそこにあつたのは、私を絶望させるに十分なものだった。

私の体を飲み込んでもお釣りが来る、異様に大きな目。限界まで見開かれたそれは、ゾツとするほど赤く血走り、静かに私を睨み付けていた。

その時、私は自分の運命を悟った。

…ああ、終わった。

もう、駄目だ。お母さん、ごめんね…。

私は覚悟を決めた。この目の主はワイヤーに縛られているせいで、

今は残りが岩から出られずに居るが、私の力など足元に及ばない強大な妖異だ。

もう私には、完全に勝ち目はない。

「くっくくく」

私は自嘲気味に笑いを漏らす。と、突然この場に似つかわしくない、清涼な一陣の風が吹き抜けた。

「頑張ったね。もう大丈夫」

ひんやりと心地よい腕が、私の頭を抱き寄せる。

「もう、大丈夫」

その声は、聞き覚えのある甘い響きを持っていた。ワイヤーの先から伝わってくる、岩の主の怯えと恐怖。

「こんな雑魚、サッサと消しちまえばイイのに。お前の家はそんな事も出来ないのか？」

低く、静かに響くその声にも、覚えがある。

岩の主は怯えて激しく暴れ狂う。しかし、その姿は既に体の中心に向かってグルグルと螺旋を描きながら消えていく。

ぎいやあああああ……！！！！

私の背丈ほどもあった目は更に赤みを増し、苦しいのか涙を流して小さな点にシュルンと飲み込まれて消えた。

「こつはら、なぎ……？」

虚ろな声で私はその人物の名を呼んだ。私を抱き締めた人はふわりと笑いながら頷く。

「お前、京に感謝しろよな？俺は面倒だから、嫌だったんだぞ……」

何が起きたかまだ理解できない私に、神原凧は不機嫌に後頭部を掻き毟って溜め息を吐いた。

「……ったく、礼の一つも言えないのかね？このお嬢ちゃんは」

まるで苦虫を噛み潰した様な顔でイライラと腰に手を当て、仁王立ちで私たちを見下ろす。それに対し、私を抱き寄せていた人物は少し怒ったように口を尖らせる。

「もう、凧だったら……怪我はない？立てる？」

心配そうに顔を覗き込む真つ黒な瞳と目が合ったその瞬間、私の心臓は再びドキンと縮み上がった。

「…あ、え？」

空から降り注ぐ、明るい月の光。

その人は私の手を取ってゆっくり立たせてくれる。その後ろに、神原凧が影のようにそっと寄り添う。

私の目の前で白く輝く光が二人を照らし、一つの芸術作品を作り上げた。まるで光と影…京と呼ばれた人が無垢な光ならば、神原凧は深い闇を宿した影だ。

呆れるほど、この二人の存在は美しく…異質だ。誰もこの二人の間に入る事は出来ない。

私は大きく溜め息を吐き、肩を落とす。そう、始めからこの二人の間には私の入り込める場所などない。

スツと目に見えない暗い壁が私を取り囲む。

ずっと分かっていた。誰に言われなくてもはなから分かっていた。周囲から隔絶された私は…独りだ。

でも。

私は胸のペンダントを再び両手で握り締め、呼吸を整える。

その壁を挟んでも、誰かと会話は出来る。

声は壁を越えて、私と誰かを繋ぐ。

「ねえ、京さん。私と友達になつてくれない？私は仙道芳華よろしくね」

「え…あ…う…うん。でも…」

京は戸惑いの表情でチラリと神原凧を見やる。当然、相手は渋い顔だ。

私はニヤリと笑った。

「イイのよ。私、人間が嫌いだから。アナタだから…友達になりたいの。だめ？」

「…いいの？本当に？」

「うん。なつてくれる？」

「うん！」

「オイ、京！！」

神原凧は大慌てで京を説得するが、相手はその言葉など何処吹く風だ。

私と京、そして凧。

私たち三人の関係はこれから始まった。

そして、これが全ての始まりだった。

私はその数カ月後、姿を消した京と凧を探す為、当主の座を賭けた吉江との闘いに挑んでいく事となる。

失くした者を再び手に入れる為ならば、私は何を犠牲にしたとしても構わない。

例えばそれが壁越しの安息でも、私にとってそれは…私の存在理由なのだから。

## 第九幕：鳴動

「キ、キ、キ…なんだあ？チビ。不思議で堪んないって顔だな、え？それとも、悔しくて堪んないってか、え？キヒヒヒ！」

「……………！！！」

ムジナの視線は私を通り越して、凧、芳華、幸人くんに注がれている。胃の辺りを激しい嫌悪感が撫で上げる様に駆け抜け、思わずその視線から隠すように皆を背に庇う。

「キ、キ、キ、なんだあその態度は？え、チビ。まさか、俺から何かを隠そうってんじゃないだろうな？え、チビ？」

ニタリと口元を歪ませるムジナ。きつと今ヤツの頭の中では、どうやって私を苦しめるかを厭らしく捏ね繰り回しているのだろう。嬉々として私と会話をしている事から、容易に想像がつく。

「…京、アイツは？」

凧が私の左手を後ろから掴み、その瞳に好戦的な輝きを宿している。チラリと目をやると、芳華もまた同じ目をしていた。

私は思わず天を仰ぎ見てしまう。

そう…この状況でこの二人に手を出すなと云う事は出来ない。むしろそんな事を言ったが最後、むきになって掛かって行くに間違いない。

自然と大きな溜め息が口を吐いて出ていた。

「ムジナ。…私が以前、色んな意味で世話になった妖異だよ。私もヤツの能力は良く知らないけど、カマイタチを使うみたいだね」

「ふうん…」

凧の反応はなく、芳華の声は何か考え事に耽っている様だった。もしかしたら、私はこの状況が来る事を一番恐れていたのかもしれない。

凧を失う事など考えられない。勿論、芳華もだ。

彼らは黙って私の後ろに居てくれる人たちではない。むしろ私の

前に出て、鬪おうとするだろう。

しかし、それはきつと自殺行為に等しい。

「キ、キ、キ、面白いな、え？チビ。お前の後ろに居る奴らは、どいつもこいつも…イイ生き方をしてるタイプじゃねえなあ？え、チビ。キヒビ、むしろ、怨み怨まれ妬まれて…キヒビ！最悪な奴らじゃねえか？え？」

ムジナは肩を上下に揺すり、揶揄する様に笑う。そして更に、コートポケットに深く仕舞っていた右手を出すと、一人一人を指差して、更に面白そうに笑った。

「キ、キ、キ、一番後ろに居る奴、お前は人を怨んで怨んで、それに縋って生きてるな？キヒビ、いい顔してるぜ、え？それとこの女、お前は随分、酷い生き方じゃねえか、え？何人、殺した？キヒ、いいねえ俺の好みだ。そして…キヒ、その坊主。お前、人間とは思えねえな、え？サ・イ・ア・ク・だ。キヒヒヒ！たまんねえな！え？チビよお！…どいつもこいつもミンナ、怨みに塗れてキャハハハ！どうにもならないクズばっかじゃねえか！キヒ、ヒャーハツハツハ！！」

「黙れ！ムジナ！！」

私は挑発だと知りながらも、怒りに駆られて翁の水球から飛び出そうとした。しかし、その腕を尻の手が引き止める。

「だから、なんだ？クズで結構じゃねえか。俺はそんな事はどうでも良いね」

「あら、奇遇ね。私も一向に構わないわ。大体ね、人間、生きてて怨まず、怨まれず、なんて…そんな馬鹿な事、ある訳ないじゃないの。呆れるわ」

尻は余裕の笑みを浮かべ、芳華に到ってはムジナを蔑み、見下した表情を隠しもしない。

「キ？」

ムジナは二人の予想外の返答に、首を殆んど九十度に右へ傾ける。「ふんしゅー…してやられたのおムジナよ、ふえふえふえ！」

翁が笑うのに合わせ、ごぼり、と水球の水が揺れた。ムジナの表情が、見る見るうちにギリギリと醜く歪んでゆく。

「キ、キ、キ、キ、じじい…生意気な事言ってんじゃねえぞ？あ！？お前らもなあ、俺の言葉にナニ余裕こいてんだ！？お前らみたいなクズはなあ、ただ震えて俺の餌になりやあ良いんだよおお！！」

部屋の空気がムジナの咆哮と共にビリビリと震え、水球の表面から細かい飛沫を飛び散らせる。

「キ、キ、キ、貴様ら…。キ…キヒヒ、キヒヤハハハハハ！！喰つてやる、みいいんな喰つてやるぞお！ギャハハハハハ！！！」

黒い帽子とコートの立てた襟から辛うじて見えていた目と口元。今やそれらは自らを惜しげもなく私たちの顔前に晒し、ゾロリと並んだ鋭い歯の間から、細長い舌がベロリと己の顔を舐め上げた。

そして、次のムジナの行動は素早かった。

体の両脇に腕をだらりと垂らしたかと思うと、体を二つに折らなばかりの姿勢で一気に私たちの後方に回り込む。

そのスピードは、常人では目で追う事も移動したと感ずる事も不可能だ。水球の表面が、ムジナが立ち止まった後に小波立つ。

「キ、キ、キ、まずは、お前からだ！キャハハハハ！！」

そう言うつや否や、ムジナの両腕は水球の表面を貫通して幸人くんへと伸びる。幸人くん本人はムジナの動きに付いて行けず、己の後方から伸びる腕に気が付かない。

「幸人くん…！！」

私が声を上げた時には、既にムジナの腕が幸人くんの首に絡み付いていた。

「ひっ…！！」

顔面蒼白の幸人くんは、己の身に何が起きているのか分かっていなかった。しかし、人間の中にある動物の本能だろうが、現在の状況がとても良くない事だけは理解しているようだった。

「キ、キ、キ、キ、そうだ、怯えろ、怯えろお！キャハハハ！！」

「あ…あ…あ…！！」

怯える幸人くんの双眸からはポロポロと涙が零れ落ちる。死が腕となつて絡みつく感覚とは、どれ程の恐怖を生むものだろうか。

ムジナは幸人くんの体を水球から着実にずるずると引き摺り出して行く。

「ふんしゅー…うんむう…！」

翁は意識を集中して何とか幸人くんを水球の外へ出すまいと抵抗をするが、これだけの人数が中に居るのだ、どんなに頑張ろうとも持つ筈がない。

何時しか丸かった水球は一方に長い不自然な形へと変貌していた。

「キ、キ、キ、じじい！え、どうした？もうこいつの体が出ちまうぞお？キヤハハハ！」

「ふんしゅー…むうんむうう…！！！」

額に脂汗を滲ませ、翁の顔は苦痛に歪む。私はどうすれば幸人くんを無傷で助けられるかを必死で探っていた。もし、私が直接ムジナに攻撃を仕掛れば、間違いなく幸人くんは巻き添えを喰らい、下手をすればその命を落としてしまう。

どうにかして、ムジナと幸人くんを引き離さなければならぬ。

私は凧と芳華へチラリと視線を落とす。

どちらか…どちらかの協力が得られれば…。

私は二人へと口を開きかけた。すると、私の予想を凌ぐ事態が起こる。

水球とムジナの腕の接点が突然、ボシユンと音を立てて水蒸気を上げたかと思うと、翁の水球結界が内側から弾け飛んだのだ。

「キ…ギヤアアア！！腕が、俺の腕があああ！！！」

ムジナの本体は後ろへ絶叫を搾り出しながら反り返り、腕はそのまま落下する。

「誰が、ソイツを喰って良いつて言った？ナメタ真似してんじゃねえぞ？あ？」

「その通りね。私のテリトリーで勝手な真似はしないで欲しいわ」霧となつて舞い落ちる結界の水を全身に浴び、凧と芳華がムジナ

を見下ろす。

「そんなにコイツを喰いたきゃな、俺の許可を得るこつたな」

「あら、それなら私の許可も必要よ？こんな子供の判断じゃ危ないからね」

「何だと？」

「何か？」

二人の間に見えない火花が飛び散る。彼らは完全にムジナを無視して言い合いをしていた。全く…余裕なんだか単に緊張感がないだけなのか、私でもたまに分からなくなる。

しかし、これは願ってもないチャンスだ。

今、ムジナは両腕を失って攻撃の手が出せない。もしここで一気にたたみ掛けられれば、私一人の力でも間違いないで勝てる。

私は素早く二人の間を擦り抜け、ムジナへと距離を縮めた。怒りと苦痛で歪みきったムジナの顔は、今にも爆発しそうな程に赤く、くつきりと浮かび上がった血管がその凄まじさを物語っていた。

「キ…ギ…おのれ…クズが！クズどもがああ！！」

血走った目を剥き出し、口の端から涎が流れ出るのも構わずに、ムジナは呪詛の言葉を吐き続ける。

「殺してやるう…殺してやるぞおお！！！！」

その余りの醜さに、私は思わず目を叛けた。するとその先に、壊れた人形のように動かなくなった幸人くんが座り込んでいるのが見える。

「幸人くん！！」

虚ろに見開かれた目は、何処を見ているとも定かではない。このままの状態で放置しておくのは危険だ。

私は内心舌打ちをしながらも幸人くんの手を引き、翁の下へと運ぶ。

「翁！幸人くんを！！」

今は一秒でも時間が惜しい。ムジナに時間を与えれば与える程、私たちの勝機は減っていく。翁は黙って頷き、幸人くんの体にその

手を伸ばした。と、幸人くんの手が突然意志を持って私の手を握った。

「だめだ…駄目だよ！」

「え…？」

予想もしない出来事に私は驚いた。幸人くんは両腕で私へ縋り、涙を流す。

「駄目なんだ！！もう駄目なんだ！京は…京さんは…もう…傷付いちやいけないんだ！僕が全ての原因を作った…！僕が…京さんを…」「え？なに…？どうしたの？幸人くん？」

更に幸人くんは私の手を痛みが伴う程の強い力で繋ぎとめる。

「僕が、僕が……」

こみ上げる嗚咽が幸人くんの声を塞ぐ。

「あの時の…僕が、もっと、強ければ…！僕の心がもっと、しっかりしていれば…！！」

何を言っているのか、私は良く分からなかった。

しかし、幸人くんの瞳は深い悲しみと激しい後悔の念に染められ、彼の口から紡がれる言葉が一つ一つ私の奥深くに突き刺さる。

「僕さえ…。僕はアイツに喰われたって仕方がない人間なんだよ！…だって…だって…あの時、僕のつまらない嫉妬さえなければ…京さんが鬼になる事なんて…！」

だからもう、やめて…傷付かないで…ごめんなさい…。そう幸人くんは呟いた。

くらり、と世界が回った。後頭部から引つ張られる様に力が抜けて行く。

これは夢ではない、現実だ。いや…私はそもそも目覚めているのだろうか？

甦った私の記憶、幸人くんの口から吐き出された言葉。

真に呪うべきは人なのか過ぎ去った運命なのか。

私の心は激しく揺れ動いた…。

## 幕間・紅

人を、ただ純粹に想うとはどんな感じなのだろうか？

人に、ただ純粹に想われるとはどんな感じなのだろうか？

私の手に入れるモノ全て、視界に入るモノ全て、自分自身の力で得たモノなどあるのだろうか？

得られたモノなど、あつただろうか？

いいや…それは全て父上の物。

地位も名誉も全てを思うままに手に入れる男。

私はその一部。

父上の思い通りに動く駒。

私は今まで一度も自分の意志など持った事などない。儂い私の存在など、いつでも父上の言葉一つで否定も肯定もされる。

父上が私の全てであり、私は曖昧な自分の存在をそれに必死に縋って保とうとする。

消えないように、消えないように、自分が消えないように…。

でもある日、父上の美術品の中であるモノを見付けた。

それは、私の目を開かせた。

暗かった世界に、光を与えた。

部屋の中にちよこんと座る人形。

いや、違う…？

長い睫毛に縁取られた臉を静かに開閉し、小さく開いた桜色の唇がゆっくりと引き結ばれる。

私はいけないと思いつつも、その人形に近づく。

此処は父上の美術品の部屋だ。もし、万が一にも何かを壊すなどあつてはいけない。着物の裾すそや袂たもとに細心の注意を払う。

近付けば近づく程、その繊細な美しさに驚かされる。

真珠のように白く艶やかな肌、肩口に流れる緑の黒髪は自身が輝きを放っている様だ。

そして、控えめで桜貝のように鮮やかな唇、美しく完璧な曲線で描かれた眉の下には、黒曜石の如く輝く瞳。

どれを取っても紛い物など存在しない、完璧な美だ。息をするのさえもどかしく、その姿を見詰め続ける。時を止められるのならば、今この瞬間で永遠に止めてしまいたい。

欲しい。

私は心の底からそう願った。

しかしこれは父上の物だ。私には決して手の届かない、遠くにあるモノだ。

けれど…。

途端に触れたいと強い衝動に駆られる。駄目だ、触ってはいけな

い。

でも。  
ゴクリと唾を飲み込む。いけない、触りたい、駄目だ、触れたい、せめぎ合う心が一粒の汗となって米噛みをするりと伝い落ちた。

着物の裾を、強く握り締めて己を抑制する。

そうだ、父上の了解を得ればいい。この人形に触れることを前もって父上に言っておけば、怒られる事はない。

嫌われる事はない。

私の心は浮き立った。そうだ、そうすれば何も問題などない。私は急いで立ち上がると、抑え切れず興奮で熱くなった体を慎重に動かす。

そう、此処にある物全て、この世に二つと存在しないととても貴重な美術品…壊すどころか傷の一つも許されぬ。

「幸人そこでなにをして居るのだ？」

ビクリと体が強張った。竜笛じゆいふえの様に空間を鋭く裂き、響き渡る声の主は父上だ。無断でこの部屋に入ってしまった…きっと怒られる…。

喉の奥がギュツと締め上げられ、返事が返せない。

人一人分、開いた障子の隙間から、父上の怪訝な顔が見える。

「どうしたのかと、聞いておる」

「…あ、あの、障子が少し開いていて…その、閉めようと…して…」  
チラリと後方に視線を落とす。

「ですから…あの、その、奥にある人形が、あまりにも美しかった  
ものですから…つい、もつと良く見たくなって…む、無断で申し訳  
ございませんでした…!!」

私は泣きそうになりながら、父上に向かって頭を深々しんくと垂れる。

どうしよう、きつと怒らせてしまったに違いない。父上に嫌われ  
たら、私は一体どうすれば良いのだろうか？どうすれば赦してもら  
えるのだろうか？

緊張と恐怖が膝を震わせる。私は知らずと俯き、口元を左手で隠  
す仕草をしていた。

するとそういう時、決まって父上は呆れたように溜め息を吐く。  
私にとってそれは…はつきりと情けない、使えない奴だ、と言われ  
ている様に聞こえる。

汗ばんだ右手は、白くなるほど強く着物の裾を握り締めた。

長い沈黙。いや、単に私が長く感じただけで、本当はほんの少し  
だったのかも知れない。

「幸人、お前が美術品に興味を示すとは珍しい。ふむ…その人形、  
気に入ったのならくれてやろう。私にはどうせ世話など出来んから  
な。ほれ、もって行くがよい」

「…!!？」

我が耳を疑う言葉。

これは夢ではなかるうか？余りの驚きで伏せた顔を勢い良く父上  
へと向けた。

だが目の前にあるその表情は、感心とは程遠く、慈しみを持って  
いるでもなく…要らない物を処分する、ただそんな感じだった。

私は一体何を期待したというのか…不思議と心の片隅で、苦い落  
胆をほんの少し噛み締めた。

「どうした、要るのか？要らんのか？もって行くならサッサとする

「がよい」

私が直ぐに返事をしなかったせいで少し苛立った声音だ。しかし、私はそれでもなお天に昇る思いがして舞い上がっていた。この人形が私のモノになる？本当に？私だけのモノに…？震える唇が、自然と喜びで弓のように半円を描く。

私だけの、モノ。

「ありがとうございます、父上。この幸人、父上から頂きましたこの大切な人形、生涯大切にしよう御座います」

不思議と澁みなく言葉がつつらと滑り出る。

ついに手に入れた…私だけの、モノ。

「…ふむ。好きにするがよい」

私はサツと踵を返すと、人形の冷たくなった手を取って立たせる。それは私の手の導くままに動き、抵抗をしない。

嬉しさを隠す事が出来ない。そのせいか頭が真っ白で、まるで体がフワフワと宙に浮き、漂っている様だ。

父上の前を深々と頭を垂れて神妙な面持ちで自室へと向かう。

だが本心は大声で叫び、笑いたかった。

願った物が手に入る。それはなんと素晴らしい事だろう。

体中を喜びのむず痒さが駆け巡る。

なんと言われようとも構わない、どんな目で見られようとも構わない、私はこの世で最も素晴らしいモノを…ついに手に入れた。

私は自室に着くなり、障子を全て閉め切って侍女も全て下がらせた。

目の前に居るのは私が今まで焦がれたモノの全て。

その姿は幼女が着る様な衣装に包まれ、前髪は眉の辺りで、後ろ髪は肩より少し下で切り揃えられている。幼顔おこながおと小柄な体の所為で、その衣装に違和感はない。

けれど、きつと本来の歳は私より幾分か下ぐらいではないだろうか？

私はおもむろにその小さな体を力任せに抱き締め、全身で喜びを

噛み締めた。

「名はなんと言う？歳は幾つだ？」

腕の中で小さな頭が左右に力なく動いた。

「どうした？言葉が分からないのか？」

再び、小さく振られる頭。

「…しゃべれないのか？」

今度は小さく頷いた。

「そうか…」

私は益々そのモノを愛しく感じた。

私が居なければ、このモノは生きていけない。私が居なければ、何も出来ない。このモノは無条件で私を必要としている。

そう…無条件で私を必要としている。

胸の中から言いようのない震えが込み上がり、生み出される痛みと苦しさを私は満足の思いで受け止めた。

「名がないのは不便だ。べに…紅と言うのはどうだ？お前にきつと最も似合う色だよ」

その夜は眠るのさえ惜しく、紅の寝顔を一晚中眺めていた。

まさか私の人生の内、こんなに素晴らしい日が訪れるとは夢にも思わなかった。喜びが生み出す充足感が、今まで無味乾燥だった私の世界に彩と潤いを与えた。

そして、充足と輝きに溢れたその生活は私が死ぬまでずっと続くのだと、淡い期待で胸を高鳴らせた。

そう……続く筈だった。

しかし、夢の様な時間はその訪れと同じく、突然の終わりが待っている。

紅を手に入れた私は、翌日から変わった。

心に余裕が出来たからなのか、仕事も人付き合いにも張り合いがあり、全てが面白い程に上手く行った。それこそ、父上に頻繁にお褒めの言葉を掛けて貰える様にもなった。

楽しかった。

毎日が楽しくて、楽しくて、光に満ち溢れていた。

「よう、幸人！最近なんだか機嫌が良いな。さては、通う女でも出来たのか？」

ニツと口角を吊り上げ、同僚がからかう。

「…まあ、そんな感じかな？」

以前の私だったら、無視をするかピシヤリと強い口調で撥ね付けていただろう。

でも今は違う。

やんわりと笑顔で受け流す。

それを見ていた、私の唯一の友人が驚いた様に声を上げた。

「なんだ、そうなのか幸人？そんな大事な事、何で俺に言ってくれないんだ？」

捨てられた犬の様な目をする。

普段の彼は自信に満ち溢れ、誰からも一目置かれる存在だ。その上、父上に非常に気に入られ、いずれは妹の婿にと言われている。

「ごめんごめん、風<sup>かさなき</sup>。色々忙しくてつい言いそびれちゃって…」

今度は心の籠った笑みを浮かべる。

そうだ、風<sup>かさなき</sup>ならば紅の事を言っても良いだろう。きっと驚くに違いない。

私は風<sup>かさなき</sup>に初めて勝った気がしていた。

風<sup>かさなき</sup>は私の大切な友人であると共に、私の持って居ないもの全てを持つている憎むべき存在でもあった。

私は風<sup>かさなき</sup>と共に居る事で多くの辛酸を舐めてきた。

人を惹き付ける屈託のなさ、太陽の様に温かく力に満ち溢れた輝く瞳。男でも女でも、風<sup>かさなき</sup>を悪く言う奴など一人も居ない。

書も歌も楽器の演奏も馬術も…どれを取っても人より全て抜きん出ている。なのに、彼を妬むものは居なかった。

…私を除いては。

私は彼の素晴らしさを目の当たりにする度に、己の不甲斐なさを突きつけられて居るようで嫌だった。

容姿ですら私は風凧に敵わない。

遅しく肉厚な胸板、背が高い上に、精悍という表現が最も似合う整った顔立ち。どんなに背伸びしても追いつけない。きっと私は風凧の隣に並ぶ事すら赦されない。

私など、家柄を除けば取るに足らない塵の様な存在だ。

なのに、何故か風凧は私を友と呼んだ。また、私にとっても風凧は、家ではなく私個人を認めてくれる唯一の友である事には変わりなかった。

だからこそ、私は風凧より何か一つでも、優越感を持てるモノが欲しかった。

一言、風凧の口から羨ましいと言われたかった。

そうすれば、どんなに負けていたとしても、救われる様な気がしていた。

…しかし、結局どんなに足掻いた所で、所詮私は風凧に勝つ事は出来なかったのだ。

何処までも人に真つ直ぐで優しい風凧、反対に己を曝け出せず劣等感の塊である私。

所詮、初めから勝てる筈などなかったのだ。

だから、風凧が私の紅を変えてしまった。

どんなに私が紅を愛し、求め、尽くしても、一度たりとも紅は心を見せた事がなかった。私が紅を求めれば、紅はそれに応じる。しかし、紅が私を求める事は一度もなく、微笑みさえも向けてはくれなかった。

なのに、風凧に対する態度は明らかに違った。

頬を染め、俯く顔。

風凧が紅に何かしたとは思えない。風凧はそんな男ではない。

けれども、風凧にただ会っただけで紅は変わってしまった。

その現場に足を踏み入れた私は、ガラガラと足元が崩れ、深く暗い奈落の底に落ちていく様な感覚に陥った。

ど…う…し…て…？

私には何も手に入れられないと言っのか？

私にはその資格がないと言っのか？

ならば、何故、私にそんな甘美な夢を味あわせた？

夢の後に来る絶望は、心にあつてはならない感情を生み出す。もう抑えられなかった。今まで押し殺してきた感情が、全て爆発した。あんなに愛しかった紅が、一瞬にして薄汚れた穢らわしいモノに変わった。

赦せない。

何故、私ではなく風凧を見る？何故、私を見てください？何故、私を求めてくれない？愛してくれない？

私はこんなにも紅を想い、見詰め、愛し、求めているのに。

私は紅を手を掛けた。

…もう要らない。

こんなに穢れたモノなど、もう要らない。

あんなに愛した美しかった顔も、体も、滅茶苦茶に切り刻んでやった。

紅が悪いんだ。

悪いのは私じゃない。

要らなくなったモノを私はそれに相応しい場所に運んで捨てた。

そして翌日、仕事に行く前に風凧が私の部屋を訪れた。

紅に約束していた椿を一枝手にして。

しかし、風凧は紅に会うことは出来なかった。

当然だ。

私が昨日のうちに壊して捨てたのだから。

風凧は私の部屋の惨状と、私の様子から何が起きたのか悟ったのだろう。私に何か言おうと口を開きかけたがそのまま嘸み、踵を返した。

「ふ…ふふ…あはは…あはははは！！ひひっ…ひゃははは！」

笑いが止まらなかった。

そして、涙も。

私の心はこの時に死んだのかもしれない。

紅をなくし、唯一の友をなくし、心もなくした。

もう、私には何も残っていない。

あるのは底知れない心の闇。

失ったものの大きさは、計り知れなかった。

私はなんと愚かな事をしてしまったのか。もう取り返しがつかない、もう、取り返せない。

紅、紅、紅…。

私の愛しい紅。

私の元に残ったのは大きな虚無と孤独。

開け放たれた窓から見える夜明けの光さえ、もう私の心には届かない。

私は永遠にこの罪の闇を彷徨うのだろう。

## 第十幕：慟哭

「僕、分かったんだよ。アイツに触られた時、僕が過去に何をしたのか…。全ての元凶は僕だったんだ」

幸人くんはゆっくり私の腕を放した。目を伏せ、覚悟を決めたように言葉を続ける。

「だから、京さんは僕を殺す権利がある。アイツに引き渡したって構わないよ。京さんの、好きにしていよいよ…」

弱々しく幸人くんは私に微笑みかけた。

ギリリツと体が軋む。

ソウダ、コイツダ。

頭の中で声が響く。

憎イ…苦シイ…赦サナイ…赦セナイ…。

体はそれに呼応して急速に変化していく。

「う…あ…う、うわあああ！！いや…いやだあああ！！！」

赤い閃光が私の目を塞ぎ、強制的にあの忌まわしい光景を見せ付ける。首を容赦なく締め上げる男の指、憎しみで煮え立つ熱く鋭い視線。

「ぐっ…はっ…あ、あ、ああ！」

首が痛い、息が出来ない、苦しい、苦しい、苦しい！無意識に喉を掻き切る。焼け付いた針が体中を駆け巡る様な痛み、涙が頬を伝う。

「や、だ…」

ドクン。

胸を突き破って、今にも心臓が飛び出しそう。

ドクン。

「かはっ…」

膝が崩れ、両腕を地面に付く。

汗なのか涙なのか…頬を伝い床に丸い後を残す。

「京さ…」

戸惑いながら幸人くんが私へ手を伸ばす気配が伝わった。  
パリン。

薄いガラスが砕け散った音が、耳の奥で大きく響く。

それは、私の中で何かが砕けた音…均衡を保っていた天秤が大きく一方へと傾いた。

鋭く伸びた私の爪が、幸人くんの胸へと空を切って向かう。

切り裂かれた風が、小さな悲鳴を上げる。床に散った水滴が舞い上がり、私と幸人くんの周りに緩やかな半円を描く低い壁が数個生み出した。

ザシュ…頬に生暖かい飛沫が振りかかる。

幸人くんがその目を無言で大きく見開く。

そして…。

「京、感情をぶつける相手を間違えてるぞ？お前の全ての感情は、喜びも、悲しみも、痛みも、苦しみも…憎しみも、全て俺が受け止めると言っただろう？」

「私は、貴方と約束したわ。京、貴方が暴走した時は…私が止めるって」

風が幸人くんの前に立ちはだかり、私の手をその胸へと導いている。そして、私の腕には芳華の放った糸が絡み付き、動きを完全に封じ込めていた。

私にかかった飛沫は、己の物。不思議と安堵の思いが心に湧いた。「京、くだらない事でお前の手を血に染めるな。コイツのつまらない自己満足に付き合う必要は、ない」

「那岐、違う！僕は…」

鬼気迫る面持ちの幸人くんは、風の肩に手を置き、自分の体をその前に出そうとする。だが、風は頑として動かない。それどころか、幸人くん顔すら向けようとしない。

頬に朱が走るほど怒りに満ちた風の顔は、子供とは思えないほど大人びている。

「何が、違うだと？まさか、お前、責任を取るとか言うんじゃないだろうな？京に殺されれば、お前が京を鬼にした責任を取れるというのか？ハッ…冗談言うな。それで京が人間に戻るのか？違うだろう？そんな事は、前が自分の罪悪感から逃れたいだけの詭弁だ！いい加減にしろ！お前は自分のつまらない格好の為に、また更に京へ苦しみを背負わせるつもりか！？もし…：…本当に償いたいなら、その気が少しでもあるんなら、自分の罪は自分で背負え。人に押し付けるな！！」

凧の言葉は他のどんな凶器よりも鋭く私と幸人くんの心に深く突き刺さった。

「それと京、お前の手を染めるのは俺だけだ。忘れるな…」

凧が私の手に優しく口付け、滲んだ血を舐め取った。

「あ…」

全身の力が抜け落ちる。腕に絡まっていた芳華の糸は、いつの間にか消えていた。

「驚いた？最近は用途によって、ワイヤーと糸を使い分けるのよ。ま、今が凧なら迷わずワイヤーを使っていたけどね」

芳華がさも面白そうにニヤリと笑った。

「安心しろ、その前に俺がお前を消してやる」

「ああら、それはどうかしら？」

睨み合う凧と芳華。何処までが本当で、何処までがふざけているのか時々分からなくなる。

でも、そうだ。

今、私が幸人くんを殺してどうなるというのだろうか？

結局、何も変わらない。

しかし赦せるかと問われれば、私はきつと首を縦にも横にも振る事は出来ないだろう。

あれはもう過去の事だ…そう割り切れる程、私は強くない。

でも…もしかしたら、凧や芳華が居てくれる今なら、憎しみを少しずつ忘れる事ならば出来るかもしれない。

「…ありがとう」

擦れて上手く声が出ない。瞼をゆっくり閉じると、涙が溢れた。そして幸人くんはその場に蹲る様に泣き崩れていた。

きつと、彼は彼で私とは違う暗い闇を歩いて来たのだろう。

… たった一人で。

それはなんと悲しく、苦しい事か。そして、未だ彼の闇は底知れず果てなく続く。

でも私はそれを知って居ながら、手を差し伸べる事をしない。

ただ、遠くで眺めるだけ。

これが私なりの復讐の仕方なのだろうか？だとするならば、こんなにも酷い仕打はない。

少しだけ、私の胸のつかえは軽くなった。

ふと、人と鬼の違いを考えてみる。

一体外見以外の何処が違うのだろうか？己の快楽を己の満足を優先する…そこに違いは存在するのだろうか？

きつと、微妙な差こそあれ違いはないのかも知れない。

だから…人は鬼になれる。

私は己の心を奮い立たせると同時に、立ち上がる。今はそんな事にかまけている暇などなかった筈だ。

どれ位の時間を消費したのか、慌てて私はムジナの姿を探す。だが既に先程までムジナの居た場所は、大量の血痕を残すのみ。

「しまっ…」

漠然とした不安は直ぐ形となって現れた。

「キ、キ、キ、残念だったな、え、チビ。キヒヒ」

切り離された筈のムジナの腕は新たに生え変わり、既に傷も癒えていた。

「キ、キ、キ、面倒臭い事してくれるじゃねえか、え？お前ら。急いだ所為で指の長さが変わっちゃまった。キヒ、責任を取って貰わなけりゃなあ？え、キヒヒヒ！」

ムジナの顔は今までの形相と変わっていた。白目である筈の部分

は黒く染まり、瞳の色が赤くなっている。

それだけではない、口は狐のように前にせり出し、ゾロリと鋭い鮫の様な牙が覗く。長く伸びた細長い舌が床へと唾液を滴らせ、今にも獲物を狙って伸びて来そうだ。

冷や汗が頬を伝う。

そして私は見落としてはならない重要な事を忘れていた。

ガクン、私の足が何者かによって掬われる。大きく後ろへ均衡を欠いた私の体は尻餅を着いた。そして、すぐさまその何者かが、スルスルと私の喉元を目掛けて襲いかって来る。

急いでそれを掴もうとするが間に合わない。

辛うじて目で追う事が出来たその正体は、先ほど切り落とされたムジナの腕。しかし既にそれは腕と云うより、独立した意識を持った妖異そのもの。

掌にバクリと真一文字に亀裂が走り、あろう事かそこから覗くのは鋭い牙と蛇の如くのたうつ長い舌。

「馬鹿な…！」

「キ、キ、キ、ヒヤハハハ！！死ネエエ！」

「させるか！！」

芳華の叫びと共にその指から無数の細いワイヤーが放たれる。反射的に風が私の首元に覆いかぶさる。

全てが一瞬の出来事だった。

バラバラ…ビチャリ。

嫌な音が耳の中に木魂する。気が付けば芳華のワイヤーがムジナの片腕を非常に細かい肉片に変えていた。

また、それとほぼ同時にぐもったうめき声が聞上がる。

「ぐ…う…」

確か、切り落とされた腕は二本。背筋に言いよつのない、氷の様な感覚が走り抜ける。

声の方を向くのが怖い。

けれど見ずには居られなかった。

「ぬうう……」

ゴフリと翁の口から血が吐き出される。

私は思わず口元を覆うと同時に青ざめた。

低く折れ曲がり、背丈が小学校の低学年程しかない翁の喉元に、もう一本の切り落とされた手が食い込んでいた。

ミチミチと更に奥深く食い込んでいく音が聞こえる。

芳華がワイヤーでその手を切り刻むが、掌部分だけがどうしても離れない。

「キ、キ、キ、じじい得意の防御はどうしたんだ？え？キヒヒ！人間の餓鬼なんぞ守って何になる？え？」

「ふえふえ……。お主、には、…分かんじやろつて、のお……」

翁は、笑っていた。

「ふんしゅー……。分らん、じやろつて……」

己の喉へ食い込む掌を、翁は掴んだ。

「のおう、京。わしゃあ、これで良い。これで、いいんじやあ。これ、ようやく……」

翁は私に向かい、穏やかな満面の笑みを浮かべる。

「そんな…翁、いやだ！駄目……！！」

「長い、長い…時間じゃったあ……」

過去を懐かしむ翁の声。それはとても穏やかで、満ち足りていて……。

「ふんしゅー……。ようやく……叶う……」

「翁ああ……！！」

私の悲鳴が部屋中に響き渡った。

## 幕間・蛙の翁ノ式

不思議なもんじゃ、こんな老いぼれでも考えるより先に体が動きおった。

しかも誰かの盾になるなど、微塵も考えておらんかったのにお。それにじゃ、ふと思ってみれば、この世に生れ落ちた時、己の存在など気にもせんかった。

ただただ、生きる、それだけで良かったからのう。

それはなんと幸せな事であつたじゃろうか。

思い出そうにも、もう既に記憶の底へ遠く霞んで、思い出すことすら出来やせん。

水の匂い、草の匂い、雨の匂い、仲間の匂い。…それら全て、わしが蛙であつた頃の大切な思い出じゃと云うのに。

「ふっ…」

ふむ、ムジナの手は思ったより力が強いようじゃ…。振りほどこうにも、どうにも出来やせん。

じゃが後悔などしてはおらん。むしろ、これで本当に良かったと思つておる。

わしの力はもう、先の水球結界で使い果たしてしもうた。ここに居つても京の足手纏いになるばかりじゃ。

初めに出会つた時は震えが走るほど恐ろしく、また儂かつた京の存在も、今では何の心配もない。

わしの役目はもう終わったのじゃろう。

いや、わしの本当の願いが叶つたというべきなのか？

長く歳を経れば、嫌が応にも諦め癖が付く。

何もかもを諦めて、生きる事さえ諦めて、何かを願う事も、探す事もなくなる。はたと気付けば、己の元には何も無い。

…けれど、それを嘆く事もなく。

己の存在すら、下手をすれば忘れてしまふ。

じゃがこれで、こんなわしでも最後にようやく、手に入れられたのかも知れん。それは長い 長い間、どこか心の奥に仕舞い込み、ずっと気付かぬふりをして来た願ひ。

わしの本当の願ひは、誰かに必要とされることじゃったのかも知れん。

手を差し伸べられて、必要じゃと言われたかった。

お前のその命が、その存在が必要じゃと。

じゃが今まで、誰もわしを必要としておらんかった。わしの存在に気付いてもくれんかった。じゃから、わしはそれに気付かぬふりをして、蛙に戻って死ぬ事がわしの願ひじゃと思っておった。

けれど可笑しなもんじゃなあ、今際いまわの際きわのようやく今になって、わしは大切な事に気付けたようじゃ。

自らが手を差し伸べねば、誰にも気付いてはもらえぬ、と云う事を。

諦め、嘆き、自らを閉じ込めてしまつては、四肢を折り曲げ隠れ暮らしているのと同じじゃ。誰にも気付いてはもらえやせん。

わしは隠れ暮らした穴蔵を後にし、ここに出てきた。

そして初めてわしは、誰かを守る為に自ら行動を起こしたのじゃ。それはとても不思議で、心の中に何ともむず痒い様なくすぐったさを感じた。

痛みや苦しみと引き換えに、体中を満たす幸福感。

誰かを守れた。

わしの存在が必要とされた。

京が泣いておるのが分かる。わしの為に、涙を流してくれておる。もう、それで十分じゃ。

わしの命は必要とされ、有効に使えた。

それだけで良い。

京と出合い、京と共に時の在る世界を見れた。

わしの差し伸べた手を京は躊躇わず、握り返してくれた。

それ以上、何を望む事がある？

最後にそれに気付けた事が、わしにとっては何よりも大きな事じゃ。もう迷いはない、未練も何もかも。

「……………満足じゃあ……………」

己の声が耳の中で大きく響き渡る。

そう、わしは満足じゃ。

意識が薄れ、もう京の顔も声も分からない。じゃが、わしの傍できつと手でも握ってくれておるじゃろう。

京よ…わしはもう大丈夫じゃ。

そしてお主はもう、わしが居らんでも大丈夫じゃ。

長かったのう…長かった。

でも、良い。これで良い。

おお…そうか。

そうじゃったのか。

ずつと考えておった、わしら妖異の存在…。もしかしたらそれは、己の存在そのものの探求なのかも知れんのお。

そうか、それならば納得が行く。

そうか、そうじゃったのか……………。

## 第十一幕：決意

翁が微かに口を動かした。

『満足じゃ』と、声がなくその動きは言っていた。

「いやだ、いやだあああ！！翁あ！翁！うわあああ！！！」  
頭が真っ白になる。

ガクリと地に膝を着いた翁の手を握った。ムジナの手を引き剥がそうと、無理だと頭では分かっているのに、翁とムジナの掌との間に指を差し込もうとした。

凧も芳華も私を止める事はしない。

翁の瞳は既に光を失い、見開いたままドロンと濁っている。

翁は言っていた。

『ふんしゅー…わしら妖異は魂が死なねば、幾らでも見てくれは繕えるもんじゃあ』

ならば、まだ、翁は生きていますか？

「翁！翁！翁！しっかりして！！いま、外すから！これ、この掌を外すから！！だから…！！」

がむしゃらに掌を引つ掻く。どこかに隙はあるはずだ、絶対、ある。それさえ見つけければ…。

翁、私たちは、死んだらどうなるのですか？

「翁！頑張つて！だって、貴方が教えてくれたじゃないですか！魂さえ死ななければ、我々妖異は幾らでも、再生できるって！！」

翁の体が色彩を失っていく。

翁、私たちは、どうなるのですか？

『ふんしゅー…それは、死なねば分からんじゃろって』

翁の声は何時も柔らかく、暖かな陽だまりの水辺を思わせる。でも今は頭の中に響くその声でも、目の前にある冷たい死の闇を温める事は出来ない。

翁、翁、翁。

私たちは、一体、何処に行くのですか？

「翁あああ！！！」

翁の顔はとても穏やかで、とても優しくて……。擦れていく翁の輪郭。

どんなに掻き抱こうとしても翁の体をすり抜け、空を掴む私の手。もう翁に触れる事も出来ない。

遂にはユラリと水蒸気が蒸発するように、翁の体は、消えた。

「……………っ……………あ…ああああー！！！」

響き渡る私の悲鳴。

頭の毛がザワリと逆立つ。

「キ、キ、キ、ヒヤハハハハ！！あの老いばれ、あつさり消えやがった！！ヒヤハハハ！ツマンネエ、つまらねえぜ、ヒャーハハハハ！！！」

ムジナの高笑いが、私の神経を逆撫でる。

「……………黙れ……！」

「キ、キ、キ、なんだあチビ。お前、一丁前に怒ってんのか？え？」

ムジナの声が、態度が、かつてない程の怒りへと私を追い込む。

「黙れ！黙れえええ！！！」

今の私には怒り以外、何も見えなかった。

「京！止める！！！」

翁が、ムジナに、殺された。

荒れ狂う炎の様な激しいその怒りは私の身を焦がす。私はこの時、初めて心の底から妖異である事を望んで受け入れた。

「京……！！！」

全身に力が漲っていく。

今まで、心の何処かで否定してきた妖異である自分。そして心の片隅で思い続けた人間である自分。

私はそれにしがみ付き、なんと愚かな行為を繰り返してきた事か。ムジナを生かして置く訳には行かないのだ。私は過去に犯した過ちを、あの時にムジナを殺さなかった自分の罪を己の手で拭わなけ

ればならない。

「ムジナ…お前だけは、お前だけは！！絶対に！どんな事しても、私がこの世から必ず消し去ってやる！！」

「キ、キ、キ、ヒヤハハ！生意気にイキがってんじゃねえぞ？え、チビが！」

私は自分の手の中にあるムジナの掌をグシャリと握りつぶした。ムジナは厭らしい口元を更に歪めて笑う。

「キ、キ、キ、今更お前が俺に勝とうなんざ、え？笑っちまうぜえ！ヒヤハハハ！俺はなあ、強えんだよ！チビ、お前なんか、足元にも及ばないほどな！！ヒャーハハハ！」

そう、確かに私では勝てないかもしれない。でもねムジナ、私は初めから無傷でいようなんて思っていない。

お前は私を知らなさ過ぎる。

「せいぜい、今のうちに笑えばいいさ。もう一度だけ言う、私はお前だけはどんな事しても、必ず消し去ってやる。それだけだ」

「キ、キ、キ、楽しみにしてるぜ、え、チビ。少しは俺を楽しませるんだな。キヒヒヒ！」

私はムジナ言葉を鼻を鳴らして一蹴する。そんな私の態度に不安を感じたのか、凧が私の肩を揺すった。

「京！止める！アイツは俺が何とかするから！！落ち着け！頼む、落ち着いてくれ！！」

普段の凧らしくない、今にも泣きそうな顔。何時もは強い意志の力で輝きに満ちているその瞳が、今は不安な色を隠せない。

ごめんね、凧。

やっと逢えたのに、ずっと一緒に居たかったのに…。私は初めて凧を裏切ろうとしている。約束を破ろうとしている。

ごめんね、凧。

翁を守れなかった分、全力で私は凧を守りたい。芳華を守りたい。今までずっと、私の支えであった何よりも大切な凧との約束。

でも…それを破ってでも、私は凧と芳華を守りたい。

二人を守れるならば、例え神の矢に貫かれ未来永劫、地獄の業火に焼かれようとも構いはしない。

「…ハアア」

吐き出す息が、懐かしい重たさと臭いに包まれる。牙が伸び、爪が伸び、身体中の筋肉が見る見る内に質量を増していく。骨格自体が変化する。

「京…！！」

凧の悲痛な叫びが、耳の奥で木魂する。胸がズキリと痛んだ。それでも、私は今度こそ逃げ出す訳には行かない。

私は意識を己の内側へ集中する。また元の姿に戻る日が来るとは…しかも、今は自分でも一度も見た事のない、本来の姿になるうとしている。

強い力は甘い果実。

一度味わえばその甘美な甘さに酔い、我を忘れる。だが…残念な事にもう私は力のみで酔う事はない。

力の甘さより、遥かに心を酔わせる存在を知ってしまったから。

その声は、姿は、力の存在を忘れさせて私の心を蕩かす。だから、今は敢えて目を瞑り耳を塞ごう。

リン…。

鈴の音が鳴る。

リン、リン、リン…。

手足に鈴の付いた輪が現れる。身に纏うのは裾長く、胸に一つの大きな椿の花が咲く漆黒の着物。

「…っはあ」

頭には髪を掻き分けて角が二本、姿を現す。そして、今までずっと隠してきた体の傷跡が生々しく盛り上がり、桃色の蛇となって体中に走り回った。

全身に溢れんばかりに満ちる妖力。

それと同時に私の奥底に眠っていた狂気も目覚める。

身体が変化するにつれ、意外にも頭はハッキリと落ち着きを取り

戻りつつあった。

昔の力を得ながら、まだ人として生きてきた記憶と心を持っている。

だが、残念な事にその心は一部を除いて凍り付き、感じられるのは極一部のみ。

でも今はそれで構わない。芳華を忘れず、大切な風の事が想ってられる心が残っているなら、それで十分だ。

甦る力と狂気と共に…何故か一瞬チラリと脳裏を過ぎった遠い過去の記憶。

風に似た強い光を宿す瞳をしていたあの人。あの人は一体誰だったのだろうか？

私に椿の花をくれると云ったあの人。何処か少し懐かしい匂いがしていたあの人。

思えば私は風に初めて逢ったとき、もしかしたらその人を風の中に無意識に見たのかも知れない。

## 幕間・風凧

俺の心に奥深く突き刺さっている、棘。

とても鋭く、長く……何処までも深く深く突き刺さる、罪悪感と云う、棘。

俺はあの時以来、まともに眠れた試しが一度たりともない。毎夜、床に入っては同じ夢にうなされる。

肌が痛む程に風を切る馬蹄ばていの音、男たちの怒声、赤々と燃え上がる炎。俺は泣きながら……振り落とされぬよう、泣きながら必死に馬にしがみ付く。

何処まで行くのか何処を走っているのか、暗闇をひた走る馬の背に、俺はただ必死にしがみ付く。

やがて、草原に振り落とされ……目が覚める。

実際はどうだったのか記憶はない。

覚えているのは、あの日、俺が何故馬に乗っていたのかと云う他愛のない事。そう……俺はあの日、牛車に乗るはずだったのを我が儘を言つて覚え立ての馬の背に乗った。

本来なら、しないこと。

でも、俺はどうしても馬に乗りたかった。

俺に馬を覚えてくれた教育係の男も一緒だった。だから、尚更に俺は馬に乗りたかった。

上達した、そう言われたかった。薄闇の中でも、馬に上手に乗れると褒められたかった。

純粹にそう願ひ、心を躍らせた。だがその時には、それが後の運命を変える事になるなど思いもよらなかつた。

闇の中から湧き上がる怒声を合図に、俺の居た行列は襲われた。

母上と“きょうだい”の乗った牛車が瞬く間に囲い込まれる。

教育係の男は、俺の馬の尻を強したたかに打ちつけ走らせた。俺は何かを叫んだ。男も叫んだ。

『お逃げ下さい、若様!!』  
それが、最後。

後日、母上たちが襲われた地点よりも、だいぶ離れた場所で俺は発見されたらしい。父上は俺を抱き締め『良かった…良かった…』とやつれ切った顔で咽び泣いた。

『お前だけでも無事で、良かった…』

俺だけ？

俺だけって、どう云うこと？

母上と“きょうだい”は？

……助かったのは、馬に乗っていた、俺だけ。

母上の牛車の周りに居た者は皆殺された。俺の教育係だった男も、牛車に刀で突き刺され、立ったまま絶命していたとの事だった。

そして、母上も……。

だが、一人だけ俺以外にも行方不明者が居た。俺のたった一人の歳が離れた幼い“きょうだい”、久遠くおん。

俺は久遠以外の幼子を見た事がない。だから、周りの大人が美しいと云うのだから、そうなのだろうと思っていた。

透き通ったキラキラと輝く瞳、柔らかく小さな手。まだ言葉が上手く喋れず、俺のことを『にいあ』と読んでいた。

『にいあ、にいあ、どうじよ』

そう言って、俺に何も持っていない手を差し出した。本人としては、何かをくれているつもりだったのだろう。

『にいあ、どうじよ』

幼い“きょうだい”の目を細めなくなる眩しい笑顔。

何で、久遠が…。

どうして、俺だけ？

もし、俺が馬ではなく、牛車に乗っていたら？久遠と母上と一緒に居たなら？

せめて久遠だけでも助けられたの？

もしも、俺が久遠の傍に居たのなら……？

もしも、俺が、強かったら、助けられたの？  
もしも、俺が、賢かったら、助けられたの？  
もしも、俺が……。

極度の緊張を味わった後に、更なる極度の罪悪感を味わった。そんな俺の胃は、何も食べていないにも関わらず、腹の中の物を全て吐き出した。

止まらない吐き気。

自分だけ助かった、その消えない罪悪感。それは次第に俺の心を蝕み、どんどんと深く澱となって堆積する。

……やがて幾つもの季節が過ぎ、久遠の消息は掴めないまま、瞬く間に時は流れて行った。その中で父上は俺に家督を継がせた後、とてもあっけなくこの世を去り、この浮き世に一人残された俺は、最小限の使用人と共にひっそりと、家と云う残された物を守って生きていた。

せめて、俺にとって一縷の望みである久遠の消息だけでも掴み取った。生きているのか、死んでいるのか、それだけでも知りたかった。

いや、……………違う。

そんな奇麗事じゃない。

俺は単に、自分が楽になりたいだけだ。

俺はなんと浅ましいのだろう。

せめて久遠が生きて、幸せになっていてくれたら、俺の罪悪感が少しは楽になるのではないかと思っただけだ。

人の幸せの為ではない。俺は、自身の苦しみから逃れる為だけにそう願っている。

けれど、何も知らない他人は、こんな俺の事を理想的な公達だと云う。

皆、俺の本当の心を知っても、同じ事を言えるだろうか？

皆、俺の醜さを知っても、同じ称賛の言葉をいえるだろうか？

顔で笑いながら、人を氣遣う振りをしながら、実はその相手の腹

を探つて居るのだと知つても？

あの日以来、俺は父上にも誰にも…人に悟られないように、だが必死に仇を探していた。俺の家族を奪つた者たちを俺と同じ様に滅茶苦茶にしてやりたかった。

息子の俺が言うのも何だが、父上は大変なお人好しだった。だから、あんな事が起こつても誰も疑わなかった。単に通りすがりの盗賊に襲われたと思つていた。そう信じ切つていた。

だが、俺は違う。

俺は誰も信じない。

全てを疑い、篩ふるいに掛け、信じるに値するモノだけを選び出す。

俺が知りたいのは真実だ。俺の家族を奪つた奴らの姿だ。

俺は知りたいことを、求めるモノを手に入れる為なら、手段を選ばない。

例えばどんなに自身が傷付いたとしても、他人ひとを傷つけたとしても、構わない。地を這いつくばって草の根を分けてでも俺は必ず見つけ出す。

だから俺は身分を偽り、野党や山賊たちと接触を持ち、必要とあらば手を汚した。

貴族と犯罪者との二足の草鞋を器用に履き続ける。屋敷の者たちですら、俺がどこぞの姫へ通つていと思つていないに違いない。

そしてついに、息を潜め、探り続けた俺の一念が実を結ぶ時が来た。

俺は何時もの様に薄汚れた衣装に身を包み、がさつで粗野な男たちの中に紛れ込む。すると、今まで一度も目にした事のない顔が二つ紛れていた。

俺は近くの男に話し掛け、男たちの情報を仕入れる。

『ん？ああ、あいつらか。何でも、数年前にどこぞの貴族から儲け話を持ちかけられてよお、餓鬼を攫つてたとか何とかいつてたなあ。相当ヤバイ仕事だったらしくて、今まで身を隠してたって噂だぜ？』  
とうとう、見つけた。

俺は早速、男たちを上手く誘い出してたつぷりの酒を振舞った。男たちの口がどんどん軽くなる。男らは散々言いたい事を勝手に喋り散らして、酔いつぶれた。俺は、怒りを腹に溜め込みながら、その瞬間を待っていた。二人をそれぞれ動けない様に縛り上げると、眠っている男たちへと水をぶちまける。

男たちは突然の出来事に狼狽していたが、俺が刀をちらつかせると、俺の知りたい情報をペラペラと喋り出した。そして、最後に男たちは口々に命乞いの言葉を並べ立てる。

「その時の子供：久遠が今、どうしているのか喋ったら、助けてやるよ」

だが、そんな言葉は嘘。

男たちは色々な場所を上げて言ったが、どれもこれも嘘だと分かるものばかり。

「……もういい」

俺はわざと急所を外した。じっくりと死の恐怖に晒されるがいい。そして、男たちが驚くほどあっさり喋った黒幕……それは以前、父上と懇意にしていた男。俺が友と呼んでいる男の父親。

押しも押されぬ大貴族。

俺は初めて神に感謝をした。その男を失脚させる為ならば、幾らでも協力者は見つかる。一族郎党全てに生き地獄を味あわせる事が出来る。

俺は久しぶりに心の底から笑う事が出来た。もう直ぐ、もう直ぐ仇が討てる。久遠の行方を知ることが出来る。

そういえば、今夜はその男の息子に呼ばれていた。宴の笛の吹き手として、俺を呼んだのだ。

いずれ何かの役に立つだろうと、今までずっと、仲良しゴッコをして来て正解だった。

幸人、お前が悪いわけではない。怨むなら、お前の父上を怨むがいい。

俺は何時もの様に通常業務をこなし、一旦、屋敷に帰り着替えて

再び出発した。

だが、俺を呼びつけた本人である幸人は直ぐに出てこなかった。使用人に聞いた幸人の離れへ、何気なく足を向ける。

声を掛けるが応答はない。入れ違いか？

そんな事を思いながら、もう来た道へ足を向け様とした時、目の端に人影が映った。

「…ん？気のせいか…？」

もう一度よくよく覗き込んでみる。やはり、何かが動いた。

「人か？誰か、居るのか？」

気配はある。だが、返事はない。

「おい？」

俺はひょいと部屋に上がり込んだ。幸人の事だ、これくらいは大目に見るに違いない。

「人形…？いや、お前、人間か？」

俺は何気なくその人物の顔を見た。その次の瞬間、凍りつく。

これでは…：まるで…：母上に生き写しではないか。

俺は思わずその頬に手を滑らせた。

「…こんなに冷たくなって。それとも、天女は体温が低いのか？」

俺は一体何を言っている？

けれど、世の中に似ている人物が居たって可笑しくはない筈だ。

それにむしろ母上よりも久遠…：久遠が成長したら、こんな感じではないだろうか？俺の心臓は期待と混乱で張り裂けんばかりに鼓動している。

まさか、もしかしたら…：……。

「名前は？ないのか？」

俺の期待していた名は、その人物の口から出る事はなかった。何かを必死に伝えようと眼差しは言っているのに、その喉はひゅっと音を鳴らしたただけだった。

「…しゃべれないのか？」

激しい落胆と共に、勝手に期待をした自分に腹が立った。そうだ、

こんな筈はない。久遠が、こんな所で、こんな売女のような扱いを受ける筈がない。

「悪かった。気が付かなくて、すまない」

俺は少しの罪悪感と、久遠に面差しが似ている人物を重ね合わせ、思わず頭を撫でていた。すると相手は驚いたのか、一瞬ビクリと身体を震わせた。だが、どうした事が直ぐに弾かれた様に俺へと縋り付き涙を流し始める。

正直、俺はうろたえた。どうして良いのか分からなかった。けれど、こみ上げる懐かしさと久遠に対する愛おしさがどうしても重なり、その人物をそつと抱き締めた。

「困ったな…泣かれると、どうして良いか分からなくなる」

「風凧！居るのか？風凧？」

この離れへと続く廊下を走る幸人の足音が聞こえた。途端に、腕の中の身体は怯えて逃げ出そうと身を擦る。

キラキラ輝く大きな瞳をせわしなく瞬き、可哀相になる程に震える細い身体。俺は益々それが久遠に重なり、どうしても離したくなかった。

「もう少し…このままじゃ駄目か？すまない…何て言って良いのか言葉が見つからない。ただ、もう少しこうして居てくれ」

「もしも、この人物が本当に久遠だったならば……。」

「ずっと渴望していた何かが、俺に囁き掛ける。」

「風凧…？」

ひよいと、幸人が入り口から顔を覗かせる。俺はその機会を逃さず、自然に身体を離れた。何時もより心の籠った笑顔で幸人を出迎える。

だが、それは友人としてではない。

この関係を断ち切る、決別の証し。

幸人からこの子を奪う。久遠に似た者をここに置いておくわけにはいかない。例えそれが単なる自己満足だとしても、だ。

「明日にでも、俺が庭に咲いている椿でも持ってきてやろう」

理由などどうでも良い事。再び、この子に会う為の口実になればいい。

その時には、俺はこの子の手を引き、この忌々しい屋敷から姿を消す。生きる術なら既に身に着けた。貴族の身分になど未練はない。何処か遠くに行こう。

復讐の種は既に蒔いてある。放って置いてもそれはやがて芽吹き、全てを蔽い隠し飲み込むだろう。

ならば、俺はそれをこの子と共に見届けるまでの事。

例え俺のこの行為が畜生にも劣る行為だとしても、それが一体なんだと言うのだ？

今度こそ、守るのだ。

永久に――。

## 第十二幕：殉難

強い、強い、意思の力。

私にはない、光。

交わる事のない、光と闇。

背中合わせの存在。

強く惹かれるのは、その所為なのだろうか？

初めてあの人に会った時に感じた、震える程の怖さ。初めて凧に逢った時に感じた、本能的な恐れ。

そう……それは、今までの自分を失う怖さ。未知の感情に対する恐れ。

『私はきつと、壊される』

変わる事が怖かった。受け入れる事が、恐ろしかった。

けれど、私は変わる事を求めた。受け入れる喜びを知った。

だから、今度も私は今の私を受け入れよう。

鬼である……これも私なのだから……。

「京……」

凧の瞳が悲しみに染まっている。僅かに残った私の心がチクリと痛む。

「凧、ごめん。……私は……」

目を瞑り、大きく深呼吸をする。揺らがない、揺らいだら駄目だ。私も凧の様に強くならなくては。

「……私は、鬼だ」

口の中に、言い様のない苦さが広がる。

「これで、もう二度と戻れない。私は、鬼なんだよ、凧」

目頭に違和感がこみ上がる。不思議に思い、触れてみると、それは凍りついたと思った涙だった。

「違う……！止める、止める、京！止めてくれ……！お前の口からそんな言葉、聴きたくない……！」

耳を塞ぎ、凧は苦しげに眉を顰める。しかし、私はそつと凧のその手を取り、ゆっくりと耳から離す。

「凧、これが現実なんだよ。私たちの長い夢はもう終わり。夢は何時か終わるんだよ……」

「嫌だ！嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ！！」

「凧……」

「嫌だ！！俺はそんな事、認めない！京は京だ！！鬼じゃない！！お前は鬼じゃない……！！」

「……………」

言葉が見つからない。

どうしたら、いい？

私はギリツと唇を噛み締めた。出来ればこんな事はしたくない。でも、しなければ凧は私の為にムジナの前へ飛び出してしまう。

「凧……」

まだ凧は子供だ。どんなに潜在的な能力があろうとも、その器はまだまだ未完成。今、無理な力を掛ければ直ぐにでも粉々に砕け散ってしまう。

私は凧の幼く、丸みの残った頬へ指を滑らせる。あと数年もすれば、男らしく精悍な顔立ちになるだろう。

しかしその時、凧の隣に居るのは……私では、ない。

「凧、凧、大好きだよ、凧……」

「きよ……」

私は凧の唇に自分の唇を重ね、少しだけ……ほんの少し、凧が動けなくなる位の精気を吸った。

ガクリと凧の身体から力が抜ける。

「なに……を……？きよ……う……」

信じられないと云った面持ちで、凧は私を見つめる。私は無言で微笑む。

「芳華、凧をお願い」

「分かったわ。……でも……」

本当に、良いの？芳華の目がそう言っていた。  
良いのかった？

そんな事、良いも悪いもある訳がない。

私はゆっくりと首を縦に振る。芳華はそれ以上、何も言わなかった。

これで、良い。

「キ、キ、キ、よくもまあ…飽きもせずに、キヒヒ。どうせ、お前らはみいんな俺が喰らうんだよ！待ってやったんだ、せいぜい、俺を楽しませるんだな！え、チビ。キヒヒヒ！」

ゾロリと鋭く並んだ歯の隙間から、蛇を思わせるムジナの舌がベロリと自身の口を舐め上げた。

「キヒヒ！！まずは足をもぐか？え、チビ？それとも腕がいいか？キヒヒ…ヒャーハツハツハ！！」

ムジナはさも楽しげに身体を半分に折って笑い転げる。

その姿を見ながら、私は内心ほくそ笑んだ。

私は知っている。

ムジナは私の顔に決して傷を付けない事を。

私の首から上だけは、決して奴は傷を付けない。何故なら、奴が最も欲しがっているのは私の顔だからだ。

だが、逆にそれは私にとって好都合。

最悪でも首から上さえ残っていれば、私の計画は必ず成功する。

「さあ…サツサと始めましょうか、ムジナ。あんまり遊んでいると、思わぬ相手に噛み付かれますよ？」

「キ、キ、キ、随分と余裕だな、え？チビ。キヒヒ、それともジジイが死んだ悲しみって奴で、頭がイカレたか？え、チビ。キヒヒヒ！！」

「さあ？…そう思うのなら、試してみればいいでしょう？」

ムジナと話をしながら、少しずつ間合いを詰める。ムジナは卑怯者ではあるが、馬鹿ではない。

過去に一度、ムジナは私に足元を掬われている。だとするならば、

奴がそれを忘れる筈がない。

私の能力は相手の視覚、もしくは平行の感覚を狂わす事。相手によってその効果はまちまちだ。以前の経験からすると、ムジナは平行感覚を失うらしい。

だが、私のこの力はある一定の距離まで近付かなければ効果を発揮しない。

そう、今の私とムジナの距離では使う事が出来ない。ムジナはそれを知っている。

「キ、キ、キ、どうした？え、チビ。早くしろよ、え？キヒヒ。なんなら、俺が先にお前を細かく刻んでやろうか、え？チビ。キヒヒ！」

どちらかが一歩進めば、どちらかが下がる。

ムジナはわざとまだ私に攻撃を仕掛けて来ない。圧倒的な自信がそうさせているのだろう。コイツにはいつでも勝てる、だから、どう苦しめようか？そんな言葉が聞こえてくる。

ジリジリと肌が疼く緊張感。

距離を縮めるには一気に懐に潜り込むのが一番だろう。だが、それではムジナの胃袋へ自ら飛び込むのと同じ事だ。

さて、どうする？

周囲に視線を彷徨わせる。ココは言わば芳華の縄張りだ。ならば……もしかしたら？

ふ、と視線をムジナに気付かれない様に芳華の顔へと向ける。

芳華は口元を微かに三日月形へ歪めた。

間違いない。

私は確信を得た。芳華はここに何かの仕掛けをしている。恐らく、このままムジナを後ろに下からせれば、何かが発動する。

「キ、キ、キ、どうした、え？チビ。キヒヒヒ」

あと…一、二、三。

ぴいん。

微かに響くワイヤーの切れる音。

「……………キ？」

事態を把握できないムジナは、電気が走る様に身体を一瞬硬直させた後、そのままガクリと膝を付いた。すると、そのムジナ目掛けて斜め上方より、呪の籠った芳華特製の針が無数に降り注ぐ。

「……………キ…ギイヤアアア！！！」

ムジナは顔を両手で押さえ、引き攣った咆哮を上げた。針の刺さった所からムジナの表面がズルズルと溶け出していく。

「グオオオオ……………！！！」

苦しみ、のた打ち回るムジナへ、銀の光を放つ芳華のワイヤーが私の頬を掠める様に放たれた。そのまま一息にムジナの身体を絡め取るとギリギリと容赦なく食い込んでいく。

私はその間、素早くムジナの傍へと滑り込む。感覚を狂わせても目が見えればそれだけまだ危険だ。もがき、ワイヤーを掻き穿るムジナの目を私は容赦なく潰した。

ゴポリ、潰されたそこから黒い液体が溢れ出す。液はそのまま私の手を伝い、腕を汚した。

「やだ、何、あれ……………！！！」

芳華の驚きに満ちた呟きが私の耳に届いた。私はゆっくりと芳華の視線の先を追う。すると、ワイヤーに絡め取られていた筈のムジナの身体は、ゆっくりと黒い液体となつて流れ出していた。

食い込むワイヤーの隙間から己の表面を残し……………まるで蛹おなまが孵化する如く元の姿で現れる。

そして私の腕に絡み付いた液体は、ゆっくりとムジナの腕へと変化していく。

「キ、キ、キ、残念だったなあ、え、チビ。言っただろう？俺は強ええんだよ。キヒヒ！」

「う……………ぐ、あああ！！！」

立場が一気に逆転した。ムジナの腕は私の腕をそのまま捻り上げ、肘を逆関節の方向へ持ち上げる。ぴんと肘が伸び、己の体重でミシリと悲鳴を上げる。

「キ、キ、キ、このまま、折ってやろうか？え、チビ。それとも……」  
ヒュウン。

私の左肩の付け根を風が唸り上げて通り過ぎた。身体が平行を欠き、右へ一気に傾く。

一瞬、遅れて訪れる激痛。

「あ……ああああ……！！！」

左腕が肩ごとそっくりとムジナに持っていかれた。切り落とされた私の腕は、そのままムジナの腕と同化して吸収されていく。

「ハツ……ハア……！！！」

私は左肩の止血を急いだ。すると、今度は右肩の付け根を風が通り過ぎる。

「……！！！」

今度は悲鳴を上げる間もなく、持ち上げられていた私の身体は、急に支えを失った所為で左へ転がる様に音を立ててドサリと床へと落ちた。

「あ、ぐっ……！！！」

「キ、キ、キ、情けねえな、え、チビ？さっきまでの威勢は何処に行っただ、え？キヒヒヒ！」

ムジナの足が私の右肩口を抑える様に踏み付け、身体を折り曲げて大きく傾げた顔を近づける。

「キ、キ、キ、所詮、お前が俺に勝とうなんざ、え？無理な話なんだよ、え、チビ……！！ヒャーハハハ！」

部屋に大きくムジナの勝ち誇った高笑いが響き渡った。

### 第十三幕：終劇

ひゅん。

空間を切り裂き、芳華のワイヤーが唸りを上げてムジナの首に巻きつく。

「京から離れなさい！！流石のアンタでも、首を落とされたら……どうかしらね？」

力を込めてワイヤーを引く芳華に対し、ニタリとムジナの口元が厭らしく歪む。

「キ、キ、キ、オンナ、お前は後回しだ。ヒヤハハ！残念だったな、俺は好物を後に取って置くタイプなんだよ、え？キヒ！」

フワリと音もなく、無数の空気の刃物が芳華のワイヤーを切り落とし、スルリと器用に方向を変えて芳華たちへと襲い掛かった。

「きゃー！！」

力を込めてワイヤーを握っていた芳華はバランスを崩し、尻へ覆いかぶさるように倒れ込んだ。今、攻撃を受ければひとたまりもない事は誰の目にも明らかだ。

「やめろおおお！！！！」

私は声を限りに叫ぶ。

「ヒャーハハハハ！！」

ムジナの高笑いが響き、続いて衣類や肌が切り裂かれる音が響いた。

飛び散る水音が生々しく、撫で上げる様に背筋を凍らせる。

「くっ……あ……」

低い呻き声。

「幸人くん！！バカ！アナタ、一体……！！」

芳華の悲鳴が聞こえた。

「ぼ、僕だって、役に……くっ……！！」

幸人くんが尻と芳華、二人を両腕に掻き抱き、己の身を盾として

ムジナの風の刃物・空刃くつばより守っていた。その背中は鋭い刃物で切り刻まれ、赤く染まっている。

「役につて…バカよ！！こんな…！！」

「うるさい！僕にだって、これくらいは、出来る！！出来るんだよ！！僕には那岐や仙道さんの様には何も出来ない、でも！！」

これくらいは、出来るんだ。

そう言いながらも、幸人くんの背中は私の目から見ても明らかに震えていた。

彼にとっては精一杯の行動。自分の身を犠牲にしてでしか、何かを守る事が出来ない。

それはとても悲しい事。

けれど、それも強さだ。

「幸人…くん…！！」

「京さん、ソイツを貴方は倒せるんでしょう？なら、あの、消えたあの人も…！！」

僕はまだ、二人を守れるから、早く。

言葉にならない心の声。それでも、私にはしっかりと伝わった。

私は呼吸を整え、すべき事を迅速に処理する。

今までやった事がないので、出来るか自信はなかった。だが、試す価値はある。

両腕を同時に修復しながら、ムジナの足下で腹を上にするよう態勢を変え、足で回転する勢いを付けるとムジナの腹へ左足を絡めて引き倒す。

しかし腕がない為、ムジナの体勢を少し崩すのみだが、私はそのままムジナの足元より転がり出ると、素早く身体を起こした。

この距離ならば、私の領域だ。ムジナの平衡感覚を崩す為、私はありったけの力を振り絞ってムジナへ投げつける。

「キヒ？」

すると、フラリと傾いたムジナの左目付近に、突然漆黒の点が現れた。

ぎゅるん。

ムジナの顔が不自然に歪み、点に収束していく。

まさか、これは……!!!

「凧！駄目、止めて！！凧が壊れちゃう！！」

「…俺は…死なねえよ……。こんな奴、直ぐに……」

「キ、キ、キ、キヒヒヒ！！生意気な餓鬼だな、え？お前、一体何モンだ？え？」

吸い込まれるムジナの姿。

しかしその足元は既に黒い液体となつて形を失い、ついには蜥蜴とかげの尻尾切りの様に首だけを残し、床へと逃れ出る。

ズズズ…そんな形容が似合う黒い液体の移動。

そこにムジナの顔が半分だけ色の付いた状態で浮かんでいる。

「キ、キ、キ、失った部分の材料、え、餓鬼。お前から補充するとするか、え、どうだ？キヒヒ！」

ムジナの黒い液体は細長く糸のように伸び、一息に距離を伸ばすと凧の首へと巻き付いた。

「あぐっ…!!!」

「凧！！」

「キ、キ、キ、でも、こんなにちいせえと、え？足りねえか？キヒヒ！！」

「凧い！！」

私は素早く凧の傍へ駆け戻り、伸びたムジナの黒い液体を切り落とす。しかし、翁の掌の件もある。私は躊躇わず、その液体を己の体に吸収した。

身体の中に取り込んだそれは、這いずり回るナメクジのような感触で酷く気持ちが悪い。

「凧…何で、こんな無茶を！！」

「ふん……。守られんのは性に合わねえ……。それに、俺は…京を守る為だけに居るんだ」

先ほどの不安げな色をは失われ、何時もどおりの真っ直ぐで強い

瞳で私を見上げる。有無を言わさぬ激しい思い。

私は改めて風の強さを目の当たりにした。

風は、ずるい。

私より遥かに強く、どんな時でも激しく私を惹き付けて止まない。どんなに固く心を決めたとしても、風の想いの前では太陽に照らされた雪の様に溶け出してしまふ。

私は慌てて風から目を逸らした。

駄目だ、今はムジナを片付ける事だけに集中しなくては。一度、強く瞼を閉じると、再び視線をムジナに戻す。

ザワザワと部屋の空気が振動を始めた。

「キ、キ、キ、チビ、ナメた真似してくれるじゃねえか、え？キヒ！」

ムジナはいつの間にか元の姿に戻り、涼しげな顔で私たちから少し離れた所に立っている。

肌を撫でる空気の小波。

ムジナはこれを利用して私たちの行動を制御する気なのだろう。

確かに、この中では芳華のワイヤーは勿論、風の術も正確さを失う。遠距離からの攻撃は無理だ。けれど、ムジナは一つ大事な事を見落としている。

ムジナにはまだ、私の力が効いている。

ならば、方法はただ一つ。

私は一息に油断しているムジナの胸元深くに潜り込んだ。

「ギ……！？」

そして、修復した両腕でムジナを押さえ込むと、そのままムジナの首元に喰らい付いた。

腹は減っていない。

しかし、液状になるムジナを形の有る物に閉じ込めなければ、何時まで経っても同じ事の繰り返しだ。

当然、消耗戦になればこちらの方が圧倒的に不利。

「ギ……ギ……チビ、キサマ、何を！」

再び液体になって逃げ出そうとするムジナを私は逃がさない様に、一筋も残さぬよう一気に飲み込んだ。

酷く不快だ。

ムジナは中から私を逆に喰おうと暴れている。

「芳華！！時間が無い、早く……早く……ムジナを……私ごと消して！！早く……！！」

吐き出しそうになる黒い液体。口を押さえて、無理矢理押さえ込む。

「早く……！！」

呆然とした表情を芳華は素早く引き締め、胸元から一枚の札を取り出した。

「……分かったわ」

あの札は、いつか私が芳華に渡した物。

「止める、芳華！！一体、何を……！！」

札を見るなり、凧の顔色が変わる。

「何も。……ただ、私は約束を守るだけ……」

淡々と芳華は立ち上がり、辛い痛みを堪える表情で私へ歩み寄る。

「芳華！！まさか、その札！」

凧が崩れる膝を押して、芳華の腕へ絡みつく。

「京にそれを使うな！！止める……！！」

「放しなさい！凧！！アナタなら、分かっている筈よ？」

「嫌だ！！お前に、京を消させるものか……！！」  
パン。

鋭く響き渡る音。

「……いい加減にしなさい、凧。分かっている筈よ？アナタなら……ね」  
無表情で冷たく言い放つ芳華。凧はそれを静かに受け止める。

「……ああ、分かっているさ……！！だから、お前になんてやらせはしない。それは俺の役目だ！オレだけの……！！……退けえ！」

凧は私の下に跪いた。

「京。何度も言っているだろう？俺は……お前の願いを叶える為だけ

に居るんだ。言え、お前の願いは何だ？」

凧の痛くなる程の悲しい顔。

「私を……」

そんな顔をされると、私も悲しくなるよ……凧。

「私を……」

別の言葉を言いたくなる。

もっともつと凧の傍に居たい。

「……消して。私の最後の我が儘。私は凧のお陰でこんなにも長い間、人として生きる事が出来た。だからこのまま、私が私で居るうちに……お願い」

凧は無言で頷いた。

腹の中で暴れるムジナは、次第に私を侵食し始める。

「早く……もう、抑えられなくなる……」

「分かった」

凧は芳華から札を受け取り、もう一つ何かを受け取った。そして、右手で私の左掌に指を絡めると、微笑んだ。

「京、お前が行くところなら、俺はドコにでも行く。……一緒に、

行こう」

「凧……」

涙が溢れた。

凧は私の掌と自分の掌を芳華に貰ったワイヤーでしっかり結び付ける。

「凧、ありがとう」

私は凧の小さな胸に額を押し付けた。暖かな鼓動がしっかりと優しく伝わってくる。

凧は呪を唱え、印を切る。

ありがとう凧。

私は幸せだった。

人間として凧の傍で暮らした時間、とても幸せで、幸せで、幸せで……。

だから、凧……今度は凧が幸せになつて。

私はもう十分、素敵な夢を見る事が出来た。そして、何よりも最後に凧の腕の中で迎える事が出来る。それでいい。私の夢は、幸せなまま終える事が出来る。

凧が今まで別れ際に言ってくれていた最後の言葉。

それを今度は私が。

「……愛してる。愛してるよ、凧」

私は凧の掌と繋がっているワイヤーを切り捨てた。

ここから先には凧を連れては行けない。

行くのは私とムジナだけ。

夢はいつか終わる。

でも、満たされたこの気持ちのまままで終えるなら悪くない。

凧、芳華、みんな……ありがとう。

さようなら、凧。

痛みも何もない、目が眩む光に包まれて次第に薄れていく意識。

けれど、私の目には最後まで凧の輝く笑顔だけが見えていた。もし

……もう一度だけ願いが叶うなら、私は凧と……。

第十三幕：終劇（後書き）

いよいよ、次回で最終話になります。どうぞ、今しばらくお付き合  
い下さい。

## 幕引き：凧ノ肆

あの日……。

京が俺の前から消えて、ちょうど今日で十七年。

あれから直ぐ芳華は仙道の当主を正式に継ぎ、同時に結婚をした。そして幸人は神主である義父の後を継ぎ、俺は義父の裏の仕事…退魔の仕事を継いだ。

やがて時は流れ、何時しか幸人も人の子の親となり、目に見える周りの景色も何もかもが変化を遂げた。

だが俺は……。

心の奥底で熾火あかひの様に燻り続ける心の痛みは、俺を中から蝕み続ける。

叶わないと知りながら、未だ流れる事のない涙に一縷の望みを持つてしまう。

俺はそれだけにしがみ付いて、しがみ付いて、なおも縋り付いて離れられない。

京が消える寸前の笑顔が、脳裏に焼きついて離れない。胸が焦がれて、中から俺を焼き尽くしてしまっそうだ。

俺は深い溜め息を吐き出すと、ポケットからタバコを取り出し、啜すすえて火を点ける。

京を忘れるなどあり得ない。

どんなに時が経とうと、声も顔も全て何もかも克明に思い浮かべることが出来る。しかし、いくら克明に思い描く事が出来ようと、触れる事だけが二度と叶わない。

その現実には余りにも残酷で、確かに俺の中にあつた何かを……空っぽにした。

もしあの時、芳華が俺を止めなければ、俺はこうして息をしている事はなかった。

『凧、言っておくけど、アナタが今思うことを京は望まない。それ

に、ムジナに心の記憶を無理矢理呼び起こされた幸人くんは、不安定……。もし、少しでも義父や義母に恩義を感じるなら、幸人くんを生きて、支えなさい。分かったわね？」

俺には選択肢など残されていなかった。

そして、芳華は俺に次々と……それこそ息を吐く間もない程の仕事を寄越した。繋ぎは必ず芳華の式が寄越され、仕事の様子を最後まで見届けてから消える。

この十七年、俺はそうして生きてきた。

でも、もう限界だ。

「……………」

いや……とつくの昔に限界を超えているんだ。

俺は珍しく芳華に呼び出され、そこへ向かう途中で公園のベンチに腰を下していた。

逢うのは、そうか……十七年ぶりになるのか。

約束の時間はとつくの昔に過ぎ、俺は一箱分のタバコを吸い終えていた。さつき火を点けたのは新しい箱の一本目。

ジジジ……息を吸い込むたびに、タバコの燃える音がする。

そこへ、頭上から若い女の声が降ってきた。

「あの……大丈夫ですか？」

「……………」

俺は首を上げるのが億劫で、ゆっくりと視線を上げた。初めに見えたのは、黒い革靴と紺色のハイソックス。続いて制服だろう短めのスカートとそれを押さえる手。

秋の冷たくなった風が少しだけ強く吹きつけている。そこに懐かしい匂いを感じて、俺は慌てて顔を上げた。

そして俺は、驚きの余り思わず啞えていたタバコを落としてしまった。

目の前にある顔に、どこか見覚えがあった。

少女の黒目がちの大きな瞳が、心配そうに俺の顔を覗き込んでいる。長い艶やかな黒髪が、フワフワと悪戯に風に踊る。

どこかで見た同じ様な光景。頭の中がゾワゾワとむず痒く、どこかへ引き戻される錯覚を起こさせる。

京？

まさか、いや、そんな筈はない。

「あの…泣いて、るんですか…？」

「……いや」

否定の言葉を言おうと口を開きかけるが、俺の目からはスルリと一滴の水が零れ落ちた。

「……？」

これは……。

少女は俺へどうぞ、とハンカチを差し出した。

「あの…ごめんなさい、なんだか声かけ辛くて……母が呼んでます」  
「母？」

眉間に思わず皺が寄った。彼女は両手を胸の前でしきりに交差させて振りながら、慌てて言葉を繋ぐ。

「えっと、その、私の母は仙道芳華です。私は娘で京華きょうかって言います」

「娘……」

芳華が結婚したのは知っている。だが、子供を生んだと聞いた事はない。

京華が、不安そうな瞳を尋ねるように俺へ向ける。

ふと、俺は無意識にその頬へ誘われるように手を伸ばした。

震える指先が熟れた白桃の様な頬へ触れる。

「……？」

それへ彼女は答える様に小首を傾げる。その仕草がどこか酷く懐かしく、胸を締め付けた。

その時『ただいま、風』と、京の声が耳の奥に響いた気がした。

「……つたく、芳華の奴……」

俺に出来なかった事をやりやがった。

指先に感じる温もりが、確かな存在を俺に伝える。

例え……全てがなかった事になったとしても、出逢う事さえ出来たのならばまた、そこから始めればいい。  
「はじめまして、お嬢さん。俺は凧、よろしく」

そして、時は再び巡る……………。

## 幕引き：凧ノ肆（後書き）

ここまで読んで下さった皆様、長い間ありがとうございました。

この回で『鬼のユメ』は完結です。

案外、ハッピーエンド？見たいな形になったのが私でも意外でした。最初予想していたのと、少し違うかもしれませんが（苦笑）

また、この作品は長編と云うだけでなく、私の中で色々なチャレンジを盛り込んでいました。

ですので、読み辛い時も在ったかも知れませんが。申し訳ありませんでした。

この作品を通して、己の未熟さを痛感致しました。これからも、更に精進していきます。（誤字や脱字はこれから直していきます。申し訳ありません……）

最後にもう一度、本当に読んで下さって心より感謝とお礼を申し上げます。

また別の作品で読んで下さった皆様とお会いできればと思っております。

ありがとうございました！！

## エピローグにしてプロローグ（前書き）

これは、最終話として書いた物の一つです。

この『鬼のユメ』では、全ての登場人物に一幕持たせていますので、京華にも……と思った私の我が儘です。（笑）  
よろしければ、読んでやって下さい。

## エピローグにしてプロローグ

学校から帰ると、珍しく母にお使いを頼まれた。

「下の公園で、死にそうな男を連れてきて」

「……？」

「行けば分かるわ」

楽しげに微笑む母に私は少し驚いた。

だって毎日毎日、母が悲しそうな、苦しそうな顔で式を使っている姿が目には焼きついているから。

今日で私は十六になる。でもその間、私の記憶のある限り今まで母がこんなに楽しそうに笑ったのを見た事がなかった。

しかも、母が誰か人と会うなんて…驚きだ。私が知っている限り、母は私とお父さん以外の人とは決して会わない。

どうしても会わなければならぬ時は、自分の姿を模した式を代理に立てる。

お父さんが言うには、車椅子に乗っている弱った自分の姿を見せたくないのそうだ。もしそれが知れば、他の人たちにとって母を蹴落とす材料になりかねないから。

あと驚いた事がもう一つ。

私が出かけるのに、母が初めて式をお供に付けなかった。

それは私を一人前と見てくれたのか、それとも別の何かの考えがあるのか……。けれども、名実共に一人きりの生まれて初めての外出。

少しワクワクする。

「行って来ます！」

母の部屋を勢い良く飛び出す。その時、母の宝物であるカラクリ時計が寂しげなメロディを奏でていた。

部屋を後にした勢いで玄関を抜け、大きな門をくぐり、坂道を下って突き当たりの丁字路を左に曲がると、目的の公園。

高台にあるこの公園は、とても夕日が綺麗で私は大好きだ。遊具も殆んどない小さな公園だけど、空はどこまでも広く、眼下に広がる町もおもちゃのようで可愛い。

私は鼻歌交じりで何時もと同じ様に公園に足を踏み込もうとしたところがその瞬間、異様な雰囲気ビクリと体が震える。

何て言うのか…とても悲しくて…空気の全てが涙を流している…  
…そんな感じ。

ゆっくり視線を廻らすと、ベンチに一人の男の人が座っていた。確かに、母が言った様に『今にも死にそう』といった表現がぴったりの人が居た。

全く精気を感じられない、立てば背が高いだろうその体を、小さなベンチで丸めてタバコに火を点けている姿は一種異様だった。

風が強く吹き付けて隣にあるブランコを揺らし、その人の髪を酷く乱しても、その人はひたすら機械的にタバコの煙を吐き出す。

暗く、どんよりとした目はこの世界の物を一切映していないみたいだ。果たして、私が声を掛けても大丈夫なのだろうか？

とにかく私はゆっくりその人に近付き、声を掛けるタイミングを計った。

「あの…大丈夫ですか？」

私の声に反応し無言でノロノロと上げられる視線。

そこへ秋の冷たくなった風が少しだけ強く吹きつけて来た。するとその人は驚いたように、がばつと顔を上げ、私を見るとあんどりと口を開けて啞えていたタバコを落とした。

そして声を掛けるまで無表情だった人が、面白いほどにくるくると表情を変えて行く。ちよつと整った顔立ちなだけに、差し迫った妙な迫力があつた。

けれどもやはり、最後は悲しげな顔に落ち着き、苦しそうに眉根を寄せる。

「なんだかそれは…私の目には泣いてる様に見えた。」

「あの…泣いて、るんですか…?」

そう声を掛けた瞬間、その人の目から、スウツと一滴の涙が零れた。本人も驚いたように流れた涙に触れて、凝視する。

私は慌ててポケットからハンカチを取り出して、どうぞ、と差し出した。

「なんだか、とても気まずい雰囲気だ。」

私はとにかくこの場の流れを変えたくて、母の伝言を口にしてみる。

「あの…ごめんなさい、なんだか声かけ辛くて…母が呼んでます」とすると、その人は『母?』と呟いて眉間に皺を寄せた。私は更に不味い気分になり、思わず両手を胸の前で振りながら、慌てて言葉を繋いだ。

「えっと、その、私の母は仙道芳華です。私は娘で京華って言います」

「娘……」

またぼそりとそう呟くと、私の顔を凝視する。どうしよう、次の言葉が見つからない。

しかも、この人…なんて言うんだろう?不思議と前から知っているような、とても懐かしい感じがする。

でも私の記憶の中では、こんな海外のモデル見たいに背が高く、綺麗な顔をした人は居なかったと思う。

知り合い、なのかな?

尋ねようかどうか迷いながら見ていると、突然その人の震える指先が私の頬へ触れた。

「……?」

「なんだろう…とても変な感じ。」

胸の中が騒ぐような、どこかに引っかかって思い出せない答えを考えているような気分。

その人は悲しくて嬉しそうな、複雑な表情で呟いた。

「……つたく、芳華の奴…。はじめまして、お嬢さん。俺は凧、よろしく」

ドキン、と胸が鳴って、一気にカアツと顔に血が上った。

「あ、ハイ」

変だ、私、変だ。

真っ赤になつた顔を隠すように、傍を離れる。

「あの、凧さん！そろそろ母の所に行かないと……」

「あー…うん。また、どやされるな」

凧さんは面倒臭そうに頭を掻いた。

「い、行きましよう！」

スタスタと歩き出した私の後を凧さんがゆっくりとした足取りで着いて来る。心なしか、先ほどまでの悲しい雰囲気がちよっとだけなくなつた気がした。

理由は良く分からないけれど、私はそれに少し安心する。

私はこの日を一生忘れない。

母が私の誕生日にこの人…凧さんと呼んだ理由、そしてこの出会いが私のこれから歩む人生を大きく左右したことも。

しかし、その話はまた別の時に……。

## エピソードにしてプロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

なんだかこの先、続きそうな勢いでしたが、予定は今のところありません。（汗）

読んで下さってありがとうございます！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1239c/>

---

鬼のユメ

2010年10月8日11時31分発行